

從軍講談師 森林黒猿講演

北清事變

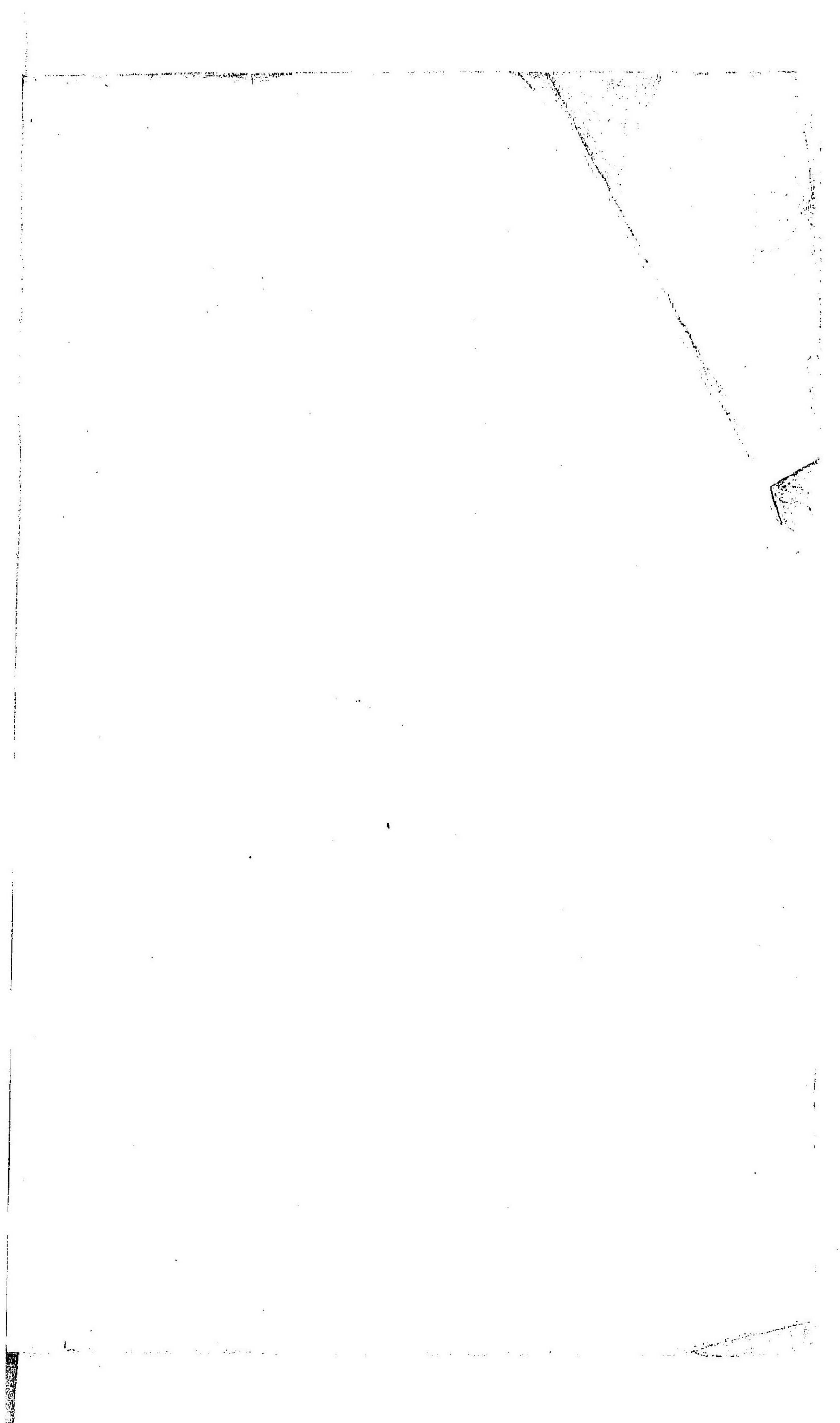


東京 田村書店發行

巻の橋板

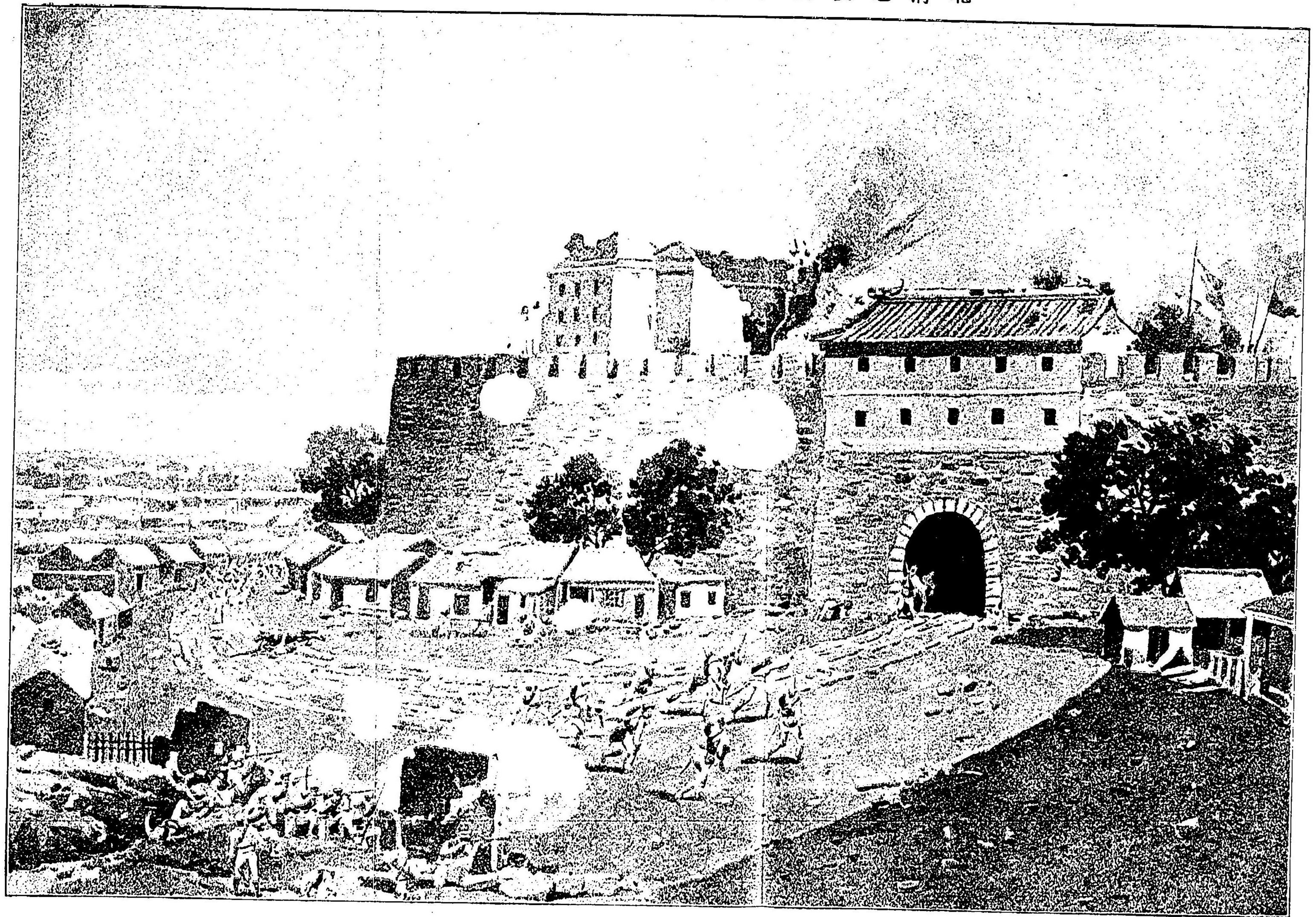








北清之役我軍先登北京總攻之圖



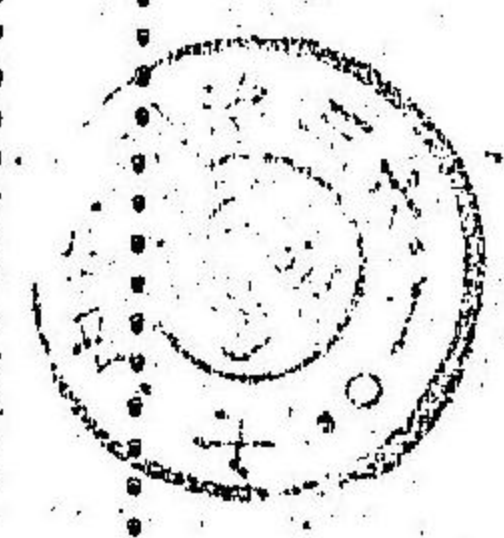
從軍画家 東條鉦太郎君實寫



74 276 101

第五編 目錄

百五十六回	我が先頭兵厩夜に突撃す火薬局占領の事	一頁
百五十七回	我が司令部の前進、グリスリー將軍日本軍の勇敢に驚歎す	一五
百五十八回	唐家灣の占領、大樗大尉負傷の事	二三
百五十九回	山川少佐の負傷、木内大尉戦死の事	三四
百六十回	敵の地雷火、清兵逆襲の事	四五
百六十一回	砲兵の進戦、田邊少佐先登の事	五一
百六十二回	露國軍の逆戻り、騎兵隊の運動	五九
百六十三回	白河の壅塞を破壊す、支那婦人を救ふ事	七一
百六十四回	従軍記者の負傷、彈藥縦列	八一
百六十五回	楊村の攻撃、露軍狡猾の事	九一
百六十六回	我軍援驅して、南榮村を占領する事	一〇〇
百六十七回	楊村の大會議、福島將軍の激論	一一四
百六十八回	日露兩軍先陣を争ふ事	一二九
百六十九回	糧食の困難、裕祿自殺の事	一三九

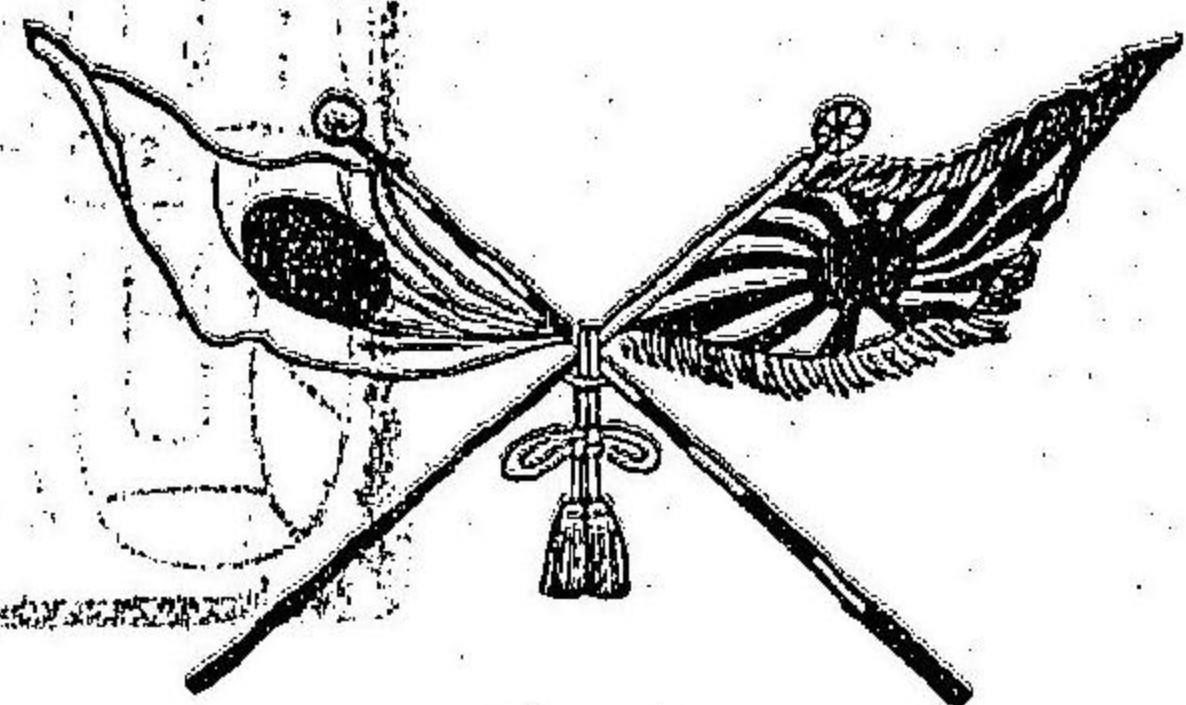




- 百七十回
- 百七十一回
- 百七十二回
- 百七十三回
- 百七十四回
- 百七十五回
- 百七十六回
- 百七十七回
- 百七十八回
- 百七十九回
- 百八十回
- 百八十一回
- 百八十二回
- 百八十三回
- 百八十四回

獨立騎兵隊先發の事	一四七
北京より密使來る事	一五六
船舶を乗收する事	一六九
山口師團長狙撃に遭ふ、清國輿の話	一七三
斥候兵の大膽河西務占領、捕虜を訊問する事	一八六
燒附の奇譚馬頭の占領、山口將軍敗卒を憐む事	二〇一
張家灣の攻撃、露國兵不規律の事	二一一
李秉衡の自殺、彌子瑕の古事	二二一
通州攻陣の軍議の事	二三一
村山工兵少尉左岸を前進す少尉途に迷ふ事	二三八
御上村運吉驢馬を得る事、義和團徒少尉を犯ふ	二五二
村山少尉復讐途に迷ふ、工兵隊の疲勞の事	二六二
工兵隊通州の南門破壊を命ぜらるゝ事	二七〇
通州の米倉を占領する事	二七六
森岡聯隊長八里橋を占領する事	二八二

74  
276  
特 10  
101



北 清 事 變  
**日 本 の 旗 風**  
第 五 編 救 援 之 卷

從軍講談師 森 林 黑 猿 講 演

【百五十六】

茲で一ツ軍隊區分を演べて置いて、それから出發に取巻る事と致しませう

▲左衛隊 塚本旅團(火藥局方面へ向ふ)

前 衛

歩兵第廿一聯隊(一大隊欠)聯隊長竹中大佐工兵一小隊  
本 隊



歩兵第廿一旅團司令部  
 歩兵第二十二聯隊の第三大隊  
 歩兵第四十二聯隊、聯隊長渡邊大佐  
 工兵一箇中隊(一小隊欠)  
 砲兵第五聯隊(一大隊大部欠二箇中隊欠)  
 衛生隊半部

▲右翼隊 眞鍋旅團(唐家灣方面へ向ふ)

前衛  
 歩兵第四十一聯隊の第二大隊  
 本隊  
 歩兵第四十一聯隊の本部及第三大隊  
 工兵第三中隊  
 野戰砲兵第十六聯隊の第一大隊(一中隊欠)  
 歩兵第四十一聯隊の第四中隊  
 騎兵第五聯隊の第二中隊

衛生隊半分

▲左側支隊(韓家樹方面へ向ふ)

歩兵第十一聯隊の第三大隊  
 ▲師團豫備隊  
 歩兵第十一聯隊の本部と其の第一大隊  
 工兵の大隊本部と其の第一中隊

▲天津守備隊

歩兵第十一聯隊の第二大隊及び歩兵第十二聯隊の第三大隊(一中隊欠)  
 騎兵一箇小隊  
 臨時守備砲兵隊(分捕砲)  
 ▲白塘江派遣隊  
 歩兵第四十一聯隊の第一大隊(二箇中隊欠)

先づ軍隊区分は右の如くして、そこで又た子牙河に橋梁を架さなくてはなりません。紅橋と云ふ赤色の橋は一個架してありましたが、外國軍も進みますゆゑ、速に我が軍隊が、残らず其の紅橋から進軍すると云ふ事は、混雜して出来ませんゆゑ、それで紅橋より上流の方へ二個所に架橋するやう、工兵に命じま



したから工兵第五大隊は二三日前から橋梁を架しそれから土手を壊して、而うして行進の便利を計り、橋の側には洋燈を點じて、橋と道路の分るやうにして澄々の準備まで致します。サテ八月四日夕刻より先づ英米の軍隊は我が軍に先んじて運動を起しましたが、二國の軍隊は紅橋を通過して行進し、米國軍は地圖に在る如く、西沽の北端に集合しますると、英國軍隊は其の西方に集合しました。我が軍隊は先づ前哨兵として、歩兵第十一聯隊の第三大隊、則ち村山少佐の率ゐる隊は、英兵に些しく後れて、居留地を出てましたが、我が工兵の架したる橋を渡つて行進しますると、間もなく真暗になりましたから、此の暗夜を利用して、前哨を張るのでムいですが、村山大隊長は部下を誂めて言ふに本隊は戦闘前哨を張るのであるから、汝等其の心算で前哨線に入つたならば、沈黙を守り、息を殺して居らんければ不可んぞそれから敵の間諜が忍んで來るかも知れんに由つて、氣を附けて居れ、何でも怪しい奴と見たら、直ちに捕虜として了へ」と思う訓令しまして、靜かに進み、前哨線を張りました。即ち土手を壊として、其の南方から子牙河の北岸まで、我が村山大隊長が前哨線を張ると、英國軍は又土手を壊として、其北方から丁字沽の南端まで前哨線を張りました。山口師團長は中川參謀を呼んで「君は前日、火藥局方面へ偵察に行かれて、彼の邊の地理を知つて居るから、前哨の所に行つて、集合の事に盡力されい」と命令されましたので、中川參謀は領承して、前方に進み、村山大隊長と協議せられて、種々盡力されて居りまするが、其の中に右翼左翼の兩隊逐漸に出發致しまする。師團司令部は午後十時に至つて、海く舎營地を出てしますると、此時恰も月は東天に出かゝりまして、微かに北

海の原野を照しますが、未だ薄暗いから、注意に注意をしつゝ進行します。然るに十二時頃になりしますると、空は曇つて、再び真暗となりましたが、間もなく雷は烈しく鳴り響き、瀧の如き大雨がザザツと降つて參りまして、殆んど一時間ばかりは些しの場間もなく實に物凄ゝ位つてムります。師團長始めとして將校兵士等、皆頭からビシヨ濡れになつて居りまする。前哨にて敵の間諜らしき者を三名捕へて、司令部へ送つて密越しましたから、直ちに通譯官をして訊問させました。『コレ、爾等は敵の間諜であらう、有の儘に白状せよ』と云ふと、捕虜は『さ、私共は決して間諜などではムしません、此の土地の百姓でムします。萬望を免しを願ひます』と云つて、頭を地に着けて、頻りに赦免を請ひまするが、通譯官は大喝一聲「黙れ、汝等如何に偽ると雖も、敵の間諜なる事は知れ切つて居るから、有體に白状すれば、命を助け遣はすし、他までも偽れば、斬つて了まが、怎麼ぢや、助りたいか、殺されたいか』捕虜「それは最う助かりたうムいます、それですから決して偽りは申しません』捕虜「それでは敵の間諜でないとして、土地の百姓と見做して遣すが、支那兵は多く何の邊に居る』捕虜「北倉揚村から王庄、火藥庫、韓家樹等に澤山居ります』と言つて、此邊の地形等を包まず演ぶる所を以て見ますると、敵の間諜とも見えず、全く此邊の土人らしいが併し今此奴等を赦免すると如何なる事を爲すや敵に我軍の状況を告げるかも知れませんが少時縛して置きました、時に左翼隊長塚本少將閣下は、部下の重立ちたる諸隊長を集め、訓令して言ふに「諸氏は今更言ふまでもなく心得て居らるゝてあらうが、夜間の戦闘も、無暗に射撃しても、徒らに彈丸を費消するのみ



にして、何の効力もないから、射撃は一切行らぬ事として、敵に衝突したら、銃剣で突撃し、敵を撃退するのが得策である、何でも夜明けまでに火薬局、及び韓家樹を占領して、夜が明けたらば、北倉の攻撃に取懸るやうにせんければならぬから、其の心算で行られい」と斯の如く言ひ渡しましたが、此時恰も雨は止んで参りまして、午前一時半の頃となりましたから、いよいよ前進する事となりましたが、道は狭い見えてあることは言ふものゝ、眞暗の中を進むのであるし、殊に道路は凹凸して居て、加ふるに草が生え茂げつて居る、極めて歩行に困難なる所ゆゑ、何でも土堤にさへ附添ふて行進すれば間違ひないから、土堤の南方を土堤に附いて進むやうと訓令し、前兵隊長たる歩兵第二十一聯隊の第一大隊長、少佐新妻英馬君は、其の部下大隊を率ゐて行進を始めましたが、是より前隊め其の部下第三中隊長大野大尉に命じまして、約五十米突ばかり離れ、前の方を行進させます、是は所謂前兵支部として行進させるのですが、互に見失ふと不可せんゆゑ、其の中間へ十名ばかりの兵を入れて、聯絡を取りつゝ進軍致します、又別に左側隊として、歩兵第二十一聯隊の第三大隊長少佐、佐本壽人君をして、其の部下を率ゐる韓家樹の方へ向はしめます、幾干静肅にして行進しやうと思ひましても、馬は嘶くし、足音は聞ゆるし、爾う些しも物音をさせずに進軍すると云ふ事は、逆も出来ないのであります、二時五分の頃に至りまして、敵の前哨線たる二軒家、即ち土堤の上に二軒の家を並び居る所から、敵丁此方まで進みますると、敵は物音を聞附けましたか、我れに先んじて撃ち出しました、斯くと見るより我が前兵隊長新妻少佐は、大聲に「敵は最も寡いぞ、突込め！」

と號令しました、我が兵士等は豫ての訓令にて、暗夜に撃つも何の効力なきゆゑ、敵に衝突したら直ちに突込む事と覺悟して居りますので、先に立ちたる兵士等は、齊しくウワアツくと喊聲最も勇ましく突進しましたが、是が盡ておりましたなら、後方から見居て、何の位勇ましいか知れませんが、必ずや後より續く英米の外國兵をして、驚嘆させたに違ひないですが、惜いかな暗夜の事とて、唯我が兵士等の突進する其の喊聲と、敵の銃聲とが相和し相混じて、聞ゆるのみでありまして、何と云ふ兵士が第一番に突進したやら、何と云ふ將校が如何なる勇敢の舉動ありしや、些しも分らなかつたのであります、唯前兵隊全部が最も勇猛に突撃したと云ふより外致し方がありませんが、何しろ敵は驚いたに違ひないです、如何に我が軍隊が勇敢なりと雖も、敵に出會ふや彈一發も撃たないで、眞暗の中をイキナリに突撃するとは、殆んど亂暴と云つても可い位であつて、恐らく他の外國兵には是は逆も出来まいと思ふです、されば二軒家の附近に居たる敵は、皆周章狼狽して、我れ先にと逃げ出してしましたから、我が前兵隊は忽ち此處を占領して、新妻大隊は土堤の北方に入つて了ひましたが、是が爲に隊が入り亂れて了つて、暗さは暗し、實に困難でありませ、そこで新妻大隊長は先づ兵を纏めて、そうして火薬局へ攻め蒐る心算ですから、部下の中隊長、小隊長をして兵を纏めさせます、即ち喇叭を吹して集合喇叭を吹奏せしめ、漸く散亂したる兵を纏めました、茲に於て新妻大隊長は部下一同に向ひ「我が大隊は好く司令官の訓令を守り、此の暗夜に敵に出會つて、一發も撃たず、直ちに突進して、敵を撃退せしめたのは、寔に勇ましい事であつて、本隊の名譽であつた、併し今



撃退した敵は、彼箇は敵の前哨であつて、僅少な兵數であつたから、何の苦もなく撃ち退くる事を得たのであるが、是から向ふのが火薬庫であつて、可成優勢な敵と見做さんければならぬし、又た火薬庫の建築とても、相應に堅固に出来て居るらしいのであるから、敵を決して恐るゝ事はないが、又た悔つてもならぬ、それて未だ暗夜の事であるから、矢張り撃つても益がないゆゑ、火薬局に達するや、直ちに突進して占領せなければならぬ、今度は大隊長、各中隊長、等皆先に立つて進み、爾等先に従つて進み、成るべく散亂しないやうにせい……サア此の勢に乗じて、一舉に火薬局を占領するぞ……前へツツと勇ましく號令して、新妻大隊長、自ら真先に進みますると、是に續いて各中隊長は部下を率ゐて進軍します、敵もそれと察したるか、火薬局の中から最も烈しく射撃し出しましたが、我が軍隊は毫も屈せず、雨霰と飛び来る彈丸を事どもせず、遂に火薬局の土手下に達しましたのは、三時些し過る頃でムいました、

此時左側隊として行進中であつた歩兵第廿一聯隊の第三大隊、少佐佐本壽人君は、韓家樹を目的として進んで居ると、右手に方つて銃聲が烈しく聞えて參りまして、ウアーツツと云ふ喊聲が頗る盛んに興りましたので、佐本少佐は是を聞いて『ヤ、是は新妻大隊は、火薬局へ己に突進したな……ム、是は頗る激烈ぢや……ム、益々猛烈ぢや……好しツ、本隊も火薬局へ向はう、此の様子では餘程激烈ぢやから、獨斷專行で行らう』と、佐本少佐は獨斷を以て、俄かに行進の方向を變じて、火薬局の前面に向ひましたるに、敵は此の方向から我が軍が前進するに違ひないと見たのか、十分に其の準備を爲し、土堤の南方の畑なる麻高梁

等を刈つて射撃に便利なる様にして置いた所へ、斯くとも知らず佐本大隊は、勇みに勇んで進み來つたから、敵はそれを見るより土堤上の掩堡中より一齊に烈しく撃ち出したから堪りません、佐本大隊は見る／＼間に多くの負傷者を生じまして、ベタリ／＼と倒れます、何しろ距離近くして、加ふるに敵は連發銃の最も銳利なる武器を携へて居て、撃ち出されましたから、我兵頗る苦戦に陥りました、されども大隊長佐本壽人君は、音に聞えし勇猛なる人でありましたから、些しも屈せず『突込め／＼』と聲を囁らして號令しつゝ、勇進致しまするので、部下の中隊長、小隊長は云ふに及ばず、全隊の兵士等、我が戦友の撃ち斃されるを見て、憤慨しつゝ、勇進致します、然るに此時前衛隊指揮官たる歩兵第廿一聯隊長竹中大佐は、後方に在つて前衛隊の戦闘状況如何を氣遣つて居りますと、意外に敵は頑強にして、容易に火薬局の占領が出来ない様子でムいますから、竹中大佐は副官大尉佐藤彦人君に向ひまして、大佐『是は勿々頑強に抗敵し居るなア』『左機でムいます、案外に頑強です……聯隊長殿左側隊も戦り出したやうでムいますな』大佐『ム、獨斷で方向を變じ、火薬局へ向ふたかな……益々激烈になつた、是は最う一個大隊増加して見やう』と、竹中聯隊長は其の部下第二大隊長少佐西山敏君に向ひ『オ、西山少佐、君の部下を前兵の左翼に増加せられ』と命じましたので、西山大隊長は直ちに部下を率ゐ、馳せて前兵隊即ち新妻大隊の左翼に増加し、土堤の左方から突進しましたが、それでも敵は頑として勿々容易に退却しません、旅團長塚本少將は後方に在つて、此の銃聲と喊聲とを聞き『是は容易に占領出来ないやうぢや一個大隊だけ前衛に増加して遣れ』と茲に於て歩



兵第四十二聯隊の第二大隊長少佐杉岡直次郎君をして、其の部下を率ゐしめ、西山大隊の後方から突進せしめました、故に新妻大隊、佐本大隊、西山大隊、杉岡大隊の此の四個の大隊を以て、無二無三に突撃したから敵も堪り兼ねましたが、併し斯の如く夜中突撃すると云ふ事は、滅多にはない事であつて、殊に外國人には迎も行れる事でもいけませんゆゑ、英米の人々は餘程驚いたさうであつた、中には日本軍人は亂暴だなど、悪口を言つた外國人もあつたと云ふ事でもあります。

前に演ぶる如く、四個の大隊にて無二無三に突込んだから堪りません、敵は餘程驚いたと見えまして、ハヤ逃出しかりました様子です、併し暗夜の事ゆゑ、全く逃出して了つたのか、それは確と分りませんが、何しろ我軍の勇猛なる襲撃に堪へ兼ねて火薬局は忽ち棄て了つたには違ひないですが、我軍も亦た眞暗ゆゑ大事を取つて、無暗の中へ進入はしません、唯側まで突進しただけで止まりました、是は未だ四時前の事でもいしましたが、是からは透さず劉家白渡口を占領して、さうして直ちに韓家樹に向はんと、四個の大隊長は各々同じ思ひであります、先づ土手の上に集まつて互に『目出度う』『イヤ萬歳く』『意外に火薬局は早く取れて、幸福であつた』などと銘々口々に喜びを演べましたが、其中に敵の方からは速射砲を撃ち出したので、ズドン／＼と凄まじき音響がして、砲弾は我が集合地の附近に落下します、斯る暗夜の事ゆゑ能く分りませんが、多分劉家白渡口の方向から撃ち出したに違ひないと云ふ事だけは、大體想像が就きますので云います、斯る處へ聯隊長、大佐竹中安太郎君も来りましたゆゑ、四人の大隊長は聯隊

長の下に集合しまして『大佐殿、お目出度う云います』『大佐殿、萬歳です』大佐『イヤ萬歳く、敵は頻りに砲撃を行つて居るが此の暗夜に無暗に砲撃するのは、随分亂暴ぢやない』少佐『多分周章狼狽して撃り出したでせう』大佐『爾ぢや、彼等も正可日本軍と雖も此の暗夜に突撃はしまふと思つて居たのが、行つたので、爾も一發も撃たないで、突然突撃したから、餘程驚いたであらうサア是からは劉家白渡口に向つて前進せられ、未だ何しろ此通り眞暗ぢやから、矢發一發も撃たないで、直ちに突撃して了へ』と命令しました、そこで又もや劉家白渡口に向つて、眞暗の中を無二無三に進撃する事となり、聯隊長竹中大佐は、其の兵の部署を左の如く定めました

- ▲第一大隊、即ち新妻少佐の率ゐる隊は、中央隊と爲つて土堤の上を前進す
- ▲第二大隊、即ち西山少佐の率ゐる隊は、左翼と爲つて土堤の南を前進す
- ▲第三大隊、即ち佐本少佐の率ゐる隊は、右翼と爲つて土堤の北を前進す

而して四十二聯隊の第二大隊、即ち杉岡少佐の率ゐる隊は、豫備隊と爲つて、其の後方から進むと、斯の如く部署を定めました上に、又別に左側支隊として、歩兵第十一聯隊の第三大隊、即ち村山少佐の率ゐる隊を左の方から進め、都合此の五個大隊を以て劉家白渡口と韓家樹とを、夜の明けぬ中に占領して了はんとの意氣込みで云います、併し火薬局の中には、未だ敵が残つて居るらしいけれども、眞暗で無暗に這入れないから、其儘にして置いて、斯の如く前進するのです



全體日本の將校兵士が廿七八年の役から支那軍隊を馬鹿にし切つて居たればこそ、暗夜に突貫するなどと云ふ様な、殆んど無鐵砲と云つても可いやうな戦争を行つたのでムいですが、それでなくては逆も此様な事をやり得るものでなからうと思ひます、尤もそれは外國の戦史を見ると、夜中突貫と云ふ事のないではないが先づ此様な事は稀であると云ふ軍人の方の話してムいます、サテ劉家白渡口に向つた我が五個大隊の將校兵士は、彈こそ一發も撃ちませんが、ウアーッ〜と云ふ吶喊の聲は最も鋭く、恰も大浪の押寄するが如く、又た疾風の地を捲いて来るが如くに突進しましたから、敵は又もや堪り兼ねたと見え、二門の速射砲は劉家白渡口へ通ずる土境の上の掩堡に残した儘、散々になつて敗績して了いましたから、我軍は是を分捕つて見ると、實に好い速射砲であつて、今こそ我國も速射砲があります、未だ其時は勿々速射砲はなくして、武器の上から云へば、逆も及ばなかつたのであります、それでですから我が將校等は是を見て「怎麼だ、君、此様精緻な武器を有して居て、是で負けるとは情ないぢやないか」爾ぢや、是を以て見るも、軍事にせい何にせい、器械的ばかりぢや不可んなア、之を運轉する其人の如何に依るなア」など言ひつゝ、又もや進んで劉家白渡口と韓家樹と兩方面に向ひましたが、未だ此の二個所に達せざる前、東天稍白み渡つて、四方薄明るくなつて参りました、是より前、塚本旅團長は、後方に在つて頻りに心配して居られました、側には四十二聯隊長、渡邊大佐も居られまして種々お話しになりながら、徐々と馬をお進めになります、少將ハテ今の突貫で、火藥局は占領されたに違ひないと思ふが、未だ聯隊長から何とも報告のない所を見ると、占領

されないかな」渡邊「イヤ、彼の突貫が甘く行かぬ理由はないですから、必ず占領されたです…ヤア又た行り居ります〜」少將「ム、成程、して見ると最う韓家樹へ向ふかな」など語りつゝ、益々進んで参ります、漸く夜は明けかゝつて來まして、茫々漠々たる北清の原野が、朝霧の爲めに蔽はれ、此處彼處が微かに見ゆると云ふ様な光景でムいます、スルと此時塚本少將閣下の側に在りたる副官舟橋大尉(芳藏)は「閣下我軍は已に彼處まで進んで居ります、アレ彼處を最う占領して居ります」と叫ぶやうに報しつゝ、其の方面へ指しました、塚本少將馬上双眼鏡を把つて、信と其方面を凝視すれば、勇ましくも我が廿一聯隊旗は、朝霧の霽間より翻々として風に翻つて居ります、塚本將軍始めて滿面に微笑を洩らし「ム、最う彼處まで進んだか、意外に早かつた…此の北清の原野に於て、朝霧の霽間から我が日章旗を見るのは、實に愉快ぢやなア」と言はれて馬を駐めて少時餘念なく見詰めて居られます、そこで既に火藥局の占領されて居る事も明かに分りましたゆゑ、是に兵を入れんと塚本旅團長は思召しましたが「併し未だ殘兵が居るかも知れぬに由つて、兎に角一個大隊ばかり遣つて見い」と渡邊聯隊長に命ぜられました、渡邊大佐は直ちに自分の率ゐらるゝ歩兵第四十二聯隊の第三大隊長少佐田邊光正君に命じて、火藥局を掃除せられいと言ひましたので、田邊少佐は直ぐに其の部下を率ゐ、急行して火藥局に到着し、南方の門より入らんとしたるに、豈圖らんや、敵は未だ深山に残つて居て、最も烈しく一齊に撃ち出したから、流石の我が軍も不意を撃たれて大いに驚き、一時は騒ぎ立ちました、大隊長田邊少佐は部下を勵まし、叱咤して奮戦しましたから、部下の將卒烈しく彈雨



を物ともせず、倒るゝ味方を踏み越へ、乗り越へ、遂に南門から潮の崩るゝ如く、門を作つてドツと攻め入りましたゆゑ、敵はとう／＼支へ兼ねて、四方へ散亂して逃げ出しました。茲に於て全く火薬局を占領して中に入りますると、敵の死體は累々として眼も當てられぬ光景でういます。惜又此方は先に進んで居る廿一聯隊の第一第二第三の三個大隊と、四十二聯隊の第二大隊、十一聯隊の第三大隊と此の五個大隊力を併せし劉家白渡口と韓家樹とを占領しましたが、韓家樹の敵は左程の抵抗なくして逃出して、此邊一體の地を占領して丁つたのは、全く八月五日午前四時半にして、恰ど夜の明けかゝりてういました。火薬局の戦は前度々演へてあります如く、一時は勿々の激戦であつたから、味方の死傷も意外に多くあつたので、それ眞暗な中を無二無三に突進したからの事でもありませうが、戦闘に比較して死傷は多くありました。

廿一聯隊の第一大隊にて即死八人負傷將校一名下士卒の負傷三十二名行衛不明の兵二名

此の廿一聯隊の第一大隊は、本編前回は御覽下さるゝ分りますが、新妻少佐の率ゆる隊にして、第一番に土堤上の敵に突貫して之を殲退し、次いで火薬局へ向つて突進したる隊でういます。次は

廿一聯隊の第二大隊にて即死兵一名負傷兵二十名行方不明の兵一名

此の廿一聯隊の第二大隊は、西山少佐の率ゆる隊にして、竹中聯隊長が火薬局の戦闘の音を聞き、第一大隊の左翼に増加させたる隊です。次は

廿一聯隊の第三大隊にて即死十三名負傷將校四名下士卒の負傷卅五名不明の兵卒一名

此の廿一聯隊の第三大隊は、佐本少佐の率ゆる隊にして、是も本編の初めを御覽下さるゝ分りますが、一番是が苦戦をしたから死傷共に多かつたのでういます。それから其次は彼の火薬局を後から掃除する任務で行きまして、意外にも敵の不意打ちに遇ふたる田邊少佐の大隊、是も思ひの外死傷が多く

即死兵五名負傷將校一名下士卒の負傷廿四名

總て此時のは戦闘に比へまして、死傷が多かつたのは、夜戦と云ひ地形が不利であつたからですが、併し我が軍が此の危険を冒し、斯まで死傷を生ずる程に、無二無三に突進したればこそ、此の要害堅固な火薬局を始め、此の附近一體の地が豫定通り夜明までに占領されて了つたのであつて、諸外國人は實に夢ではないかと驚いた位でありました。サア是から唐家灣の方面に向つた眞鍋旅團の戦況に移ります

《百五十七》

話は些しく前に戻つて、師團司令部の状況を演ずる事と致しませう、山口師團長閣下が已に集合地へ到着せられたる所まで、數回前に演じて置きましたが、左翼隊、即ち塚本混成旅團が行進を起すと間もなく、師團長は歩兵第十一聯隊の第一大隊を率ゐて、集合地を出發し、徐々として馬を進めになりまします。何しろ眞暗でういますから、道路が毫も分りません。山口中將「怎麼も非常に暗いのう、一寸も分らぬわ、其背後には福島少将も居れば、英國のチャアナル中佐も、日本軍の戦況を観察する爲に來つて居りますが、其中々妙な音が聞へて參りましたから、師團長は少時耳を傾けて居られましたが「何ぢや、妙な音がする、車の軋る







隊の第一大隊長代理馬屋原大尉に向ひまして『一個中隊だけ右の方へ出して援助せしめ』と命じたので馬屋原大隊長代理は『ハイ宜しうムいします』と了承して、直ちに第四中隊長玉置大尉に之を命じますと、玉置大尉も『承知しました』と部下の中隊を率ゐる『右向け…前へ』の號令で前進を致しましたが、銃撃は些も止間なく、射撃は刻一刻と盛んになつて來ますので、師團長始め司令部員も大いに心痛致しまして六時二十前の頃でしたが、山口師團長は土堤の上へ上らるゝので、福島少將を始め、幕僚の方々も總務らず堤防上に入り、双眼鏡を取つて、各々右方を見まするに、見渡す限り、高粱が彌が上に繁茂して敵味方の運動は些も見えず、唯音のみはボンボンペラ、毫も止間なく聞ゆるのでありまして、司令部の御身になつて見ると、實に之は心配せらるゝは無理はないのでムいします。山口時に福島、英米の軍は怎麼したらう、何邊まで進んで居るぢやらう、毫も分らぬわい』『左様です、一ツ聯絡を取るため行つて見ませうか』山口「イヤ、君自身に行かずとも、誰ぞ一ツ遣つて見て呉れい』『では、由比を遣つて見ませう』と云つて、福島少將御自分が、嚮に臨時派遣隊司令官として渡清されたる時から、參謀として帷幕に在らるゝ參謀少佐由比光衛君に向ひ『君は直ちに英米軍の方へ行つて連絡を取られい』と命じたので、由比少佐は直に領承して、馬を馳せて参りまするが、此の參謀本部詰の少佐由比光衛と被仰る方は、至つて英語が巧いのであつて、青年の頃から長らく英國に滞在して居たから、最も英國の事情に精通し英語は頗る甘いものごと此の任務を授かつたのでムいします。

前に演へました英米軍へ聯絡を取りにお出になりましたる由比參謀は、唯今東京四ツ谷の大番町に住ひして居られて、參謀本部へ相變らず勤めになつて居ますが、先頃印度へ行かれて、未だ先月の初旬に歸國されたばかりでムいします。此の由比の御舎弟は由比質と被仰つて、千葉中學校の校長と勤めて在りますが、昨年の冬、私しがお目に懸つた時、御舎兄は御在邸ですかと云つて聞きましたら、イヤ奥さんと印度へ行つたこと應へられましたから、私しはア、爾ですかと云つてお別れ申しましたが、其後千駄ヶ谷の豊田少佐の邸で天津戦争から此の北倉の戦の話しを覗きました時、由比參謀が英米の軍に聯絡を取りに行くこと云ふ所になつた節、私しは豊田少佐に向つて『由比さんは令閨を連れて行かれましたら印度へ行かれたらうでムいしますな』と聞いたら、豊田少佐は妙な顔をなさいまして、首を傾けて居られましたが『イヤ令閨を連れて行かれましたら印度へ行くは行つたが、令閨を連れて行く筈がない』と言はれますから、私しが『それでも由比參謀の御舎弟が、昨年の冬お目に懸つた時、兄は令閨と一所に印度へ行つたご被仰いました』と云つたら、豊田少佐はクス／＼と失笑されましたゆゑ、私しは合點が行かず、遂漸に聞いて見ると、笑はれたは無理もないので、奥中將閣下と一所に印度へ行かれたので、唯奥さんと聞いたから、令閨と奥中將と私しが思ひ違ひを致しましたので、大笑ひになつた事が、ツイ先々月でありました、イヤ是は飛だ餘事に渡つて相済みませでしたが何しる由比參謀は、奥中將も印度へ行くにお連れになる位であつて、英語は餘程巧みにお行りになるらうでムいします。それであるから、福島少將は山口師團長に此の由比參謀を聯絡を取りに遣るやうと言はれまして



師團長は之を用ゐられ、直ちに命ぜられたのでムいませぬ、故に由比參謀は領承して、直に馬を驅つて英國軍の方へ参りますと、英米の兩軍隊は我軍に比してマツと後れて了つて居りますから、由比少佐は先づ英國軍の前兵隊長に會ひまして挨拶を爲し、少佐小官は、我が司令官山口中將の命に由つて、貴軍及び米軍に聯絡を取る爲に参りましたが、貴軍司令官閣下は、何邊に居られますか』と尋ねますと、英の前兵隊長は、『イヤ、怎麼も、貴軍の勇進は今に始めぬ事ながら、實に驚歎するの外ありません、我軍及び米國も、貴軍と共に前進する心算ですが、道路は暗いし、雨の爲に道は滑るし、意外に後れました、我司令官グーヌリー將軍は、此のマツと後方土堤下に居られました、今行進中です』と答へつゝ、其の方向に指しますゆゑ、由比少佐莞爾笑つて一禮なし、前兵隊長に別れて、又も馬を馳せて参りますと、聽て英のグーヌリー中將に出會ましたので、先づ十分鄭重に禮をして後、我が司令官の命に由つて聯絡を取りに来た事を演べ、且つ言ふに『左岸軍なる露佛の軍隊は、如何に致しましたか、萬望貴閣下から、露佛軍隊へ聯絡を取つて戴きたら』と申しますと、グーヌリー將軍は『宜しい、實は今小官も爾思ふて參謀官を左岸に遣らうと思つた所ですが、貴司令官も亦た其の考へなれば、正に小官の意と符合したてす、早速に遣りませうと、言つて、直ちに某參謀に命じ、左岸軍に聯絡を取り來れと訓令したので、其の參謀官は馬を馳せて行きます、後でグーヌリー將軍は由比少佐に向ひ日本軍は奇態に勇進しますな、吾々は如何に日本軍が勇敢にせぬ、地理も好く分らぬ所を、眞暗な中で無暗に突貫するやうな事はあるまいと、思ふて居たですが、敵に衝突するや、直ちに

に突撃したのは、怎麼も意外です、敵は勿論肝を潰したてせうが、吾々も亦意外の感に打たれたです』と言つて、大層に日本兵の勇敢なるを稱揚したとす、それは些しは世辭もありませうが、併し萬更の世辭のみにあらずして、全く我が軍隊の勇猛には驚歎したらしいのでムいませぬ、由比少佐は直ちに英米軍の状況を、山口司令官は報告しました。

山口師團長は英米軍に聯絡を取る爲に、由比參謀を其方へ遣しになりまして、然る後、一先づ火藥局に司令部を移さうと思召したから、伊東參謀に向ひ『司令部は一時火藥局に遷入らうから、中の様子を一寸見て來られいと』命じましたので、伊東參謀は『承知しました』と唯一人土手を下つて、スタ／＼参りましたが、已に火藥局の門を入らんとすると、ボン／＼バラ／＼と撃ち出して、伊東參謀の足下へマッバラ／＼と、銃弾が恰も蜂の飛ぶ如くに参りましたゆゑ、伊東少佐は不審に思ひながら、中を見ると、未だ敵が火藥局の中に若干か残つて居る様子ゆゑ、唯一人來つた伊東參謀は驚いて、早速に引返して参りました『閣下、未だ不可ません、火藥局の中には若干の敵兵が居ります、ハイ逃後れました所謂殘兵でせう』山口師團長は、『それでは今一度掃除させなくては不可な、撃ち出したか』伊東少佐は『ハイ撃ち出してムいませぬ、併しナニ、最上澤山には居らんやうです』山口師團長は、『爾か、可し、それでは其儘にして置いて可い、今の場合、殘兵などに拘まつては居られぬ、其儘にして置いて、前進しやう、それにしても、怎麼も高梁の高い爲に、右翼の戦況などが些しも分らぬに弱るのう、英米の軍は何の邊まで進み居つたかな』



進するやう、御催促になりましては如何です』山口、爾して見やう、怎麼もズツと我軍より後れて居るやうぢや、オイ……平田副官、君一ツ、なア、英軍の方に行つて、ゲーヌリー中将に前進して貰ひたいと云て催促して呉れい、日本軍は已に火薬局及び韓家樹、劉家白渡口を占領して、今將に玉庄茶棚の方へ向つて、前進せんとする所ですから、萬望英米軍も成るべく早く、前進して下さいよ、爾う云ふて促して見い』平田副官「ハイ謹領りました」と、平田副官は直ちに馬を馳せて、英軍の方へ参りましたが、英米軍が日本軍隊よりズツと後れましたのは、全く日本軍が意外に速かにして、ズン／＼進んだからの事であつて、決して英米軍が行進を怠つた譯ではありません、サテ平田副官は馬を馳せて、英の司令官ゲーヌリー將軍の下に到り、此の事を述べますと、將軍満面に笑を含んで、イヤ怎麼も『日本軍の戦闘、及び其の行進の神速なるには驚歎、此の安排では、吾が軍隊はキンの御助勢だけで、眞の戦闘には參與出来ないかも知れぬわい、アハ、ハ、』と馬上に世笑されつゝ、其の部下に向つて急行前進を命じましたる所などは、洗石に大英國の司令官だけあつて、毫しも自惜みなどなく、寔に悠然として大度量のあつたものでムいます、其中に英國の參謀にして先刻ゲーヌリー司令官の命を受け、露佛の左岸軍の聯絡を取に行きました參謀が返つて來まして、ゲーヌリー中将の前に一體なしました、ゲーヌリー中将は『怎麼ぢやつた、露佛の左岸軍も日本軍の如く、神速に進んで戦闘を開始したかな』露佛の左岸軍は戦闘所ではムいせん、退却をしそうな様子でムいます』ゲーヌリー「ナニ退却を……怎麼したのぢや、敗軍したのか』イヤ敗軍した様子はムいせん、確とし

た事は分りませんが、露國の一將校の言ひまするには、白河の左岸は氾濫が甚だしくして、逆も進軍が出来ないのみならず、敵も亦主力を右岸に置いてあつて、左岸には唯僅々たる一小部分が陣して居るのみゆゑ、強いて左岸を進軍する必要はないから、退却して矢張り右岸を行進する心算であると、慙うまつて居りました故に、小官は其事を速かに御報告する爲に、直ちに引返して参りました』と演べたので、ゲーヌリー將軍は當時呆れ返つて居りましたが、露國軍が爾云ふ有様であつて見れば、日本軍はズン／＼前進して下し如何なる状況に陥るかも知れぬゆゑ、躊躇しては居られぬ、サア急行前進して、日本軍の苦戦に陥らぬ機にせい』と、茲に於て英米軍は急行前進と云ふ事になりました。

【百五十八】

備又右翼隊の方の戦闘状況は如何と云ふに、是は左翼隊に些しく後れて行進を始めました、北倉の戦は天津北京と並び稱する、北清の三大戦争ではムいせんが、天津や北京の戦争と異なりまして、敵が城へ籠つて居る所を攻撃したでなく、極めて方面の廣い野戦でムいますから、頗る戦闘が入組んで居て、實に錯雜極まつて居ります、従つて是を講演するには勿々面倒でありまして、殊に講演する黒猿に、一ツ困難のあるのは戦争當時天津の戦や、北京の戦争は、新聞紙上にも随分書き立て、ありましたし、又た世間の人も是を讀んで、其の大體は御存知てムいますから、演じ好くはあるし、材料とても可成豊富でムいました、北倉か



ち通洲に至るまでの戦闘に至りましては、戦争當時の新聞に是を記したるもの、極めて簡略にして、漠然とを掴むが如き書方がしてあつて、何だか譯が分りません。故に此戦争を演ずるに方りましては當時の新聞や著書などに材料を取りましたるものは一ツつとしてありません、全く従軍したる將卒方から聞いた事を、成るべく詳細に演ずるのであります、是れ私の講演に困難を感じましたる一でありませう。又今一ツは前演ぶる如く戦争方面の廣いものと、其の戦況の錯雜紛亂して居るとの二原因であつて、是には私も些と閉口しました。過日豊田少佐に御面會をしました時、其の事を話しまして、若し演じ方の順序を過つと、讀者をして何が何だか些しも解する事が出来なくなりませぬかと思ひますが、如何でせう、怎麼いふ風に順序を立てましたものでありませうかと言つて、少佐の御意見を聞いて見た所が、少佐は笑を合んで言ふた「爾は是では順序が好く立つて居て、好く解つたが、是から先は些と難い、併し吾輩も今參謀本部で此の歴史を編纂中であつて見れば、慥う順序を立てると差圖は出来兼ねるが、まづ君の腕一杯に行つて見られ、吾輩は唯材料を種々君に渡して遣るのだから、それを好い鹽梅に調理して、面白く感じさせると否とは、料理人たる君の腕一ツにあるのだ」と言はれて、私しもいよく閉口して了つたが、併し乗り懸つた丹だ、今更怖れて手を引くなど云ふ様な卑怯な事は、縦令微々たる藝人でも、日本男兒の性質として出来ない、そこで私も無い勇氣を自ら奮つて、一番北倉の戦争さへ怎麼にか慥にか、曲り形にも演じ畢れば、其後は北京まで解り易くて面白い戦争だから、怎麼しても演つて扱けなくてはならぬと、慥う決心しましたが、さりとて此の

入組んだ大戦争を入組んだ儘に演じたなら、必ず讀者が倦厭を來すから、そこで大いに取捨致しまして、或は詳細に演ずる所もあるし、或は大端折に端折つて演ずる所もありますから、萬望其の思召して御覽を願ひたいし、又た本来ならば左翼隊の戦闘を演じ終つて、それから右翼隊に取懸るべきですが、爾すると、ズツと先へ前んで又た戻る様になりませぬ、茲で一ツ變則法を用ゐる左翼の戦争話半にして、右翼隊の状況に移る事と致しました、讀者諸君、宜しくお察しの上、地圖と始終見比べて御覽を願ひます斯の如く錯雜した戦闘談は、地圖と見比べないと、何が何やら一向に分らなくなりませう、却説右翼隊、即ち眞鍋旅團の前衛は、前に軍隊區分て委しく演べ置きましたる如く、歩兵第四十一聯隊の第二大隊小倉少佐(信恭)の率ゆる隊で進んで、八月五日午前一時に集合地を出發致しまして、例の眞暗の中を土手の上を進行して参ります、其中一個中隊だけを右側隊として西沽より唐家灣に通ずる道に沿ふて前進せしめようして前衛大隊は三十丁ばかりも前進したる時「廻れ右」の號令にて、右方即ち唐家灣の方向に進路を轉じて、畑の中を行進しますが、何しろ風々演ぶる如く、高粱は殆んど森林の如く、暗さは暗し、其の行進の困難なる事、勿々一通りで進ません、三時四十分の頃になりまして、約五百メートル位の前より、敵は一齊に小倉大隊に向つて射撃を始めました、小倉大隊は敵より不意に射撃を受けたので、直ちに散開しましたが、高粱は高いし、未だ暗いので、敵の狀が窺しも知れませんが、後より進みましたる小原聯隊長は、其の部下第三大隊長井上少佐に向ひまして「サイ



井上少佐、君の大隊を左翼へ増加せられ、そうして前進せよ」と命じたので、井上大隊長は直ちに部下の大隊を率ゐる、前進し、小倉大隊の左に散開しましたが、井上大隊長は小倉大隊の状況を窺ふに戦闘最も激烈にして、稍苦戦に陥らんとするの状況でありました。部下第九中隊長大橋大尉に向ひまして「おい大橋大尉、君は部下全隊を率ゐて、小倉大隊に増加して前進せよ」と命じたから、大橋大尉は直ちに部下中隊を率ゐて、第二大隊即ち小倉少佐の率ゐる隊に合しました。是に於て小倉大隊も大いに勢ひを得、飛び来る砲を冒しつゝ、次第に前進して、四時半、即ち夜の明方に、唐家灣の敵堡を去る事約二百米突位の所まで前んで参りましたが、勿々敵は屈せずして、一層猛烈に射撃を加へます。此體を見て勇敵無比の大橋大尉は憤慨に堪へず、自から真先に進みつゝ、大聲に「突込め」と號令して、已に突貫なさんとしたる時、飛び来りたる敵砲は、其の胸部に命中したから堪りません。浪々と踏躓いて、動乎と其の場に仆れました。側に在りたる小關中尉(喜藏)は、駆け寄つて抱き起こし、介抱しながら「大尉殿」と呼びますと、氣丈の大橋大尉は、苦しさを堪へながら「ナアニ些細な負傷ぢや、僕はいから早く敵堡を占領してしまへ、早くしないと不可ん」と左の手に傷所を押へながらに號令します。そこで小關中尉は後方に居たる兵士を顧みて「爾、大尉殿を介抱して、後方へ送り申せ」と言ひ畢るや否や、中尉は大尉に代つて自ら真先に立ち「已れに續け」と言ふより早く馳せ出しました。是に勵まされた第九中隊の兵士等は、吾れ劣らじと先を争つて突進する。其の勇ましさ有様を見て大橋大尉は自分の負傷の苦痛をも打

忘れ、側に在つて介抱しつゝ居る兵士に向ひ「俺の疵は些細ぢや、極めて淺いから棄て、置いて、早く前進せよ」と命ずる所は、實に豪氣なものです。兵士は手早く大橋大尉に綱帯して、後方へ送らうと致しますと、大尉は之を叱しめて「爾、俺に構はずに前進せよ」と云ふに、何故聞かぬか、俺は極めて微傷ぢや、慥云ふ場合には、微傷者などに拘まつて居る時ぢやない、早くせよ」と言つて追ふやうにしましたので、兵士は「では中隊長殿、御免被ります」と、大橋大尉を地上に伏せしたる儘にして突進します。大尉は之を見送つて、其の勇進を喜んで居たさうで、其内に衛生隊即ち擔架卒が参りまして、大尉を第一番に擔架へ載せて、後方へ送らんと致しますと、大尉は首を打掉り「イヤ俺は今暫時休んで、占領した堡壘を見て返るから」爾等は他の俺よりも傷の深い者を早く運んで遣れ」と言つて、慥しても自分を運ばせませんので、擔架卒は皆感涙を流しつゝ、其の言に従ひ、大尉を其儘に伏せして置いて、他の負傷者を運搬します。是等の事は後の話しなれども事の序に一寸記して置きますが、大橋大尉は尙ほ地上に臥して居て、部下の兵の掩堡を占領するを見、心に喜んで劍を杖いて立上り胸の傷所を押へつゝ、徐歩して部下の占領したる掩堡の中を一廻り廻つて、そうして徒歩にて休みく返り来りましたさうですが、實に大尉が是等の舉動は軍人の鑑と云ふも不可ではあるまいと思ひます此の大橋大尉は鹿兒島の人にして、親父も矢張り軍人でありましたが、私は天津で此の親父大橋少佐にお目に懸りまして、種々なるお話を窺ひましたが、勿々面白い、淡泊な、質料な方でして、昔の薩州武士は成程此様のものであらうと想像せしむるので、



ます、大樗大尉の親父なる大樗少佐は、鹿兒島の士族にして、青年の頃より武官に任じ、清國に在る事久しく、嘗て威海衛より山海關までの沿岸の地を跋渉して、地形及び人情風俗を偵察し、それより姿を僧徒に装束して、萬里の長城の内部に入り、百二十日間の偵察旅行を爲したる位で、其際同行したのは群馬縣人にして、木村熊太郎と云ふ人ですが、是も亦頗る氣慨家であつて、宮内省の官吏を務めて居りましたが思ひ立つ所あつて、自費旅行を願ひ出し、遂に大樗少佐と行を同ふして、艱苦を嘗め盡し、とう／＼其の目的を達して、百二十日目に漸く北京に着したる程のお人柄で、其後大樗少佐には、御子息が中隊長にまでなりましたので、御自分は願つて非役軍人と爲り、故郷なる鹿兒島に退いて、鋤鋤を取り田畑を耕して、老後の樂みとして居りましたが、今回北清に義和團の事變起りて、第五師團に出征の命令下りたりと聞き、態々鹿兒島より廣島に來つて。我兒大樗大尉及び其の部下の小隊長や下士官などに北清の地の理など詳細に説き聞かせまして、我兒が出軍を悦んで送りましたるが、尙自分も實戦を今一度見て、黄泉への土産話にもなさんものと、後より御用船に便乗して、宇品より太沽に着し、上陸したるに、太沽の砲臺内には通信連輸部長として、仁田原中佐が居られましたが、大樗少佐を見るより「イヤ怎麼も、大樗君實に君にはお氣の毒の至りであつたが、如何も是ばかりは仕方がない、併し名譽の戦死だからと斷念なさい」と言はれ、大樗少佐は、憊こそ倅は戦死したかと、キツクリ胸に答へましたが流石に少佐の事ですから、顔へもそれを出し

ませんで、故らに莞然笑ひ「イヤ最う、倅の戦死は覺悟であつて、決して愛ふる所か、寧ろ家の名譽として悦ぶ所でありますゆゑ、御心配下さるな」と言ひ紛らしたるが、併し少佐の身になつて見ますと、可愛い一人の我兒が戦死、縦令片髪髪の毛なりとも持ち歸つて、是を葬らんと、翌日仁田原中佐に別れて、一人悄然天津に來り、兵站司令部に入ると、菅野大尉が恰ど其處に居りまして「やア大樗の御親父ではありませんかと言ふから、少佐は『如何にも大樗ですが、倅は何様死様をされましたな』と尋ねると、菅野大尉は莞爾笑ふて、『御子息は微傷ぢやから、御心配なさいませぬな、極めて輕傷です』と云ふので少佐は始んど夢心地「サニ、倅は戦死ではなく負傷で」と問ひ返せば「爾です、極めて微傷です」と答へるので、何が何だか譯が分らず疑ひ惑ひつゝ、病院に到つて見るに、如何さま大樗大尉は床の上に打臥して居りましたが、父の少佐を見るより「お父上でいますか」と起き上つて、思はず其の手を取りますと、少佐も思はず我兒の手を握つて顔を見合せましたが親兒の兩眼には嬉し涙が一杯で、茲か即ち親兒の情であつて、百萬の敵に出會ふと雖も、怖るゝ事なき大樗大尉、爾も唐家灣の戦争に其身負傷して、苦痛堪へ兼ねる中に在つてさへ、部下を勵まして居せず撓まず、遂に徒歩して歸り來りたる位な剛氣なる勇士でありますが、それが親子顔を見合しては、互に嬉し涙に呉れると云ふ、實に其の孝其の慈、是こそ眞に美しい至情で、それから此の大樗大尉は歸國を命ぜられまするし、父の少佐は天津に留まつて、兵站司令部に任ぜられまして、萬事兵站事務を取扱ふ事になりました、私し們的參りました時の兵站司令官は、即ち此の大樗少佐にして、寔に



信切なき取扱かひをなすつて下さしました。是等の事はズツと後の話してございませうが、併し序で々ありませうから、茲に演べて置くのであります。是より前、第一中隊長高野大尉は右側枝隊として部下二個中隊全部を率ゐる、西沾なる武庫の北へと進みますると、恰ど此時左方に當つてポン／＼と銃聲が聞え出しまして己に戦闘を開始したやうでムいませうが、何しろ未だ眞暗でありますから、射撃する事が出来ませんので高野大尉は「無暗に撃たしては不可ん／＼」と、部下の小隊長を誡めつゝ、徐ろに進んで参りますと、其中に漸く夜が明けて参りましたので、弗と先手を見ると、意外に近い所に敵が居るので、高野大尉は驚きながら猶豫はなりませんゆゑ、透さず「連發撃ちか／＼れ」と號令して烈しくポン／＼と打ち出させますと、敵は不意を打たれて、一時は頗る驚いたやうですが、併し彼等は多數を頼みにして居りますゆゑ、毫しも屈せず、矢張猛烈に撃ち出しました、距離が極めて近い爲に、敵も死傷が多く出来たやうですが、我が高野中隊も、見る／＼中にバツリ／＼と倒れます、されども道に勇猛なる我が軍人、中隊長小隊長を始めとして下士卒に至るまで、屈せず機嫌よく勇敢に戦ひましたゆゑ、敵も大いに苦戦して居ります、高野中隊長は先刻から恚慥にかして本隊へ聯絡を取りたいと思つて、斥候を出しましたが、眞暗な中で況して高梁が繁茂して居ますから、何しても本隊と聯絡が取れませんでしたけれども此時に至つて、又た一人の兵卒に命じまして「貴様本隊へ行つて聯絡を取つて来い、此の中隊の苦戦の状況を報じて来い」と言ひましたので、其の兵士は領承して、直ちに駆足にて参ります途中、流弾はヒヨウ／＼と、或は高く或は低く参り

まするが、彼は是を事とせず、畑中を馳せ行きますと、暫時して向ふからも、一人の兵士が息喘き切つて駆け来りますので、近附く儘に見ますと、顔を見知つて居る兵ですから「ヤア君御處へ行くか、随分烈しいな、聯隊長殿は何の邊に被在るか、聯隊長殿は彼の邊に被在る、僕は今聯隊長殿の命令を授かつて右側隊へ傳令に行くのぢやが、君は右側隊の方から来たのか」と、爾ちや、右側隊から来た、爾も高野中隊から報告に聯隊長殿の許へ行くのぢや」と爾かそれは苦勞ぢやな、恚慥も勿々烈しい、随分流弾が来るから、注意して行け、それとも此でも互に双方の事を報告仕合つて引返さるか、それは君不可わ、何故と言つて考へて見い、苟も軍人たるものが、上官の命令を受けて傳令報告に来ながら、先方の隊に屬する兵士に出遇ふたからと言つて、其任務を全うしないで引返すんで、そんな事が出来るものかそれでは任務が済まん」だつて其處が君、獨斷專行ぢやないか、例先方の隊長の許まで行かずとも、途中で先方の隊に屬する兵に遇ふて其の状況を知り、又た此方の命令を傳へ遣れば、それで任務は済むと云ふものぢや、何でも世の中は輕便にして早い事をするのが得策ぢや、君の様に上官の命令ぢやから、何でも先方まで行かなくてはならぬと云ふ様なそんな變通のない事を云ふて居ては、總て功を成す事は出来んぞ況んや戦争は機を見て變に應ずると事と事が肝腎ぢや、貴様生意氣な事を云ふな、今急ぐからそんな屁理窟に拘まつては居られぬ、由つて、其儘別れるが、他日大いに議論するぞ、覺へて居る」と云ひ再び駆け出さんと致しました高野大尉の傳令は復も馳せ出さんと致しました時、ブツと飛び来た一彈は、隣れをへし、彼の小原聯隊



長の許から来た傳令兵の左の股に命中したから堪りませぬ、アッ」と叫んで。其場に挫と倒れました。見  
るより高野中隊の兵士は、馳せ寄つて抱き起し「確乎せいく、何處だぐ……ヤ股ぢやな、まてく今細  
帯して遣るから」と、手早く細帯して「サア、僕と一所に返り玉へ」イヤ、僕は此位な負傷で、任務を遂行  
出来んやうな事では、帯くも帝國軍人の甲斐がないから行く」だつて君、足に負傷して居て行けるものぢや  
ない、君は負傷しない時でさへ、最う是で双方の事が分るから、互に命令を交換して返らうと言ふた位ぢや  
ないか、其時候は同意しなかつたのは、君が無事の時はあるし、殊に我が中隊は頗る苦戦に陥つて居るか  
ら、一分時も速かに、苦戦の状況を聯隊長殿に報告して、援助を乞ひたいと思ふので、同意しなかつたの  
ぢやが、君が斯う負傷した以上は、聯隊長殿の命令は、僕が返つて中隊長に報すればそれで宜しい、サア兎  
に角返れッ」「イヤ僕は、まだ負傷しない中からは、報告と命令の交換をして返るが、負傷した以上は、怎  
麼なりともして、中隊長殿の許へ行つて、我が聯隊長殿の命令を傳へなくては置かぬ、ふ、僕も軍人ぢや  
足の一本位も役に立ぬとて、何の行けぬ事があるものか、世の中には一本足の奴が幾干もある、彼等は皆ヒ  
ヨコ／＼飛んで歩いて居る、蛇は足なしでも動いて居る、況んや萬物の靈長たる人間ぢや、又況んや帝國  
の軍人ぢやもの、足など要るものかと、強情にも起ち上らんと致しまするゆゑ「オイ／＼君、そんな亂暴な  
事を言ふては困るよ、可いではないか、君が聯隊長殿の命令を受けて行くのは、我が第一中隊に聯絡を取り  
つゝ、其の状況を見に行くのぢやらう、サアさして見れば、我輩が是から君を背負ひ、聯隊長殿の許へ

行つて報告すれば、それでは第一中隊の状況は分つて了う、吾輩は援助を請ふのぢやから、怎麼しても急い  
で行かなくてはならぬ」では君一人行けッ、僕を背負ふたりなどは、遅刻して了ふて、第一中隊の苦戦  
は益々苦戦に陥つて、如何なる有様になるかも知れん君は大切な任務を帯びて居て、僕の負傷位に關はつて  
居る場合ぢやあるまい、早く行けッ」ふ、それも爾ぢやが……と云つて、現に眼前戦友の負傷を見棄て置く  
と云ふ事は、僕には忍びぬ……「貴様、未だ其様な事を言ふてるか、任務の重い事を忘れたか、友情と任務  
ど何方が重いか」ふ、好しッ……任務の爲ぢや……君、許せッ」と言ひ捨てたる儘、後とも見ずして一趁に  
馳せ去りました。負傷したる彼の兵は、其の後姿を見送りつゝ「噫、頼母しいは我が同胞、信切、真心、面  
に表はれて、僕を介抱しつゝ、本隊へ連れて行かうとしたが、任務の重き事を一言云ふたら彼爾然として直ち  
に覺り、僕を捨て置いて其儘に走り去つた、ア、軍人たるもの、慙うありたいなア、まてく僕も此位な  
傷で、任務を全ふせず、本隊へ返るやうでは、軍人たるの甲斐がない、聞く所に由れば、天津城總攻撃の  
當日十一聯隊附の軍曹中西群太郎氏は、三ヶ所に敵弾を受けながら、屈せず挽かず、傳令の任務を全ふして  
さうして死したと云ふ事だ、僕も中西軍曹には及ばずとも、此様局部へ一ヶ所位の負傷したとて、何の事が  
あるものか」と、流石に我が日本帝國の軍人だけあつて、銃を杖きつゝ立揚りまして、どう／＼第一中隊の  
居る所まで参りましたが、幸ひにして此時は、己に敵も退却して、最う援助の必要もありませんので、高野  
大尉は重ねて其の趣きを聯隊長に報告した時であつたので、それゆゑ聯隊長から別に増加しませんでした。



儲是からいよいよ右翼の砲兵隊の事に掛つて講演致しませうが、右翼の砲兵は、軍隊區分にもある如く、野戰砲兵第十六聯隊の第一大隊でありますが、其の一個中隊だけは到着が後れましたので、大隊長山川少佐(丈三郎)は、部下二個中隊だけを率ゐて、四時頃から千七百メートルの距離にて唐家灣を砲撃致します。此時の大隊長始め將校、及び段列長は左の如くでムいます。

- |       |            |       |           |
|-------|------------|-------|-----------|
| 大隊長少佐 | 山川 丈三郎     | 第二中隊長 | 大尉 津田時若   |
| 第一中隊長 | 大尉 早田源二郎   | 小隊長   | 中尉 吉田延市   |
| 小隊長   | 中尉 安村二一    | 同     | 少尉 松川武徳   |
| 同     | 小尉 飯田清三    | 同     | 中尉 林猛夫    |
| 同     | 中尉 原口初二郎   | 第一段列長 | 曹長 藤巻菊次郎  |
| 第一段列長 | 曹長 大島源吉    | 第二段列長 | 特務曹長 本田末緒 |
| 第二段列長 | 特務曹長 芝川信次郎 | 傳令    | 軍曹 池上源司   |
| 傳令    | 軍曹 影山寅衛    |       |           |

山川大隊長は初め土堤の南方より千七百米突の標準を以て、唐家灣を砲撃して居りましたが、其中に土堤の北方に進入するの必要を認めましたので、少佐「オイ、工兵中隊長を呼んで呉れ」と命じますと、纏て問る

なく工兵第三中隊長大尉井上巖太郎氏が参りましたから、山川砲兵大隊長は「工兵中隊長、砲兵は是から直ちに前進するから、此の土堤へ一ツ坂道を作つて貰ひたいねえ」井上「ハア宜しうムいます、直ちに着手しませう」と、是から部下に命じまして、此土堤へ砲兵の通過の出来るやうに坂道を作るのでムいますが、野戰砲は屢々演べてある如く、馬六頭を以て其の一門を曳くのでありますから野砲の通過が出来るやうにするには、勿々の大きな坂を作らなくてはなりません、そこで工兵第三中隊は總懸りて作業を従事しましたが、此の工兵の作業して居る最中にも、山川砲兵大隊長は部下を號令して、頻りに唐家灣を砲撃して居ります。此ヒューンと飛び來つた敵の一弾は、大隊長山川少佐の右の腕に命中したから堪りません、道の少佐も思はず右手に持つたる軍刀をガリリと其處へ取り落しましたのです、津田中隊長は大隊長の側に馳せ寄り「大隊長殿、怎麼かなさいましたか」と問ふと、山川少佐は左の手にて右の腕を押へながら「ナニ、微傷ぢやから心配ない、津田大尉、君、一寸代つて行つて呉れい、今が大事なやから……オイヨラ、誰か綱帶せい」と命じまして、兵士に綱帶をさせ、少時後方へ退きます。茲に於て津田砲兵大尉は俄かに大隊長代理となつて、指揮を取る事になりましたが、此時恰も工兵隊の方では、砲兵が土堤を越す便利の爲に、坂道を五箇所の作つたので、サア前進せいで、土堤の北に入れと云ふので、二箇中隊十二門の野砲は順次に前進して、土堤の北方に進入し、畑中に砲列を布いて、矢張唐家灣を目標に撃ち出しました。時是最早や五時少し過ぎる頃でムいまして、此の砲撃が寔に甘く唐家灣の敵壘に落下破裂したので、敵も堪り兼ねたと見えて、漸くにして敵線



が動き出しました「ヤア、敵が動揺し出したぞ〜」「甘〜、今の弾などは餘程甘い所へ落ちたわい」是  
 では敵の奴も堪らぬぢやらう」と、歩兵が突貫する〜愉快〜」  
 前回到大橋大尉が其の部下を叱咤號令して、唐家灣の敵壘に突撃せんとしたるも、其の身は敵彈命中して負  
 傷し、同隊の中尉小關喜藏氏、大尉に代つて突貫したることを演じて置きました。それは恰と前回は演  
 べてある我が砲兵の砲撃に依つて、敵は堪へ兼ねて動揺し出したのを見て、此の機失ふべからずと、左側に  
 居たる大橋中隊の方から突撃を始めたので、是を見て、第二大隊長少佐小倉信恭君は大聲に「ソラ、第九中  
 隊は突撃するぞ、第九中隊に後るゝな」と號令しつゝ、自ら真先に立てば、是に激まされたる第二大隊の各  
 中隊は、我れ劣らじと先を競ふて突進しましたので、第三大隊長井上少佐(思服)も、是と同じく突進を令し  
 まして、各隊最も激しく突撃しますると、さしも頑強であつた敵ですが、砲兵にて散々惱まされた所へ、歩  
 兵て斯の如く突撃しましたから堪りません、遂に唐家灣の堡壘を棄て、逃げ出しましたゆゑ、我が各隊は遂  
 さず敵壘へ進入して、占領してしまいましたが、井上小倉の兩大隊長は、互に顔を見合せて莞爾と笑ひ「ま  
 ア、各自出度う〜」と言ひつゝ、眼鏡を取つて逃げ去る敵兵を眺めながら、井上少佐は「是は透さず此の  
 敵を追撃した方が宜しいねえ」小倉少佐は「爾ぢや、追撃する方が宜しからうねえ」井上「では僕の隊を遣らう」と二  
 少佐は御協議の上、井上大隊長は其の部下第九第十第十一第十二の各隊に追撃を命じましたので、各中隊長  
 は直ちに追撃に蒐りまする、小倉少佐の第二大隊だけは、暫時堡壘の中に残りまして、壘内を見れば、敵の

死體は散を亂してイヤハヤ眼も當てられぬ有様でいます、中には勿々立派な服を着たる死骸などもありま  
 すので、我が將校も兵士も彼方此方と巡視しますると、一人の兵が「ヤア、徳云ふ服を着ける兵があるぞ、  
 是は裕祿の護衛兵だ」と叫んだ者がありますので、將校等は其處へ來つて見ますると、如何さま此の兵士の  
 云ふ如く「北洋大臣裕祿護衛」と胸の所に染め抜いたる軍服を着て、斃れて居る兵がおりますので、小倉大  
 隊長は之を見て、少時首を傾けて居られましたが「曉霞な、曉得が行かぬわい、茲處に裕祿の護衛兵が居る  
 とは、怎麼云ふものかな、裕祿が正可に此處に、此の堡壘内に居はせまいと思ふがな」けれども何とも分り  
 ません、彼は天津城を攻落されて了ふて、朝廷へ對し申譯がありませぬから、自ら先頭に進んで部下を勵ま  
 す爲め、随分此の邊まで進むと云ふ事がないとは限りませぬからな」小倉「〜、それも爾ぢや、何しろ其の  
 軍服は脱がせて分捕品として了〜」と言つて、兵士をして軍服を脱がしめんと致しますると、彼の敵は未だ  
 死に切らないと見えましてウーン〜と呻き苦しんで居りますが、擧はらずに脱がせて、分捕品として了  
 ました、小倉大隊長は此邊の堡壘の工合から死體の殘してある様子、其他の形跡を以て想像するに、怎麼し  
 ても一千以上の兵が居たに違ひないと云ふ見込みでいます、其中に追撃なしたる第三大隊が、敵に衝突  
 したと見えまして、ボン〜ペラ〜射撃の音が切りに烈しくなつて參りましたので、小倉少佐は伸び上つ  
 て北方を見たが、高粱の繁茂の爲に少しも見えませぬ、  
 前に演ぶる如く、四十一聯隊の第三大隊は、逃ぐる敵を追撃致しまして、第十一中隊が先頭となり、之に次



いで十二、九、十の順序にて追撃したのでムいます。敵は是を見るより、南倉と王庄との両方から烈しく撃出したので、敵火は十字火になつて猛烈に飛び来りまするゆゑ、流石の我兵も大いに弱つて、容易に前進が出来ません。此時我が砲兵大隊長代理津田時若氏は、遙かに後方より、我歩兵の前進を容易ならしめん爲め部下に命じて盛んに砲撃を加へて居りましたが、茲に至つて又た前進して、王庄を目標として撃ち出しました。恠る所へ英國の砲兵も一個中隊だけ前進して参りまして、我が砲兵の左翼に砲列を布き、同じく王庄の敵に向つて頻りに砲撃を致します。スルと敵も亦烈しく撃ち出して、却々容易に退きませんでした。其の中に我が左翼隊の砲兵陣地からも、矢張り此の王庄の敵を目標に撃ち出しましたので、遺の頑強なりし敵も漸く動揺して参りました。我が歩兵隊に於ては是を見るや、大隊長井上少佐を始めとして、各中隊長は一齋に「ソラ、敵は逃げ出すぞ、突撃に進め！」と號令して、勇ましく急撃させます。中にも第十中隊の本内大尉(末男)の率ゆる隊は、其の最左側に在つて突撃せんと致しました。此時恰と我が後方より頻りに撃ち出す砲弾は、味方の今將に進撃せんとする其の途上に、續々と落下破裂致します。實に危険極まつて居ります。故に木内大尉は之を見て馳せ行きながら、大聲に「今急進しては不可んぞ、味方の砲弾で撃たれるぞ、危険ぢやぞ」と暫らく控へて「〜と」聲の囁るばかりに呼ばりましたが、何しろ敵味方双方から撃ち出す砲弾の音響は、絶間なく轟々として耳を聳するばかりであります。勢ひに乗じて突進して行く我兵士には、些しも聞えないと見えまして、停まる様子がありません。木内大尉は斯く見えるより疾風の

如くに駆け行き、見る／＼中に我兵を乗り越へて前に出るや大手を振つて「止まれッ」と大聲に令したので漸くにして我兵は急進を止めました。大尉は「サッ」と一息吐き「貴様等、アレ彼れを見い、アノ通り味方の砲弾が、我が前進路へ續々落下破裂する、今妄りに突進すれば、味方の陣で撃られて了ふぢやないか、暫らく時機を控へて」と言ふと、兵士の中には「私し何れもソレは知つて居りますが、併し一度突進の命令が下りました以上は、縦今火の中へなり飛び入つて、一步たりとも後へは引かぬ日頃の決心ですからそれゆゑ知りつゝ急進せんと致したのでムいます」と恠う對へたさうですが、流石に我兵でムいます。木内大尉は心に其の勇氣膽力を稱賛しながら、部下を暫らく止めて置いて、自分は先頭に立ち、右手に軍刀を掲げ、左手に眼鏡を把りつゝ、直立して敵状を偵察して居りましたが「ム、未だ勿々退却せんかな、…イヤ最うソロ／＼退くわい、ム、退く／＼、味方の砲弾も緩慢になつて來たな、ソラ最うボツ／＼突進の時機ぢやぞ」と言ふ詞の畢ると同時に、ビュッとして飛び來つた銃弾は、痛はしや此の勇膽無比にして義氣に厚く、將來大いに望みある大尉木内末男君の胸部へ命中したから堪りません。遺の大尉も「アッ」と叫んで、動乎と其場に倒れました。後方に居たる久保少尉は、馳せ行きて抱き起し「中隊長／＼、確乎／＼」木内「ム、ム、ト、ト、突進／＼」と早や殆んど人事不省でムいます。

茲で一寸故木内大尉の傳記を演へて置きますが大尉の本姓は藤原氏にして、千葉常胤の後裔ださうでムいます。數代眞田家に仕へまして、信州松代に住し、大尉の父は名を仲氏と云ひ、嘗て眞田家の學監兼軍監とな



りました事がムいす。母はりん子と云ひまして、三男八女あつて大尉は其の九人目のお子で、爾も次男でムいす。姉君們は皆同藩知名の士に嫁し居らるゝさうです。大尉は明治四年十月二日を以て、信州松代に生れましたが、幼少より穎悟にして、膽力群友に超え、遊び戯るゝ中にも何處となく普通の小兒とは異なつて居たさうであります。年十六才にして松代小學校を卒業し、爾後英漢數の學を修め、孜孜汲々として、盤雪の苦を積み、二十一年に至り驟然志を齎らして上京し其の九月を以て陸軍幼年學校に入りましたが、是ぞ木内氏が武門に身を立つるの端緒にして、氏に取つては虹龍の深淵を得たる心地でありましたが、其の天稟の勇武と英才とは、武に文に他の生徒を凌いで、嶄然頭角を露し、成績常に優等にして、而も氏の謙讓謹直なる、同僚の尊信を受くるに深く上官の信任する所となりまして、舎長を命ぜられた位です。二十四年六月業を卒るや、成績優等品行方正の廉を以て、特に皇太子殿下より双眼鏡を下賜せられ、士官候補生として近衛歩兵第四聯隊附を命ぜられました。此時面白い話のありましたのは、千葉縣習志野に行軍をいたしましたるに、時恰も夏の真盛りであつた、炎熱燬くが如く、十里に近き此の行程は、如何に身輕の装ひにて、疲れと困苦とを訴ふる位でありますのに、木内氏は如何なる考へか、自分の背負ふ背篋の内に數塊の石を入れて、以て其の重量を増加せしめました。側に在る候補生が「君、何て其機事をするかね、故らに重くして馬鹿くしいぢやないか」と言つたら、木内氏は莞爾笑つて「君が馬鹿くしいと思ふか知らんが、僕は又た常に實戰の事をのみ心懸けて居るから、今日は戰争の時背篋に入れて、兵士が背負ふだけの重量にし

て、一ツは軀體を鍛へ、一ツは兵士の勞苦を何様なものと試みるのぢや」と應へたので、問ふた人は恥入つたさうですが、是等は實に氏が行爲に現はれたる一端にして、其の用意の周到なる、人をして感歎措ざらしむるものであります。サア慇懃云々行爲ある人物でしたから、始終上官には信用され、部下は懐き、同僚には尊信されたのであります。其の翌年なる廿五年の一月を以て士官學校に入學し、盤雪案、或は柳風沐雨、孜孜として學術を究め、其の軍事上の識見は、更に一段の光彩を添へましたが、二十六年七月を以て卒業し、矢張成績優等歩兵科の首席を占め、畏くも陛下の御前に於て、中隊教練を天覽に供し奉り、時辰器を下賜せられたは、實に木内氏の名譽でムいしました。此日直ちに見習士官を拜命し、二十七年三月歩兵少尉に任ぜられて、次いで正八位に叙せられました。然るに適ま二十七八年の日清戰役は起りまして、木内氏は二十八年三月を以て中尉に任ぜられ、第三中隊の小隊長として軍に従ひ、清國盛京省に上陸したるが、適宜休戦の約成りたるを以て、師團は更に臺灣守備として、六月十六日を以て南下して、七月四日基隆に上陸しました。爾來木内氏は苦熱を凌ぎ、瘴癘を冒し、八月三日大いに枕頭山に戦ひ、續いて鷓面、金洲、管衣抗、雲林、苗栗、八卦山攻堅に際し、大肚溪を渡つてさうして更に一支流に出遇ひますると、其の水勢の激流奔湍、容易に渉る事が出来ませんで、爲に全隊の將卒も躊躇するに至りました。時に木内君は稍上流に於て一條の竹繩、即ち竹を編で橋の様に架してあるのを見まして「ツム橋があるくサア彼箇を渡らう」と命じましたが、部下の曹長以下兵卒等之を見るに、如何にも危険なる釣橋にして、容易に渡れるものではあ



りません。如し過つて一度足を踏み外さうものなら、最早事已てしまいますゆゑ、曹長以下皆難するの色のり  
 ます、木内末男氏は此の體を見て大いに憤慨し「爾等、此位るの所を難所として躊躇するとは、何事ぢや、  
 此様所が涉れぬ様では、逆も戦争は出来るものぢやない、サア己に續けッ」と言ふかと思ふと、見る／＼中  
 に一躍して彼の竹繩を攀ぢ、幸うじて彼岸に達しましたが、此の不敵なる動作は、如何に部下の心を觸れし  
 ましたか、曹長以下是に激刺され、衆餘争ふて漸く渡河を終りましたが一人として過ちなく無事に向ふへ渡  
 り終つた時木内末男氏は一同に向ひ「先づ目出度かつた、爾等は此の橋の下を見、實に深淵にして、殊に  
 淵き立つて居る所、見るからに慄然として物凄いのである、然れども貴様等に其事を言ふと氣が慄して渡る  
 事が出来ないと思つたから、言はなかつたが、サア／＼無事で宣しかつた」と言はれて、部下の下士兵卒等  
 皆驚いた位ださうです、然し木内氏は決して暴虎馮河の勇を好む人ではないのであつて、日頃は極めて内端  
 で柔和な人であつたさうですが、一朝斯の如き場合に臨むと、非常なる勇猛家となつて、人々をして殆ん  
 ど別人を見るの感を抱かしたさうですから、是等を以て見ると、木内氏は全く沈勇家と言つて過言であり  
 ません。

氏は極めて風流氣もある人で、茶道や花も心得て居られるさうであるが、其夜は山麓に露營をする事になり  
 ますと、暗夜の事ですが、敵を前に控へての露營なるゆゑ、勿論焚火をしようと云ふ事は出来ません、そこで  
 木内氏は一計を案じ出して、部下に向ひ「貴様等、皆燈を集め、／＼燈狩をせよ」と言つたので、兵士等は

何の考へも附きませんで「小隊長殿が燈狩を許されたぞ、有難い、小隊長は極めて怒りのあるお人ぢ  
 やから、燈狩を許して、我々を慰めさせて下さるのぢや」と喜んで皆更／＼燈狩を行行りましたから、  
 忽ちの間に數千の燈を集め來りましたが、木内氏は是を或は帽子の裡に入れたり、又は手拭半巾等に包んで  
 以て燈火の代りとなし、此の光りに依つて、時計磁石等を見て、時を知り方角を考へなどして、以て其の任  
 務の遂行を全ふしたさうですが、此等の事は何でもないやうであるけれども、勿々淺慮短思の者の能くする  
 所では△いけません、臺灣平定の後、東京へ歸るや、功を以て勳六等瑞寶章、及び功五級金鷄勳章を賜はり、  
 釋なく同師團第二旅團の副官に補せられ、次いで三十一年二月參謀本部出仕を仰せ付けられ、又た歩兵四十一  
 聯隊附に補せられましたが、同年十二月陸軍大學校に入り、精研盡瘁、益々斯道の蘊奥を究めまして、以て  
 大いに爲す所あらんと致しました、翌三十二年十一月大尉に任ぜられ、幾許もなく正七位に叙せられ、將に  
 三十四年の七月を以て陸軍大學を卒業せんとするので△います、然るに圖らずも起つた北清の事變に、氏は  
 四十一聯隊の第十中隊長として出陣する事になりましたが、是は固より四十一聯隊附になつて居るのだから、  
 當然の事であつて、今更如何に愛むと雖も、何とも致し方はありませんが、氏を知る人は皆、前途有望の眞  
 將校であつたのに、遽に惜むべき事であつた」と言はれて居ます、それで此の北倉の戦争は屢々演ぶる如く  
 北清事變三大戦争の一つであつて、就中夜中に始めた事ゆゑ、意外に死傷も多い中に、將校の負傷者は  
 十一名もあつたが、將校の戦死者は此の木内大尉一人であつたから、尙更人々に惜まれたのでありませう、



左の書面は大尉が其の父君に宛てたる絶筆で、  
 拜啓益々御清康奉賀上候乍去日々暑々相暮り候故御難儀と奉察候野拙儀も至極無事に任候間御安心被下  
 度奉願上候去る二十四日午後露兵の管理に属する鐵道に依り當地に到着致候是は恰も往年臺灣に  
 出征候時と相違無之殊に給水の不充分なるには困却致し居候當地には各國兵集合致し候ゆゑ云は居な  
 がらにして各國軍隊視察を爲し得ることも可申候

第十一聯隊等先發軍隊の繼續美望に不堪何にとか一日も早く假令一回なりとも彈飛ぶ境に出入致度念じ  
 居候現今は一隅の事情すら尙知り得るの機に乏しくまして全局の事に於ては全く闇々黒々の中に有之候故  
 如何に成り行くべきや想像し得ざる所に御度候少なくとも北京城頭に日軍の軍旗を飄すの幸は是非共  
 致し度と祈居候各位暑々の御障も無之御起居被在候や御自愛奉願上候何かな申上度存候へとも雖無  
 性の事故此に擱筆仕候皆々様始め校友各位へも宜しく奉願上候草々頓首

七月廿八日

天津に於て

末男拜

御父上様

大尉が此の絶筆の中に、北京城頭日軍の軍旗を飄すの幸は云々とあるこそ、大尉が征途に登るの時より已  
 に胸中に蓄きたる快戦の希望でありましたらうに、憐れむべし、其の勇ましき快戦を、眼前に見るを得ずし

て、遂に身を敵彈に委ね、王庄原頭の草野に眠りました、然れども大尉が渾身より流れ出たる血潮は、茫々  
 たる蕪草を染め、忠君愛國の精神を涵養せるの肥料となつて、日本の旗風中に永久に枯るゝの時なく存じて  
 居ります、大尉たる人、又以て瞑するに足りませう乎、因に一寸演じ置きますが、大尉が三世の祖木内八右  
 衛門氏は、大阪夏の陣の時真田幸村に従ひて戦死すとの事、大尉が家、既に二名の戦死者を出す、嶮ろ家門  
 の榮譽と謂ふべきで、

《百六十》

茲て又た左翼隊、即ち火藥局方面へ向つて隊の方へ話しが移つて参ります、歩兵二十一聯隊の第一中  
 隊大尉柴豊彦君の率ゆる隊は、火藥局の陥落しましたる時に、向ふへ敵が見えますので「ソレ彼處に敵が居  
 るぞ、行けッ」と云ふので、中隊全部勢ひ込んで急進して見ると、勿々堅固なる掩堡が築いてあつて、意外  
 に優勢なる敵が居りますから、中々一個中隊位では迎も難退する事は出来ません、されども柴大尉は退却  
 すると云ふ事は出来なから、屈せず抗ますに撃ち合つて居りますと、敵は此方を小勢と侮つてか、動とも  
 するとワワッ〜と喊聲鋭く突撃して来さうになりますから、柴大尉は「假令敵が逆襲して来ても一歩も  
 退くな、全隊皆死するまで戦れッ」と號令して、兵士等も必死の覺悟にて戦つて居ります、何分にも衆  
 寡敵し難いので、柴大尉は「オイヤ、貴様後方へ行つて、何の隊でも早く来て貰ふやうに言  
 へ、此の有様を報告して援助を乞へ」と命じましたので、部下の兵は領承して直ちに馳せ返りました、ス



ルと間もなく茲處へ駆け付けて参りましたのは、四十二聯隊の第三大隊、即ち少佐田邊光正君の率ゆる隊で  
 ムいまして、田邊少佐は柴中隊の苦戦を見るより「サア確乎やれ、田邊少佐が指揮を取るぞ、何の高が敗  
 のチャン兵ぢや、假令多勢にせい、何程の事があるものか、蹴散らして丁へ」と大聲叱咤して戦ひますが、  
 敵は次第く強ち参りまして「勿々容易に退却しませんので流石の田邊少佐も意外に思ひまして「是は  
 怎麼も頑強ぢやなア、馬鹿くしく強いのう」果大膽實に意外に頑強な敵です、未だそれでも少佐殿が  
 出になつてから、はそんな事ありませんが、一時は逆襲して来さうでしたから、大膽に心配しました…  
 ア、又た彼の通り逆襲して来さうになります」田邊も、成程、生意氣な奴原ぢや、確乎やれ、何大丈  
 夫ぢや、若し逆襲などして来たら、一人残らず殺して丁へ」と激勵して居ますが、兵士等は最う堪り  
 兼ねるを見えまして「中隊長殿、未だ突進は参らうしますか」未だ早い」けれども此方から行かなくと、  
 向ふから参ります、早く行かないと最う来さうです」と兵士の突進したがるは無理はありません、此方から  
 突貫しないで、如し向ふから突込んで来られまると、それこそ如何なる状況に陥るかも知れぬですか  
 ら、それで斯の如く突進したがるのであります、併し又た隊長方の心になつて見ると、無暗に此の優勢な  
 る敵の中へ突進して、若し敵が尙更頑強に抗敵して退かぬ時は、却つて此方が苦境に陥りますゆゑ、それ  
 で憚う大事を取つて、無暗には突撃させませんのです、然るに此時四十二聯隊の第二中隊が、此の苦戦の状  
 況を聞いて駆け付けまして、大隊長殿、聯隊長殿の命令で参りました」田邊爾か、好く来た、今意外に頑強

な敵に衝突したので、弱つて居る所ぢや、彼の間へ増加せよ」と直ちに増加を命じたので、味方の勢ひ  
 は漸く能くなつて参りました所へ、亦も四十二聯隊の第八中隊が敵を追撃しつゝ、矢張此處へ馳せ付けまし  
 て、左翼の方へ増加を致しましたから、是で恰と七個中隊人数になると、約一千四百人ばかりになりました  
 ので、田邊大隊長「サア最う是ならば突撃しても宜しいぞ」と田邊大隊長は、此の七個中隊の兵を合して、  
 敵の掩堡を占領せんと決心致しましたから、今や將に突撃の命令を下さんとした其の一刹那、山住副官が「大  
 隊長殿ッ」と呼びかけました、  
 敵は我が軍の攻撃に堪へ兼ねて、ハヤさうく退却を始めましたゆゑ、此機失ふべからずと思ひましたる田  
 邊大隊長は、已に突撃の號令を下さんとした一刹那に、山住副官は之を止めまして「大隊長殿暫らく」と  
 聲を掛けましたから、田邊少佐は回顧つて「何ぢや山住、前面に地雷火が埋めてありはせんかと思ふです、間  
 諜の齎したる報告中の地圖に在る地雷火の埋設箇所は、多分此邊ぢやと思ひましたが」田邊も、爾ぢやつた  
 なア、爾々、是は能く心附かれた、吾輩漫然して居たわい…オイユラ、皆注意せいで、地雷火があるぞ  
 く」と大聲に注意を促しましたので、流石の吾軍も地雷火を聞いて、些し躊躇致しました「地雷火は悔れ  
 ぬぞ、過日露國兵は地雷火に罹つて大損害を蒙つたと云ふが、支那軍人は昔から地雷火を使用する事に慣れ  
 て居て、支那の地雷火と来たら、勿々馬鹿に出来ないさうぢやせ」も、爾だ、注意せいで、チャン兵の地  
 雷火に罹つては、此様耻はないからなア」など、互に注意し合つて、我兵は容易に前進を致しませんので田



邊少佐は「サア能く偵察をせなければ不可」と云ふので、是から各々偵察を致しましたが中にも大隊副官の中尉山住清三君は、彼方此方を偵察するに、果して畑中爾も敵の掩堡の前の方に地雷火が埋めてある事が分りましたか、此の偵察をして居る中に、敵は追々逃げ去りますので、山住副官は残念に思つたが致し方がありませんで、尚ほ偵察しますと、地雷火は唯一個所ではありません、爾も三個所にも埋めてありました、山住副官は所々偵察中に、敵は畑中に潜伏して居て、横から打出したものと見えて、其の一發は痛ましくも山住副官の肩の所に命中致しましたので、副官は踏躓として動乎と其處へ倒れましたが、起き直つて漸う歸り来りましたから、田邊大隊長は直ちに後方へ送りました、然るに此時廿一聯隊の十一中隊、即ち大尉島村勘太郎君も此處へ着きましたので、田邊少佐は島村大尉に向ひまして「君の隊は左側の方から敵堡に迫つて呉れい、本隊は正面から壓迫して、敵堡を包圍するやうにして突撃し一舉に抜いて了はう」と言はれましたので、島村大尉は領承して左側の方へ向ひました、そこで三方からツワーワ〜と喊聲最も鋭く突進しましたが、敵はモツ最前から逃げ出して居たのだから、いよく益々狼狽して逃げ始めました我軍は是を見るや、各隊烈しく壓迫して、遂に難なく敵の掩堡に乗り入りましたが、困る事には此處を逃げ出したる敵は、皆高粱の間に隠れ〜逃げますので、是を追蹙する事が出来ません、田邊大隊長は「怎麼も彼奴等、匿蔽して遁る〜には弱るわい、些しも姿を見せない、如何に高粱が繁茂して居るにもせよ、さうして又た逃げ方が頗る巧い」爾ですなア、是では追よて見た所が仕方がありません、田邊「ム、仕様がな、兎に角ま

ア散つて居る隊を編めやう」と言つて、是から喇叭率に命じて、集合の體を奏させますが、言ふまでもなく一度戦争をしますと、兵が散つて離れ〜になるものですから斯の如く集合するのでムいす、田邊少佐は集合が畢ると「サア飯を食へ〜」と言ふので、各隊の兵に喫飯をさせますが、各將校も兵士も昨夜食したなりであつて、随分空腹になつて居りますから、大隊長から喫飯の命が下ると、喜んだ事は一通りてムいせん、

「空腹い時に不味ものはないとは好く言つたもので、甘いアム、甘い、併し此の戦地の食物困難なる事は、國に居る奴等には分るまいが眞箇に見せて遣りたいなア」爾だ、我々は斯の如く困難をして居るに引かへて、國に居る奴等は、此の暑さ中伊香保だとか、有馬だとか、温泉へでも別嬪を伴れて、這入り込んで居る奴が澤山に居るぢやらう、それを思ふと痛に障るなア」田邊貴機等、何を著甚由來事を聒絮喋舌つて居るのぢや、早く喰つて了へ〜……ナニ、此の困難を本國の人々に知らせたい、馬鹿を言ふな、何が困難ぢや、何も困難な事はあるまい、軍人が戦場に臨めば、暑さや寒さ、腹の空る位る當り前の事で、是位な事を困難と思ふやうな事では、戦争が出来るものぢやない、敵兵は怎麼か、戦争に負けて逃げる敵兵こそ、眞に困難と云ふものぢや、戦ひに勝つた方は困難所か、世間に此の位な愉快は又とありはせんわ、それを困難ぢやないと、爾等勿體ない、爾が當るぞ、ハイ、それは爾でムいすが「田邊それは爾でムいすが、如何したか」「エー本國に居て温泉場へでも行つて居る奴と比較しますれば、多少困難で」田邊「馬鹿ツ、温泉と戦争は」



所にする奴があるか、餘程備馬鹿ぢや、アツハ、イヤそれは爾と、副官を誰にか任命しなくてはならぬなア」と田邊大隊長は少時考へて居りましたが、是は前回に在る如く、田邊少佐の副官山住中尉が負傷しましたから、其の後任を誰にか命ずるのでありますが、少佐は中尉宮崎右一郎君を呼んで「今から君を以て副官と爲すに依つて、其の心算で行られい」と命じたので宮崎中尉は喜んで拜命しました、ヌルと此時、四五百米突前方の畑中より、美麗なる旗三四本を押し立てたる一團の敵兵が不意に現はれて、田邊少佐等の占領なし居る掩堡に向つて襲ひ来りました、我軍之を見るより「ヤア、又來たく今になつて襲來するとは、健氣な奴原ぢや、相手にするは不足ぢやが、折角襲來したものぢやから、戰ふて遣れ」など、最う此時は敵を侮り切つて居りますので、戯談を言ひつゝ、此の敵に向つて撃ち出しますと、此の敵は又意外に頑強にして、怎麼しても此の掩堡を取返さうと云ふ目的と見えまして、勿々烈しく喊聲を揚げながら、突進して參りますので「ヤア、是は生意氣ぢやぞ、中々侮れぬぞ」彼處に敵の隊長らしい奴が居るすな、アレ彼の赤いやうな色の旗の下に……」と兵士の指す方を大隊長は眺めますと、如何さま立派な軍服を着した將校らしいのが、頻りと指揮號令をして居りますから「彼奴を狙撃せよ」と命じて狙ひ撃たせましたが勿々容易に命中しない様でムいます、併し其中に撃たれたのか、怎麼したのか、其の隊長らしい男の姿が見えなくなりますると、敵兵はポツ／＼退却し始めましたので、田邊少佐は「ソラ敵は又退き出したぞ、想ふに今の隊長らしい奴が斃れたに違ひない、サア皆追撃の準備に蒐れ、本隊は何でも此の勢ひに乗

じて、北倉まで長驅し、一舉に北倉を占領して了ふ心算ぢやから、全隊其の覺悟で居れ、吾輩は怎麼しても、北倉先登の攻名は本隊の獨占にせんければ止まん」と、少佐は意氣健昂、今や將に追撃ならんとして居る所へ、左翼に屬する砲兵隊、即ち砲兵第五聯隊が此の直ぐ後まで參りまして其の副官なる山方松之助君を、田邊少佐の許へ使ひに寄越したのでムいます。

(百六十一)

茲て又左翼に屬する砲兵隊の運動に取巻るのでムいます、抑も砲兵第五聯隊は山砲のみにして、其の聯隊長は永田大佐でムいます、大佐は部下四個中隊だけを率ゐまして、左翼本隊の後方より前進しましたが、始め眞暗中は、歩兵で戰闘を開始した事が分りましても、砲兵は撃つ事が出来ません、それは勿論暗くは目標が分らず、敵を撃たうとして味方を撃つやうな事があつては大變ですゆゑ、それで歩兵が戰闘する音響を聞きながら前進しつゝ、夜の明けるとを候つて居たのであります、其中に火藥局は歩兵の突貫に依つて、陥落して了ふたと聞きましたので、永田聯隊長は「サア是からが本隊の力を勞する時だぞ」と言つて居る所へ、果して山口師團長から傳令が參りましたが、此時砲兵聯隊長始め、總て砲兵隊の人々は土堤の南方に在つて時機を候ちつゝ居たのですから、聯隊長は他の將校と共に、土堤の蔭から頭だけ出しては、火藥局韓家樹方面の戰争を望見して居たです、永田聯隊長「思ひの外早く火藥局は陥落したが、併し此の腐漠たる原野に、防禦線を想う延長して張つて居られては、北倉まで行くのは未だ、幾多の苦戦を経なくてはなるまい」爾



てムいませぬア、中々方面が廣うムいませぬからな』永田「ヤ、工兵中隊長を呼んで呉れ」と命じますと、間もなく土屋工兵大尉、即ち工兵第五大隊の第二中隊長が参りましたから、永田砲兵大佐は「工兵中隊長、此の土堤を一ツ切開いて貰ひたいわ、今に最う前進しなくてはならぬから、切開いて、砲兵の通過出来るやうにして欲しい』土屋「ハイ、承知しました」と土屋中隊長は直ちに部下に命じて土堤の切開に取敢りました。是は間もなく出来ました所へ、前進したる如く師團長からの傳令が「前進して敵を追撃するやうに」との命令を齎らして参りましたので、永田大佐は「サア前進せよ」と云ふので、ズン／＼土堤の北へ進入して、火薬局の西を通過しまして、同局の北方なる畑地まで参りましたが、是が恰と五時半の頃で、前には右翼隊の方で演べてある右翼隊の砲兵が、王庄の敵に向つて砲撃を始めた頃で、永田大佐も「サア、本隊も右翼隊の砲兵を援助して、王庄の敵に砲火を浴せよ」と云ふので、其標準は二千五百米突を以て撃り出しましたが、永田聯隊長は「未だ不可ん、些と遠い／＼今五六百米突前進せよ」と言ので、是から又た六百米突ばかり前進し今度は千九百米突の標準で、王庄を砲撃しますと、此の標準が敵に可かつたと思はれて、面白い位に敵の堡壘中に落下致しましたが六時に至つて敵も堪り兼ねたと見えまして、王庄の敵は退却するのが知れて参りました、右翼隊の歩兵が王庄に突撃し、木内大尉が戦死したのは此の時であつたので、永田大佐は王庄の敵の退却する状況を遙かに望見して「好し、最う好い、サア是からが目的の北倉ぢやぞ、彼の逃ぐる敵を追撃しつゝ、北倉へ向つて前進しやう、それには掩護兵を附けて貰はな

くては不可んナア……ム、幸ひ彼處に田邊少佐が居るやうぢやから、一所に行かせやう」と言はれましたが、恰ど此時、田邊少佐の隊が敵の掩護を占領し、糧食を喰ふて、又た逆襲の敵を撃ち退け、今將に逃ぐる敵を追撃せんと準備中であつたので、ムいませぬ、

そこで砲兵聯隊長永田大佐は、敵を追撃しつゝ、北倉まで進まんと思ひますので、其の副官大尉山方松之助君に向ひまして「大佐「オイ副官、田邊少佐の所へ行つてなア、是から砲兵は北倉を指して前進するから一所に行かう、掩護をして呉れいと、爾ふ云ふて請求せられよ」と命じました、山方副官は承知して田邊光正君の許へ参ります、大隊長殿、砲兵聯隊長殿が、是から直ちに北倉を指して進むから、一所に行つて貰ひたいと申します、如何です』少佐「ム、それは宜しい、本隊も北倉に向つて前進するの準備中であるから、是非行くが、併し本隊は成るべく急行して、北倉を一時も早く占領したい考へであるから、或は砲兵隊より先に北倉へ入るかも知れぬ、砲兵聯隊長に爾言ふて呉れ玉へ」と言ひましたので、山方副官は返り來つて、其の趣きを報告しますと、永田大佐は暫らく考へて居りましたが「それは道理な譯だが、併し今の所、砲兵に掩護兵が一人も附いて居らるので、吾輩甚だ心配でならぬ……では今一度行つて、砲兵の掩護だけして呉れいと言はれよ」と命じました、そこで山方副官は再び田邊少佐の許に到つて、其の事を演べ「萬望、砲兵隊の掩護兵だけでも可いから附けて下さり、砲兵隊の側に歩兵が一人も居らるので、聯隊長殿も非常に心配して居ますから」と言ひますと、田邊大隊長も「成程、是は道理な請求であるが、併し本隊も僅々是だけ



の隊で前進するのぢやから多く掩護の爲に置いて行くこと云々事は出来ぬ……憊うと、ては一個小隊だけ掩護に残して置かう』と答へました、此の砲兵隊掩護と云ふ事は已に讀者諸君は御存知でありませうが、砲兵は歩兵と異なりまして、極めて近くへ敵が迫つて参りました時は、是を防ぐの力が殆んど無いと言つても可い位でありまして、寧ろ危険なものです、故に砲兵には必ず多少之を護衛する歩兵が附かなくてはならぬので、ムいます、此時恰と砲兵隊の側に歩兵が居ませんでしたから、そこで永田砲兵隊長が田邊少佐に請求したので、ヌルと前の如き答へてすから、永田大佐は之を聞いて『では仕方がない、塚本旅團長に掩護を請ふて見い』と言はれますので、山方副官は又も塚本少將の居らるゝ所へ行きましたして請求しますと、塚本將軍『宜し、一個中隊だけ遣らう』と被仰つて、廿一聯隊の第五中隊に命じて、砲兵の護衛たらしめました茲に於て砲兵隊は又た八千米突ばかり前へ進んで砲列を布き、半は北倉の傍へ向けて砲彈を加へ、半隊は北倉の掩護を目標として盛んに撃ち出しますと、敵も亦北倉の堡壘から、ズマーン／＼烈しく撃ち出したので、茲に又もや砲火の盛んなる交換を爲すに至りました、永田聯隊長は些しく高い丘の様なものがあるので、副官山方大尉と共に其處へ登り、眼鏡を取つて北倉方面を見て居りましたが『ム、勿々敵は深山居るわい……矢張り速射砲を有して居るな……ム、此の銳利な武器を持つて居るくせになア……ヤア、今の一發は甘い所へ落下したぞ、ム、甘い』副官『勿々彈着が好いてすから、是では敵も堪らんでせう、最う徐々例の三十六計を行ひ出させよう』永田『爾ぢや、最う逃るぢやらう、併し日清の役と比べると、敵は長足の進歩をし

て居るわい』

田邊大隊長は前に潰れる如く、一個小隊だけを砲兵の護衛に残して置いて、他の諸隊を率ゐ、北倉を差して前進しますと、敵の砲彈は前後左右に續々と落下破裂致しまするばかりでなく英國砲兵隊の彈が参りますから、田邊少佐は是を見て『ヤア是は不可んど、英國軍が我々を敵と見做して砲撃するに違ひない、敵に見られて堪るものか、オイ副官、急いで英の砲兵隊の所へ行つて、撃つのを止めて貰へ』と命じたので、宮崎副官直ちに馳せ行きました、總て英國軍の砲兵陣地に到りますと、其の砲兵隊は益々盛んに打出さんとして居る所でありませう、宮崎副官は、駆けながら大聲に『砲撃は暫らくは堪ら下さい、我が前兵は既に彼の通り北倉を差して前進して居りますから、貴軍の砲撃は、我が前兵行進路に落下して、頗る危険です』と呼はつたので、英國の砲兵隊長は始めてそれと心附いたと見せまして『それでは今彼處へ行かれる隊は、日本軍でありましたか、イヤ怎麼もそれは危険事を致しました、吾々は又た如何に日本軍が勇進したにせいで未だ彼處までは進む氣遣ひはない、是は必ず敵の逃行くものと思つて撃つたのです、實に小官の不注意でした、萬望で海軍を願ひたい』と言つて謝したとらうてムいます、英の將校等は『今に始めぬ事だが、日本軍の勇進には唯驚歎するの外はないです』と言つて、大層に稱揚致しました、却説此方は田邊大隊長副官を英の砲兵へ遣つて置いて自分は尚ほ前進せんとしたる時『ヤア北倉が焼ける』と叫んだ兵があるの、見るに如何ぞ、北倉が焼け出して、火焰は炎々として立昇り、煙は騰々空に漲つて物凄き光景でムいます



田邊「よ、是は我が砲彈の爲に焼け出したのであらう、サア此の勢に乗じて突進すれば、手に唾して北倉は取れるぞ」と激まして、又た前進する事八百米突ばかりにて、高粱は大いに刈つてあつて、四方好く分るのてムいすが、困る事には味方の砲彈が此の附近へ落下破裂して無暗に前進する事が出来ません、田邊大隊長は暫らく前進を止めて見て居ると、王庄に居た敵が今逃出して、北倉へ逃げ込んで居る最中でムいすが、  
 田邊「サア、敵は王庄から北倉へ逃げ込んで居る最中ぢやな、彼の敵を撃て」と號令致しましたので、我が各中隊は、各自思ひく此の敵に向つて射撃を烈しく行ひますと、後方に在る砲兵隊も、又是を見附けたるか、矢張り此の敵に向つて砲撃を加へ出しましたが、其の砲彈は面白い位に逃げ居る敵の中に落下破裂しますので、敵の斃る者数を知らず、田邊少佐は斯と見るより「サア、早く進んで北倉の船橋を占領して丁へ」と云ふので、各中隊一所になつて突進致しますと、敵は周章狼狽して騒いで居ります中、我軍は疾風の如く前進して、何の苦もなく北倉の船橋を占領してしまふと、逃げ後れたる敵はいよく狼狽なる事は一通りでありませぬ、撃ちく船橋を渡つて北倉に入りました、それであるから、北倉の戦と云ふけれど、其實北倉の市街では歩兵の激戦はなかつたのでムいまして、此の田邊少佐の率ゆる隊が、北倉の先登第一でムいすが、少佐が勿々勇ましく前進したから、思ひの外速かに、想ひの外苦戦なく、北倉の占領が出来ました、世間のお人は白石大尉の大活砲臺先登、井上工兵少尉の天津城門破りは知つて居られて、新

聞に雑誌に繪畫に、之を記し之を畫いて、後世までも傳へられるやうになつて居りまするが、北倉の先登者田邊小佐が、此の僅少なる部隊を率ゐて、勇ましく先登し外國諸軍隊を驚かしめたる事實は、恐らく日本の旗風より外に記したるものは一もあるまいと思ふ、サテ北京陥落、清帝都落までには、是より尙ほ一層世人の未だ知らざる面白い事實談が澤山あります、  
 田邊大隊長は勇ましく前進して、第一番に北倉へ入りましたから、各中隊に命じて彼方此方を搜索を致させましたが、最早や敵は逃げ去つて居りませぬ、併し死骸は多く残した儘に逃げて了つたし、人民の兵亂に怖れて、深く家の中に隠れ潜んで居る者も澤山ありまするが、田邊少佐は是等人民に向ひましては、極めて懇切に、日本軍隊は、決して汝等を害する様な事はないから安心せい、併し不良なる事を爲せば、嚴しく罰する、良民は十分に保護して遣すゆゑ、安心して居れ」と言つて、良民を緩撫致しますので、人民の喜びは大層なものでムいすが、サテ此時田邊少佐は、偵察兵を四方へ出して、敵状を偵察させ、我兵は所々を搜索して居りますと、北倉の西北に當りまする王庄、茶棚(王庄茶棚は一ヶ所の名)の方向に、多くの敵兵が居る事が分りましたゆゑ、搜索兵は馳せ返つて、之を田邊少佐に報告致します「少佐殿、西北方に敵兵が澤山居ります、立派な旗を澤山立てまして、ハイ、餘程な大部隊でムいます」田邊「フム、爾か、ドレツ」と田邊少佐は、副官や各中隊長を従へて、船橋の岸に出で、見ますと、成程種々なる旗を澤山に押立て、多數の敵が居ります、田邊「是は勿々居るな……怎麼しても五六千の敵ぢやなア」副官「爾です、旗が何本ありますか



な、一、二、三と……一本二本三本」と宮崎副官は一本一に数をままして「大隊長殿、恰と二十三本立て、居ります」田邊「ム、勿々立派な旗があるな、併し此方へ寄せて来る様子も見えぬ……ア、彼處は地圖に在る王庄茶棚と云ふ所ぢやな、ム、其の先が桃花口と云ふ村落になつて居る」副官「一寸撃たして見ませうか……怎麼も些と遠過ぎますな」田邊「ム、駄目ぢや、砲兵が居なくては迎も不可ん」と言つて居る所へ、一人の兵は東方から一散に馳せ来りまして、田邊少佐の前に一禮なし「大隊長殿、東方にも敵が澤山黒山の如くなつて、群集して居ります」と報告したから 田邊「爾か、ム、好しッ」と田邊少佐は副官を従へて行つて見ますると、如何様東の方にも澤山居ります、けれども是とて矢張り、距離が遠くして、歩兵の弾にては迎も届きませんゆゑ、唯徒らに見て居るのみでムいますから、田邊少佐も残念に思ひましたが、双眼鏡を取て熟々敵の様子を見ながら「彼等安心して見て居やがる、不都合な逃方をしやがッたものぢやなア……最う我が砲兵が来るうなものぢやが、砲兵が居やうものなら、それこそ肝を潰さしてやるが」副官「餘り大隊長殿が鋭く勇進をなすつたものですから、敵も勿論驚いたでせうが、味方の人々も意想外の感に打たれたでせう、ですから後継部隊は後れました」などと話して居られましたが、是は全く田邊少佐が非常に勇進したから、此の隊だけが諸隊よりもズツと早く、北倉に入つたのでムいまして、此時恰と八時一寸過ぎ位めてムいました。諸外國人は北倉に入るのは甘く行つて、本日の午後であらう言つて居たさうですが、それが午前八時に我が先頭隊が這入つて了つたのですから、餘程膽を潰したさうでムいます、却説田邊少佐は砲兵の來ない中は、敵

と撃つ事も出来ずと云つて、此の僅々たる一小部隊で、退却して暇と云ふは餘りに無謀であるから、止むなく北倉を守備して後継部隊の入り来るを候つて居りまするが、其間に敵の殘して行つた天幕や、それから船、武器等を分捕らせんと諸隊へ之を命じましたので、各中隊は手分をして分捕に蒐りますると、天幕の數ばかりも約八十も分捕ましたし、武器には大砲一門、船も勿々に澤山ありましたが、此の舟の分捕は、是は我軍に取つて、後日頗る有益であつたのでムいます。

〔百六十二〕

儲又師團長山口中將は、司令部幕僚を率ゐて行進し、九時半少し過ぎに至つて、北倉の橋の側にまで着致しますると、前回に演じましたる右翼隊も、逃ぐる敵を追ひつゝ、茲に集つて居りまするので、眞鍋旅團長は師團長の許に來りまして、互に御挨拶がめつて 山口「まあ目出度う萬歳でムいます」と言つてお笑ひになりました 山口「露國軍の運動は怎麼ぢやね、些しは様子が分つたかね」眞鍋「イヤ一寸も分らぬです、最う何とぞ知れらうなものぢやと思ふて居ますが」と言つて居ると、其中に英米の軍隊も逐漸に集つて參りましたから、其の將校等に向つて露軍の様子を尋ねて見ると、米の一將校が言ふには、怎麼も好くは分らぬが、露軍は前進した様子が見えぬです、それは多少戦ふた事は戦ふたでありませうが、全軍進んで左岸一體の地を占領した様子が見えませんと、應ふるので我が司令官始め、諸將校が皆不審に思つて居りますると、果せる哉、米の將校の言ふ如く、此時露軍は西沾北端にボツ／＼頭を出し始めました、我兵早くも是を認めて



「ヤア露國兵は彼處へ出て来た、アレ彼の通り、吾々の通つて来た西沽の村端へ」と叫んだので、人々眼鏡を取つて西沽方面を見れば、如何さま意外にも露國兵が續々と右岸に露はれて参りました。我が師團長を始めとして、英米の諸將校も我が將校も、是には實に一驚を喫しました。縦令如何なる事情があつたにもせよ、那兒程右岸左岸と両方面に分れて戦ふ事に確約し、而して彼が司令官は左岸の敵を撃退前進して以て、我れと英米との右岸軍に十分の援助を興ふる手筈なるに、今頃になつて、我軍隊の通過し來りたる其の跡へ露はれ來るとは何事ぞ、實に言語に絶したる次第であります。英國のシヤアチル少將は山口師團長に向ひまして「怎麼も何でも申さう様のない露軍の舉動です、會議の席には自ら進んで強いて議長席に着き、いよゝ戰闘と爲つては今頃になつて彼機所へ出て來るとは、何たる不手際でせう、日本軍隊が意外に機敏なる運動を爲したればこそ、斯の如く速かに北倉を占領する事が出來たですが、若し爾でなく、此方右岸軍に一旦蹙跌でもあつた時は、怎麼云ふ状況に陥つたか知れないです、此の大事な戦争に、今になつて彼機所へ頭を出すなどは、イヤハヤ憚れ返つたものです」と言つて頗る憤激致しますると、其他の英米の將校は勿論、兵卒に至るまで、非常に露軍の腑甲斐なきを冷笑したり怒つたりしましたが、是は全く露國司令官の大なる失策でありまして、若し我が日本軍隊にして、斯の如く勇敢に進まず、戦争不利と云ふまでいなくとも、敵と五角の戦争をして居たならば、頼みにして居た露國軍、即ち左岸軍が德云ふ有様では、それを何云ふ結果に立到りしや或は敗軍に陥つたかも知れないのであります。幸ひにして日本軍の勇猛なりし爲め、暗夜

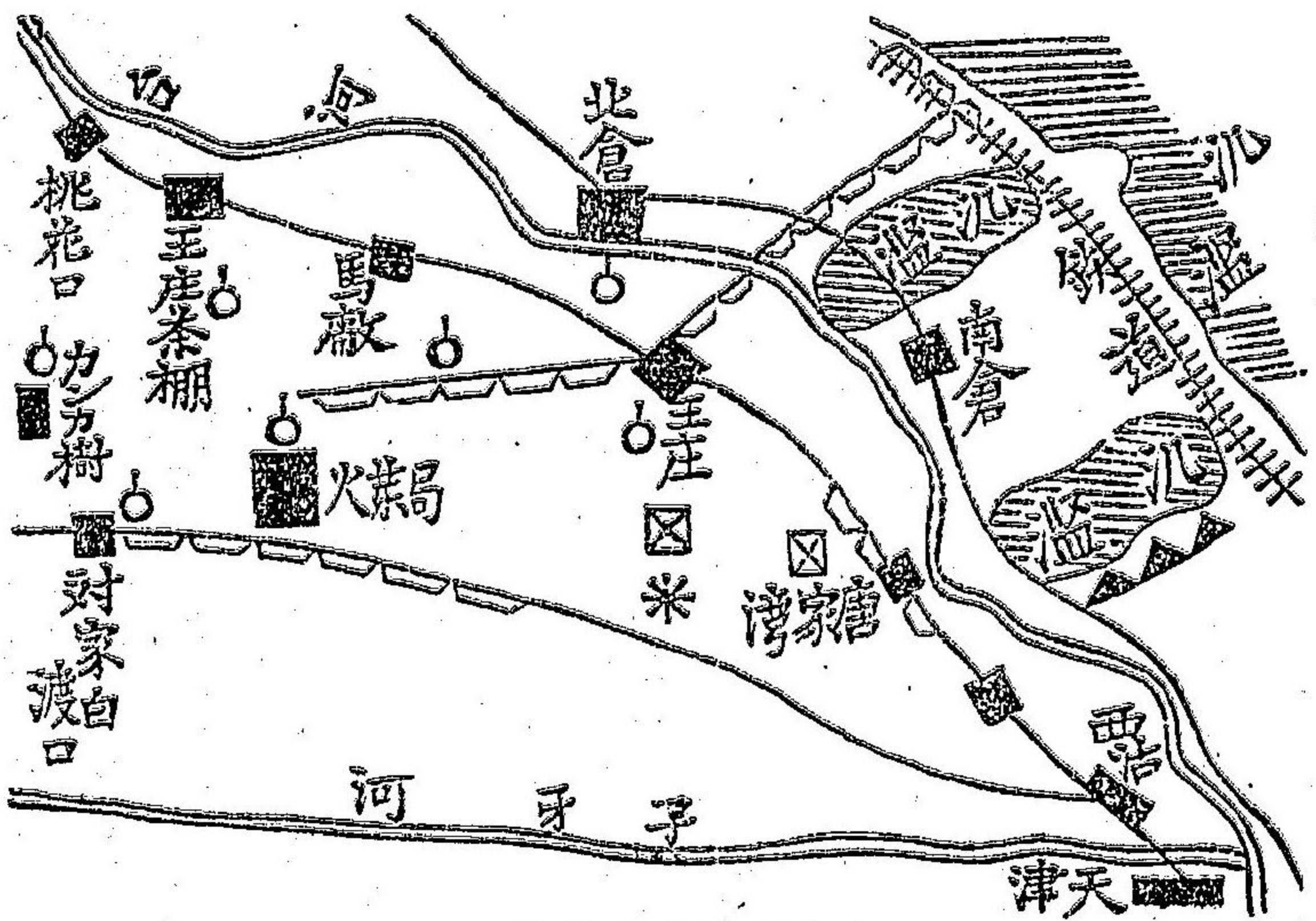
に突撃して敵を退け、敵に些しの息をも吐かせず、所謂破竹の勢ひを以て前進したればこそ、目的通りに北倉を陥入れて了つたのであります。されば英米の各將校が我が軍隊を徳として、我が司令官に向ひ、屢々我が軍隊の勇猛機敏なるを歎稱し、露國軍隊の頼むに足らざる事を憤慨したるも、亦宜なる事ではあります。山口師團長は、露國軍が我が右岸の軍隊の通過したる跡に出で來りたるを見て、いよく呆れて居りました。が、側に居たる參謀豊田大尉に向ひまして「君は是から直ちに露軍の戦跡を見て來て貰ひたい、想ふに露軍とても、毫しも戦闘せずに、右岸に自忘して來たのではあるまいと思ふ、必ずや多少戦つたに違ひないから其の戦跡は如何なる有様になつて居らるかと云ふ事を、一ツ見て來て貰ひたいと、慫慂命じたので、豊田參謀は、承知しました、では是から直ちに参りませう」山口併し一人では不可一個中隊だけを率ゐて行かれい」と命令したので、豊田參謀は領承して、歩兵四十一聯隊の第六中隊、即ち井上大尉の隊を率ゐて行く事になりました。そこで豊田參謀は自ら真先に立つて北倉を通り抜けて、東方に進みますると、是に續いて井上中隊長は、部下を率ゐて前進して参ります。銃道線路の附近まで進み來つて見ますと、南方の敵の堡壘は、既に露軍が占領して居る様であります。大尉「ヤア、是は、彼邊の敵壘は已に露軍が占領して居るワイ」と豊田大尉は馬を止めて、双眼鏡を手に取り、頻りに凝視して居りますと、井上中隊長も其處へ参りまして、豊田君、彼邊までは露軍が進んだと見えるね」田井「爾ぢや、彼邊までは來たやうぢや、彼處から此方へは進んで引返して、右岸へ迂回したやうぢやね」大尉「彼處まで來て、何故又引返したんぢやらう



ねえ』 露田「爾うと曉得がゆかぬが、水の氾濫の爲か、それとも敵が頑強であつた爲か、怎麼も好く分らぬねえ、兎に角彼の東南方の氾濫の所で進んで見やう」と言ひつゝ、東南方へ進まんとすると、露軍の左岸に居る兵は遠方から是を見て、矢張り敵と思つたのか、ツーン／＼と打ち出しましたゆゑ、露田參謀は「オイ、旗を立て、我が國旗を立て」と號令しまして、忽ち日章旗を高く翻々と翻へしましたけれども、未だ彼が眼には我が旗と知れなかつたものか、尙も續々と撃ちます、されども幸ひにして、此の砲弾は我兵の約百米突ばかり後方に落下しますので、一人として負傷者はありませんでしたが、其中に露兵もそれと覺りしか、撃つ事を止めまして△います、露田參謀は此邊の様子を見ると、最早や敵は疾くに去つて一人も居ませんから、是は兵を率ゆるに及ばぬ、慰しいに兵士を多く率ゐて居て、後方に在る外國軍から敵兵と見做され、傷害を蒙つたならば、此様な馬鹿氣な事はないと思ひまして、井上中隊長に向ひ「井上君、最う兵を率ゆるに及ばぬと思ふから、君は部下を率ゐて、歸つて呉れ玉へな、吾輩は今些し進んで氾濫の様子を見て來れから」大尉「爾かね、ては僕は君の意見通り、部下を率ゐて歸らう、併し残らず返つては、又た不便な事もあらうから、小隊長を二名残して置かう」露田「ア、それでは爾して貰はうかね、小隊長二人だけ残して置いて」と茲に於て井上大尉は二名の小隊長に向ひ「君等兩名は、露田參謀に隨行せられい吾輩は兵を連れて返るから」と命じまして、直ちに元來し道へ引返して參ります、露田參謀は二名の小隊長と共に、此邊の地形を見ながら、更に行進を致しまする 露田「此邊には隨分敵は居たに違ひないが、併し此の形跡の

様子をして想像すると、右岸程には居なかつたねえ、怎麼しても右岸が敵の主力であつたに違ひないね」小隊長「左様です、怎麼も爾らしいですな、それであるのに露軍が引返したのは餘りです」露田參謀は、井上大尉と其の部下とを還して置いて、將校二名と共に話しながら東南方の角まで進みました即ち敵の築造したる堡壘の曲り角まで進み來つたので△います、ヌルと其の邊には露國の將校兵士が、澤山に堡壘の中から頭を出して見て居りましたが、其の一番先へ進んで居りました將校が、始め露語で大聲に何か叫んだが、露田參謀は露語が出來ません、獨逸語が極めて得意で△いますから、獨逸語を以て大聲に、小官は日本司令部に屬する參謀露田甚八と云ふ者であります、貴軍の戦跡を見に來ました……我司令官の命に依つて見物に參つたです、斯の如く呼ばりますると、前に露語で言つた將校の其の後背に居たる將校が馬を進めて出ましたが、此の人は獨逸語が餘程得意と見えて、獨逸語を以てそれは、好く△出て△いますし、寔に御苦勞でした」と應へましたが、此時露田參謀の乗りたる馬は、極めて猛き乗馬でありまして、此の露將を敵と思ひ違へたのか、ヒーン／＼と嘶きつゝ、大口を開き、眼を怒らして露將の方に向つて飛び懸らんず勢ひを觀しましたので、露の將校は大いに驚き、何か呼はりつゝ短銃を持つて、馬を撃たんと致しますから、露田參謀は大聲に「大丈夫です、御心配ありません」と言つて、手綱を控へ、馬を叱して漸く乗り静めまして、聽て彼の獨語の出來る將校の案内にて、堡壘の所に到りますると、露の大佐が一人、其他少佐大中少尉等多くの兵士を率ゐて居まして、皆露田參謀に向ひまして、互に挨拶がありました、彼の





(區位の時八前午)圖略戰國近附倉北日五月八

砲地しり標の兵清は■ 軍米は※ 軍英は□ 軍佛露は▲ 軍本日は○

佐は『日本軍は何邊まで進みになりました』と問ひますゆゑ、豊田參謀は笑みを含みつゝ、徐ろに口を開きまして『既に前刻北倉を占領しまして、一部隊は敵を追ひつゝ右岸を北進し、一部は其の左岸の進撃中です、小官は貴國軍の戦況を聞き、戦跡を見て来いと司令官から言はれましたので参りました』と答へますと、『ア、爾てすか、それは怎麼も御苦勞です、我が露軍は此所まで進んで、御覽の如く此邊の堡壘一體を占領しましたが、斯の如く氾濫の廣い爲に、行進が極めて不利なるゆゑ、一部隊を茲處に止めまして、司令官は日英米の軍を援助する目的にて右岸に渡りました』と言つて、假撤清て居ます、豊田參謀は『ア、爾てしたか、それは御骨折りでございました、しますると左岸軍は是から北へはお進みにならぬですな』大佐『ハア進むも勞して功がないと我が司令官は見たから進まぬです、併し佛の司令官は、尙ほスツ

と東方を迂迴して北進しまして、其中に我が露軍も多少加はつて居ります』と答へたそうですが、是は成程後日に到つて取調べて見ますと、佛國の司令官たるフレイ少將が、佛國歩兵一個中隊と砲兵一個中隊露國の歩兵二個中隊を率ゐまして、氾濫のヌツと東方を迂迴して北進したと云ひます、それで後日に到りまして能く取調べて見ましたら、王庄北倉から逃げ出した敵は、其の多くは右岸へ逃げずして左岸へ逃げたさうです、それは何故かと云ふに、地形上右岸へ逃るよりも、左岸に逃げた方が遙かに逃げ好かつたからであつて、若し露國司令官にして、此日右岸へ来る事をせず、左岸を前進したならば、聯合軍に取つて頗る大利益であつて、従つて露軍の戦功も亦た莫大であつたのに、實に惜むべき事を致しました露國軍が左岸に向ひながら、敵を追撃なすして、僅かに一部隊を左岸に止めて、其の主力が右岸に來りたるは、實に此上もなき失策にして、若し此時露の司令官が佛國の司令官フレイ少將と共に、左岸を前進したならば、敵の敗兵を追撃して、必ずや一大功を奏したに違ひないです、如何んとなるに、右岸の後方には湖やら川やらが澤山にあつて逃げるに不便ゆゑ、敵の多くは皆左岸に逃げ去つたのであります、それであるから若し露軍が左岸を前進して、之を追撃したならば、聯合軍に取つて大いに利する所があつたです、況んや氾濫は南方は可成に深いけれども、東方は淺いのであつて、決して行けない事はありません、それを露軍が行かなかつたのだから、英米の人々は露國軍の行方方を頗る怒つて、後に英のメーヌリー將軍は露のステツセル少將に向ひ『貴軍は何故に左岸を前進して、敵の敗兵を追撃しませんでしたか、詰問したらステツセル



少将は『左岸は前進に頗る不便であるのみならず、右岸軍が苦戦のやうに思ひましたから、それで我が司令官は右岸軍を援助する心算で涉つたのです』と答へたやうで云います。サテ前回は演ぶる如く、豊田參謀は露國の大佐と種々話をした上、暇を告げて別れんとすると、露の大佐は『オア宜しいではありませんか、最う些し御休息を……今茶が出来ますから』と言つて、強ひて止めるのみならず、茶を沸かして居るやうで云いますから、そこで豊田參謀も喉が乾いて居ますゆゑ『では茶の御馳走に預りませう、貴國の茶は又た別ですから、言ひまして、暫らく止まりますと、聽て茶を煮て持つて参りましたが、露人の茶好きな事は曾て演べて置きましたけれども、此時豊田參謀等に出した茶は、勿々の上茶であつて、豊田君を始め、二人の少尉も非常に渴して居ましたので、遠慮なしにガブ／＼飲んださうであります。露の大佐が『日本の人は性質勇猛にして進むを知つて退くを知らぬと云ふ事は、豫て聞いて居ましたが、併し今度の戦争に慥う勇敢な働きをしたのは、一つは前年の日清戦争に大勝利を得て、清國兵を侮つて居るから、それが爲に斯の如き戦争の仕方を爲したのでありませうと、小官は想像しますが、如何です』と言ふから、豊田參謀も満面に笑を含みつゝ、『或は爾かも知れませんが、さりながら我が日本人は、古昔から敵に衝突すれば敵を斃すか、自分が斃れるかするまで、戦るのが慣習になつて居て、敵に背後を見せると云ふ事は、決して爲らないのであります。其が最う日帝國人の固有の性質です』と答へたら、大佐は『ハ、ア爾ですかオア、イヤ

怎麼も武勇國ですな』と言つて居たさうで云います。豊田參謀は尚ほ種々なる話をして別れましたが、其の歸り道に東方と北方に方つて、遠雷の如き音響が頻りに聞えますから、豊田君は馬を駐めて、少時耳を傾けて居ましたが『オア是は多分佛國の司令官が、東方を迂廻して前進したと言ふ事だから、敵を追撃して居るであらう』と長『それとも我が軍の敵を追撃するのかも知れません』などと語りつゝ、歸り來つて山口師團長に此の趣きを報告致しますと、師團長を始め司令部の人々も皆露軍の行方方には呆れ返つて了りました。是より前、即ち山口師團長が豊田參謀に命じて露佛軍隊の状況を見せに遣ると、殆んど同時に又た師團長には眞鍋旅團長に向ひまして、敵は左岸の方へも随分逃げ去つたやうであるから眞鍋旅團長は其の部下を二分して、一部隊は右岸を追撃し、一部は左岸を追撃する事にせられ』と命じました。そこで眞鍋少将は、部下歩兵四十一聯隊の第二大隊を率ゐ、野砲一大隊を以て船橋を渡渉し、北倉の町を通過して、敵を追撃する事に決しまして、右岸の方は第三大隊をして王庄茶棚の方に追撃せしむる事になりましたゆゑ、眞鍋少将は直ちに第三大隊長井上少佐(思服)を呼び君は其の部下を率ゐ、右岸を王庄茶棚の方へ前進追撃せられ』と命じ置き、御自分は第二大隊小倉少佐(信恭)の隊と砲兵一個大隊とを以て、騎兵一個小隊を先頭に立つゝ追撃を始めました。北倉の町を通り越して、約一里ばかり前進しますと、東北の方に當りまして、一の森林が見えまして村落が云々ありますが此の村落を紫樓村と稱します。此の紫樓村内に多くの敵の敗兵が居るやうでありますから、先頭に立ちました我が騎兵が、馬足を揃へて勇ましく右の紫樓村に近附きますと、果して



村内より敵は烈しく射撃を致しました。其の射撃の様様に依つて見ますと、勿々の大部隊らしいですが、併し村内に深く潜んで居て撃つのですから、一寸も敵状が分りませぬ。騎兵小隊長は部下の一兵に向ひまして『貴様、速く旅團長閣下へ報告に行け』と命じましたので、直ちに馳せ返りますと、眞鍋旅團長に間もなく出會ましたから、前方村落に敵の在る事を報告しますと、旅團長は『好しッ、承知した』と、是れから駐足にて前進して程好き所に砲列を布かしめ、千五百米突の標準にて、紫樓村を射撃させます。眞鍋旅團長は土手の様な些し高い所に登り、双眼鏡を取つて敵の居る村落を眺めて居りますと、小倉大隊長も、砲兵大隊長代理津田大尉も、副官も、各中隊長も、其處へ登つて参りまして各々皆眼鏡に依り敵状を偵察します。少佐敵は深く蔽蔽して居て撃つから、一寸も分りませぬ。少佐『ム、分らんア、併し爾ら深山も居ないやうぢや……彼の砲弾は甘く村内へ落下したぞム、甘いッ』などと見て居る所へ、英國の砲兵も行つて参りましたが、最早此時は敵が逃げ出し始めまして、英砲兵は左まで撃たない中に、我が歩兵隊が関を作つて勇ましく突撃したので、正午十二時頃に全く此の紫樓村を占領して了ひました。そこで眞鍋少將は此事を師團長へ報告して置いて、御自分は紫樓村内に入つて見ると、我が砲彈の爲に敵は勿々撃られたと見えまして、死屍が狼藉と横はつて居て、眼も嘗てられぬ有様でムいす。眞鍋旅團長は村内の大家を見立して是に入りましたが、『今夜は茲處に舍營しやう、村内の人民が逃げずに居る者もあるやうぢやから通譯官に言ふて、彼等を緩撫して遣れッ』と命じましたので、通譯官等は諭告文など貼示して良民保護の事に

盡力しますと、矢張り此の村の人民も手に日章旗を揚へつゝ、追ひ々に集つて参りました。野菜物などを献上致しますから、大いに便利を得ました。今一回だけ騎兵の運動を演じて置きました。そうして後次回から、有名な工兵隊の白河壘塞破壊の運動に取懸る事と致しませうが、何處の戦等でも、騎兵が一番先頭に乗り出すのは、是は當然の事でありませうが、此の北倉の戦等は暗夜に始めました事ゆゑ、先へ進む事の必要なく騎兵隊は一番後背になりました。漸く午前四時の頃に至つて集合地を出發したのでムいす、それで騎兵は歩砲兵と反對であつて、集合地を出發しまする時は、英の騎兵の方が前でありまして、日本騎兵隊は其の次でムいまして、それで我が騎兵の尖兵長は横山中尉でありました。中尉は勇ましく部下を率ゐて前進しましたが、傷ましくも流弾に中つて負傷し、馬より動乎と落ちましたので、兵卒等は直ちに下馬して介抱しますると横山中尉は『イヤ、俺は輕傷ぢやから心配するな、疾く進んで十分に行れ』と言つて、其場に臥して居りましたが、馳て後方へ送られました。我騎兵は尖兵長の負傷にいよく憤慨して進みましたから、どうも英國の騎兵を乗り越へて了ひまして、六時に韓家樹へ到着致しました。サア慥う日本軍隊が、何時もく外國軍を乗り越しては、前にくと進みますると、讀者諸君は如何やら私が作つた話の様に思召すか知れませんが、決して爾ではありませぬ。全く我が軍が他の外國軍隊に比較しますると、何時でも勇敢に進んだのでムいすから、萬望私の作り事でないで云ふ事は、確と認めの上、お讀を願ひ上げます。サテ我が騎兵は韓家樹より尙進んで北に向ひました



が、八時半の頃先方に多くの敵兵は爾も歩兵と騎兵とが居りましたして我軍を見るや、少数なるを以て彼等は侮りながら、勇ましく逆襲をして来そうぞうと云いますから我が騎兵隊長森岡大佐は、是は無謀に戦ふべきでないを見て取りまして、直ちに「後へッ」と號令して退却を命じましたゆゑ、我兵各々馬を回して背進しました、そうして矢張韓家樹まで引揚げて参りますと、恰ど英國の騎兵も既に此の韓家樹に達して居ましたが、英の騎兵隊長は、我が騎兵の將校に向まして「隊長、日本の軍隊は、何時も一先頭に進みませんが、況して今日の騎兵の運動の如きは、我英の騎兵隊よりズツと後から行進を始めて、それで先になつたですから『吾々英國軍は實に面目ないです』と言はれますゆゑ、我が將校等は『イヤ怎麼して〜、爾云ふ譯ではないですが、今日は豫て我が司令官からの命令でありまして、我が騎兵は怎麼あつても速かに韓家樹から先へ進まなくてはなりません任務を授かつて居ましたゆゑ、それで貴軍に失禮とは存じながら、駆け抜けて遂に相済みませんでした、併し貴軍は後に爲りて宜しかつたです、吾々は大多数の敵兵に衝突して逆も前進が出来ないから退却して来たです、眞箇に無駄骨を折りました』と言つたら、彼等も皆笑つて「爾には其様事もわりませう」と云つて居たそうですが、何しろ是から先へは、未だ容易に進めないので空しく此の韓家樹に止まつて居りました、其中に逐漸時刻も移つて、漸く午後三時頃になりまして、師團長からの命令が参りまして『王庄茶棚の方向に前進すべし』と言ふ意味の命令でありますから、森岡隊長は直ちに部下に命じまして、行進を起しましたが、今度は敵にも衝突せず、難なく王庄茶棚の方に達する事を得

ました、此の北倉の戦争には、騎兵は是と云ふ目覺ましい話しはなかつたですが、唯英の騎兵を乗越へて了つたといふ事だけは頗る勇進したる一つの證據として見るべきものであります。

【百六十三】

是からいよいよ工兵隊の運動に取蒐りまして、彼の北倉の戦争にて噂の高かつた白河の壘塞破壊の状況を演ずる事と致しませうが、工兵隊も八月五日前一時に集合して、直ちに出發し、暗黒中を進みまして、夜明に至つて砲兵を土堤の北に進める爲め、土堤に坂路を構築したる事は、ズツと前に一寸演べて置きましたたが、此頃から敵彈益々烈しく参りまして、工兵隊に負傷も出来ましたが、尙ほ屈せず進み事六百米突ばかりにして、工兵第三中隊は敵の命て去りたる掩壕の中に據つて、一寸休息して居ますと、いよいよ敵彈は猛烈に参りますので井上中隊長(工兵大尉幾太郎君)は、部下を率ゐて白河右岸の二三軒の家屋のある所に至つて、又た休憩して居ますと、工兵大隊長馬場工兵中佐(正雄)より井上大尉に向つて「白河の壘塞を偵察して、速かに之を破壊せよ」と云ふ命令が下りました、是も前に一寸演じて置きましたが、敵が白河の左岸に氾濫を作つて、我が軍隊の行進を妨ぐる爲め、白河の河中を堰止めて、其の左岸の土手を切つて、水を左岸へ溢れしめ、そうして左岸一體の地に大なる氾濫が作つてあるので云ひますが、此の河の堰止めてある場所を偵察して、速かに之を破壊し、左岸の土堤の断切してある所を塞いで、水を残らず下流に流るゝやうにして了はないと、今の所では左岸一體の地へ水が流れ出て居る爲に、下流の水が至つて僅少にな



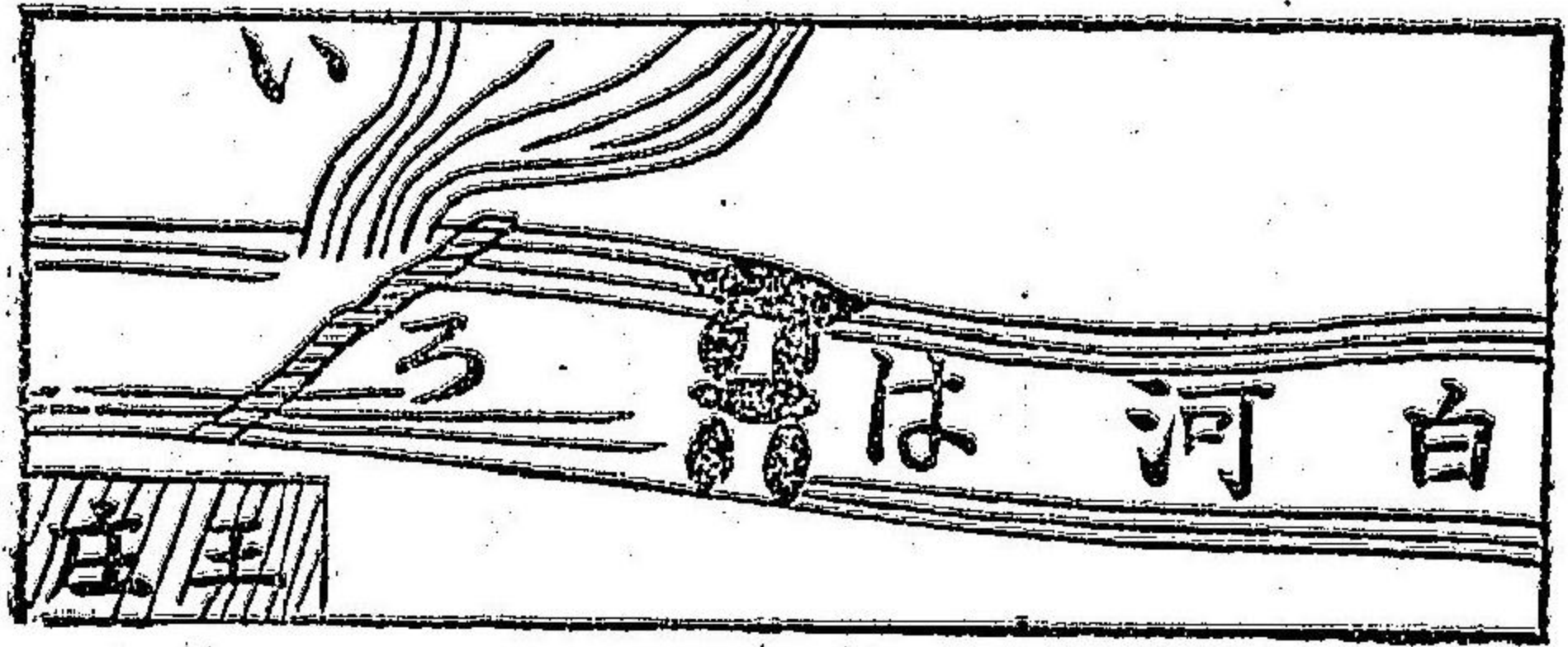
つて、船の往來が思ふやうに出来ないのでありますから、糧食其他の物資を河に依つて運搬するに云ふ事が難いのであります山口師團長を始として、我が司令部員も、其他の將校も、戦闘開始のズツと前から、此の事を大いに憂ひまして、萬望一時も速かに、河中の壘を見出して、之を破壊せん事を希望して居ましたから、そこで今師團長から工兵大隊長に命じ、馬場大隊長は又た是を部下第三中隊長井上大尉に命じました。井上大尉幾太郎君は直に部下の小隊長篠本少尉(克郎)を呼びまして「オイ篠本少尉、今大隊長から河中の壘を破壊の事を命ぜられたから、君は部下の兵若干を率ゐて、先づ壘のある所を偵察して呉れい」と命じました。篠本少尉は「承知しました」と直ちに部下五名の工兵を率ゐて、家屋の陰を馳せ出で、白河の岸に行かんと致しますと、敵陣の飛來する事夥多しく、殊に白河の水中に落下する敵の彈丸は、ザブツと音がしまして、其の物凄き事言はん方なく、水中へ落つるのは水煙が立つて、分明と眼に見えますので、尙恐ろしく感ぜられるやうであります。そこで篠本少尉は顧みて部下に向ひ「オイ藤田、貴様此の土手の陰に潜みつゝ、行つて様子を見、俺も直ぐに後から行くに依つて」と命ずると、此の藤田と云ふ兵は、勿々の勇敢なる男であつて、唯一名眞先に立つて、土手下に潜行しつゝ、進んで行きます。篠本少尉は之に續いて、殘兵を率ゐて危険を冒しつゝ、探り／＼行きますが、先に立ちたる藤田は最も勇ましく行進しますので、約二百米突ばかりも行くと、曲り角になつて居まして、藤田の姿が何時しか見えなくなりました。篠本少尉は大いに心配なし「曉發、藤田は彼様にメン／＼勇進したが、最も是は危険であるぞ、サアオイ、皆

早く来い、藤田一人を離して進めるは危険ぢや、続け」と號令して、他の兵をも囑ました。益々進んで藤田に追ひ着くと致します所へ、先に進んだ藤田は、息塚き切つて、馳せ返りましたが「少尉殿、敵が来ました」

藤田勲次郎氏は馳せ返つて、敵が来ますと報告したから、篠本少尉は「何の位来た、澤山来たか」藤田「いえ、十二三名でありますが、鎗を抛へまして、裸體で、不意に我が前方約五十米突ばかりの所に現はれて射撃しますから、私も二發ばかり撃ちました。衆寡逆も敵せませんから、逃げ返りました」篠本少尉は「好しッ恐るゝ事はな、皆確乎せう」と言ひつゝ、向ふを見れば、白河の中流に一名の敵兵、板に絶つて泳ぎ来る者がおりますから少尉「彼奴を狙撃せう」と號令したので、兵士等遂に狙撃しますと、四發目にして彼に命中したから、彼は其儘仰向けになつて流れて了ひます。篠本少尉は之を見るや「オイモラ、中隊長の所へ行つて援助を乞ふて来い」と命じて、一名の兵士を井上中隊長の許に遣はし、他を率ゐて尙前進せんと致しました。又も二名釋泳ぎ渡つて来らんと致します。敵兵を認めましたゆゑ「ソレ、彼等とも撃てッ」と復び號令して、狙撃させました。是も亦見事打殺しまして、尙前進して曲り角を廻らんとしました。時、敵兵一名を見附けましたゆゑ「彼奴を捕縛せう」と、少尉は怎麼にかして彼を捕へて、壘のある所を尋問し呉れんと思ひますから、追ひ駆けましたが、とう／＼捕ゆる事が出来なくて、取り遁して了ひました。残念な事をしたなア、土人でも敵でも一人捕へて、白河の堰き止めて在る場所を聞かして遣らうと思ふが、



「怎麼も思ふやうに行かん」と言つて居る所へ、工兵曹長は小隊を率ゐて参りました。「少尉殿、敵が居りますか」  
 「居る我兵を少数と侮つて居やがるから生意氣にも河を渡つて来る奴があつて不可ん、サア進ませう」  
 「今直に中隊長も参ります」  
 「爾か好しッ」と言つて、篠本少尉は部下小隊を率ゐて、尙前進しますると、土堤の下に二人の敵兵の居るのを見出しましたから、少尉はソレ、彼奴等二人は怎麼しても捕縛せよ、通すな」と烈しく追い駆けさせて、遂に捕虜として了ひましたので、大いに喜びましたが、其の中に中隊長大尉井上幾太郎君は、部下を連れて参られましたので、捕虜の事を言ひますと、取調べて見よと言ひますから、是から二人を土手側の樹木に縛し置きまして「爾等は知つて居る事と有の儘に言へば、免して遣るから包まず言へ、此の白河の河中に壅塞を設けて、河水を堰き止め、之を左岸に氾濫せしめてある事は、我軍の既に認めてある事なれども、其の場所が未だ確然と分らぬが、其の場所を言へ、爾すれば一命は免して遣はす」と、斯の如く言ひ聞かすると、一人の方は两眼を閉ぢたる儘に一言も口を聞きませんが、一人の奴は两眼を開いて我兵を見廻しましたが應て徐かに口を開き「吾等は今に至つて助命して貰ひたいとは思はぬ、又た白河の河中を堰き止めたと言ふ事は一寸聞いただけれども、吾々は係りが違ふゆゑ何處を堰き止めたやら、毫も之を知らず、斯の如く吾々が貴軍の爲に捕虜となつたのも、負傷して歩行が難儀なるがゆゑであつて最早此期に及んで、救助は願はぬに由つて、一時も早く殺して貰ひたい」と、斯の如く断乎と言ひ放つて、两眼を閉ぢて了つたのは、頗る死を決して居るらしうありますから、井上工兵大尉は「其奴、頑強



土堤を  
切つて  
水を汎  
漕せし  
めたる  
所  
船を並  
べて橋  
となし  
たる所  
船を洗  
めて水  
を濯ぎ  
せる所

で幾千籠めても言ふ事ぢやない、殺つて了へ〜」と命じました。此奴等二人を捕虜として置くは、手数が懸つて今の場合仕様がなしと云つて、見す〜敵の捕虜を免して遣ると言ふ事も出来ませんので、そこで止むを得ず殺せと命じたのです。  
 井上工兵大尉は二名の捕虜を殺して了へと命じましたので、神村特務曹長は軍刀を抜くより早く、一人を斬れば、同時に村山少尉はピストルを以て一人を撃殺しました。斯の如くして尙一同協力して、白河の中の壅塞を發見せんものと、彼方此方と奔走します中に井上大尉は「オイ村山少尉、吾輩の考へには、何でも其様にソツト上流ではなからう、此の近邊だらうと思ふな、壅塞は成るべく早く發見して、破壊して了はないと、糧食運搬の道を開く事が出来ない師團長閣下も頗る是を御心配なされて居たのぢやから、一番奮勵して行つて呉れい」  
 村山少尉は「イヤそれは最う、吾々も爾思ひますので、前刻から頼りに心配して居りますが、怎麼も未だ知れませんで困りますと、言ふかと思ふと、村山少尉は何か見る所あつたのか、俄かに足を早めて土堤を上手へ行かれましたが、見る〜中に次の曲角を曲つて、其の姿が見えなくな



りましたから、井上大尉は「村山」一足で彼様に前進さしては危険ぢやなア、彼何か見る所でもあつたのか、急に駆て行き居たが、何ぢや知ん」と言つてる中に、懸て息返き切つて馳せ返へり発見しましたく、大尉殿壱塞が分りました」井上「ナニ発見した、ム、それは甘い、何處ぢや」村山「直ぐ其處です、此曲り角を曲ると直でムいます」大尉「爾か、怎麼も遠くはあるまいと思ふたが、果して其通りぢやつた、怎麼ぢやね、左岸の土手が断切して、水を左岸へ引いてあるぢやろう」村山「爾です、水は左岸へ滔々と流出して居す、彼では河水が減する筈ですと、言つ、嚮導して曲り角を廻りますと、果して河中には壱塞が作つて流れを堰き止てあるのみならず、左岸の土堤を切てあるので、水の半分は其方へ流出して居すが、併し水は其壱塞の上をも乗越えて、下手へも流れ出して、居ますゆへ、壱塞の上を乗り越へて、落る水勢は恰も大瀧の如く激湍して、其の下は中々に深く掘れ、物凄位位であります、井上大尉は之を見て「先づやたぞく、オイ篠本少尉、君は此の壱塞を破壊するの任務に當られい」篠本「ハイ直しうムいます、先づ偵察に取懸りませう」井上「ウ、爾せい、村山少尉、君は直ちに其の左岸の土堤の崩壊を察いで、左岸へ水の流出しない様にするに命じましたので、是も亦領承して、各自其の任務に取懸りまするが、先づ篠本少尉克郎君は、部下と共に壱塞の上に乗つて、そらして其の様子を偵察しますると、船六艘を河底に埋め、其上に煉瓦を積んで、之を浮み上らないやうにし、水を堰き止めたのであります其の六艘の船の埋め方は、此の圖面にあります通りでムいますから、圖と照し合せて御覽を願ひ上げますが、其の壱塞から約十五間ばかりの上流に、是も

亦圖の如く、船が此方の岸から向ふ岸まで數艘を縦て並べてありまして、敵兵は此の船を橋として、兩岸の往來をして居たらしのであります、其の又些し上手の左の土堤が断ち切つてある事、殆んど三十間ばかり、此處から左岸に水は洋々として流れ出で、居ります篠本少尉は壱塞を確然偵察した上に、左の火薬を以て水雷と爲し、之れを破壊する事に決しました。

尋常火薬五十吉羅瓦

水雷

篠本少尉は部下五名を率めまして「サア、破壊に着手するぞ」と勇ましく合しました。

ドマーンガラ〜〜、ツザア〜〜と音響、恰も百雷の一時に落下したるが如く、河水は奔騰して水面より立昇る事四十尺餘り、之を見る者、殆んど海面に龍卷の生じたるも斯やと怪しむばかりでムいます、眞に物凄く、一時は四邊濛々として暗黒となりました、是我が工兵隊の白河壱塞を破壊せしめたる時の光景でムいます少尉「甘く行つた〜」と一同手を拍て喜ぶ中に、壱塞は微塵に崩壊したから堪りません、水は一時にザア〜〜と下流に流れ下ります、是と同時に井上工兵大尉は左岸に渡つて、村山少尉と共に部下を指揮し、左岸土堤の崩壊を堰き止めますが、已に壱塞が破壊されて河水が下流の方へ流れ下つて、左岸へ奔流するもの大いに減じて居りますゆへ、此の崩壊を察して堰き止めますには、至つて樂でありまして、左まで苦を感じずして、難なく堰き止めて了ひまして、先づ是で宜しいと云ふので、井上工兵大尉は村



山少尉と共に、彼の前回に演へてありまする船を並べて橋をなしある其の船を渡つて、此方へ来やうと致しました時、真中の船底にて、頻りに呻き苦しむ聲がウーン／＼聞こえますので、井上大尉は「オイ村山少尉、何か居るぞ、アレ彼の通り隠して居る」村山「ア、成程、行く時は急いで渡つて行つたから気が付きませんでしたが、是は何か居りますな」と言ひつゝ、其處に掛けてある蓑を揚げて覗いて見ると船底に二人の婦人が居て、一人は二十三四歳の一寸美しい、亭主持と覺しい女でありますが、今一人は十八九歳にして、未だ生娘らしいのみならず、勿々に顔容の艶麗なる娘でありますから、村山少尉は思はず「イヤー、居りました、意外、意外、ヤアー／＼」大尉「村山何を言ふてるのぢや意了ん事ばかり言ふて居て」と、大尉も進み寄つて一寸覗き「ヤアー／＼、ウー、ムー／＼」と實に大尉も少尉も意外なる事夢の如くに思つたので、ムいます、ヌルと二人の婦人は、涙ながらに何事かを言ひつゝ、両手を合せて二人を拜みますのは、頻りに助けを乞ふ様子でムいます、固より言語は分りませぬゆゑ、二將校も弱つて居ります、年増の方の婦人は這ひ／＼少しく進み出でまして、股の所を指しつゝ、何か言ひ／＼泣いたり拜んだり致しますから、井上大尉は其の指す所を熟々見ますと、衣類の上に鮮血が赤く染め出して居ります、井上「此の婦人は負傷して居るな、想ふに流れ弾に中つたのだ、我々に薬を呉れいと言ふのぢやらう」村山「成程、それに違ひありませんな……ヤア彼の若い方の婦人も、矢張り負傷して居りますア、御覽なさいまし、尻の所に血が染め抜いて居ります」大尉「ム、成程、是は可愛想ぢやな何か薬はないかな……」と言つて、我々も今にも負傷するかも知れ

ぬから、表りに遣つて了ん事は出来ぬし、氣の毒も氣の毒ぢやし」と言つてる所へ、一人の兵卒が馳せ来りまして是を聞き「では私しが持つて居る薬を遣りませう、其代り其の疵の所を……」井上「何ぢや、妙な笑ひやうをして、傷の所を怎麼するぢや」其の傷の股の所を捲つて出して見せなくては……「エ、ハ、ハ、」井上「馬鹿ッ、馬鹿野郎ぢやなア此奴、餘程甘い奴ぢや、アツハ、ハ、ハ、」二人の婦人は素より此方の言語が明りませぬゆゑ、彼の若い方の娘までも羞かしさを打忘れ、此方に向ひて拜みつゝ、救助を乞ふ所は構れにも又たいぢらしくありませぬ

井上「困つたものぢやなア、可哀想も可哀想であるし、何とかして遣りたいものぢやな」と義時考へて居りましたが、大尉は點頭して「ム、慥しやう、傷所を一寸見て、若し急所なれば、不憫ぢやから薬を分けて遣らうし、左様でなければ、遣らすとも好い」大尉「如何です、私しが胃病の薬を持つて居りますが、此方へ来てから、胃は益々強固になつて、此の薬の必要はなさうであるから、氣休めに是を傷所へ塗つて遣つたら、彼等の神経で痛みが惹きはまるぢやらうと思ひますが……」様子をみるに、左まで大負傷とも思へぬですから」井上「負傷へ胃病の薬を附けたと事、事は聞かんが……行つて見い」併し、傷所を一寸見て遣らなくてはなりませんア」井上「爾ぢや、甚だ迷惑ぢやが、仕方がないと」言つてる所へ、兵士が追々に集つて参りますと、中には勿々支那語の巧い兵がおりますから、井上大尉は其の兵に向ひ「貴様、二人の婦人に爾う云へ、薬は我々が持つて居るから遣りたいが、併し一寸傷所を見なくては、無暗に遣る事は出来



ないに由つて疵所を見せると悠々云ふて、さうして貴様見て遣れつ』『有難いッ』井上『何ぢや、有難いと  
は貴様も馬鹿な奴ぢや、早く見て遣れ〜』兵士は支那語で此事を云ふと、婦人は羨かしそうに少時顔を紅  
らめて居りましたが、稍あつて婦人、羨し何女子の身として、外國のお方さまに言葉を交すゝへ耻らうものを、  
況して疵所を御覽に入れるなどは、失禮至極でムいまして、怎成して其の様な事が出来せう……とは云  
へ折角御心切に爾ら被仰つて下さいますものを、其のお詞に背きましては、却て志しを無にするに當り  
ますゆへ、では失禮をも顧みず……お仰せに従ふ事に致しませうと、先づ年増婦人から、最もも耻かし氣に、  
其の傷口を示しました、ヌルと年若き婦人も矢張り顔を背けつゝ、同じく傷を見せましたが、二人とも殆ん  
ど同じ様な所を撃たれて居る、併し寔に此細な傷でありますから、是を見たる井上大尉も篠本少尉も、此  
位なものならば、見て遣る程の事でもなかつたと思ひ、互に顔を見合せまして『是は一件で澤山ですな』  
井上『ム、澤山ぢや、袂袋があれば、袂袋でも癒る位な疵ぢやが、軍服では袂袋はないから、其の胃病の薬を  
附け置いて遣れッ』と、是から篠本少尉は、忝しく胃病の粉薬を取出して『是を傷口へ附ければ、立  
所に平癒するから安心せいと、言つて渡しますと、二婦人の喜びは一通りでムいませぬ、両手を合せて拜  
むのみならず、側に在る籠の中から麥で拵へたる饅頭を取出して『是はオンの御禮の志しでムいます、寔  
に不美味物で、召喰はれ致しませんが、萬望お口汚しに』と言つて差出しました、成程平常なれば喰れたも  
のではありませんが悠々糧食自由の際ですから、喜んで是を食しましたが併し此の二婦人は船人の妻

女や娘とは覺えぬが、さうして此の船中に潜伏して居るのは、何か船に關係ある人の妻女か、それとも敵將  
の妻ではないかと云ふ疑ひも起りましたから、種々尋ねて見ますと、全く此の船の持主の妻と妹であり  
まして、此の年増の亭主と云ふは、勿々船を澤山に持つて居るですが、今度の戦争で、敵兵の爲に船は大概  
徴發されて、彼の白河中の壘塞に沈められた船も、此の橋にされたのも、皆此の婦人の家のものであります  
うです、それで亭主は敵の人夫頭に使役され、家は焼かれて了つたので、無據なく船中に避難して居たのだ  
らうです

(百六十四)

前に演ぶる如く、工兵隊が白河の壘塞を破壊して、船舶交通の便利を圖りましたので、そこで會と輸送船隊  
は糧食を北倉に運搬する事になりました、是は歩兵第十二聯隊の第九中隊長大尉竹内貫一郎君が、其の  
部下を率ゐて、護衛の任務に當り、數千艘の船に糧食を積めるだけ積みましたので、其の船は殆んど一里は  
かりの間に連り、船舶相脚みまして、寔に美事です、此の輸送船隊を指揮するのは、メツと前に演べ  
てあります如く、海軍中佐福井義正君でムいますが、船毎に日章旗を翻々と翻しまして其の旗には又た一  
二三の目標を附けて、順序正しく、軍歌を歌ひつゝ、次第〜に乗出し、流に遡る光景は、實に異觀にも  
又勇ましくムいますから、士民等之を見て、皆手を拍つてソイ〜言ひますと、婦女幼童に至るまで白河の  
岸に立つて是を觀て居ります、然るに此の輸送船隊が南倉の側まで参りますと河岸に澤山の敵が居りまし



て、彼等は我が糧食を見たるより、是を分捕らんと意なるか知りませんが、一齊に開き作つて襲ひ来ると致しまするゆゑ、護衛隊の隊長竹内大尉は之を見るより「ヤア、生意氣な彼奴等の舉動、ソレ陸へ上つて突殺して丁へ」と激しく號令して、自ら真先に立ち、軍刀を揮つて陸地へ飛び上れば、是に續いて小隊長下士卒等、我れ劣らじと各々先を争つて陸地に躍り上り、銃剣を揮つて突ツ蒐りますると敵は始めの勢ひに似ず、我兵の勇猛大膽なるに辟易して、ハヤ忽ちの中に逃げ出ました、我兵は面白半分敵を追ひかけ、切伏せ突殺せ致しまして、思はず深入りする兵士もありませんから、竹内大尉は大聲に之を制しました「貴様等、好い加減にして返れ、我隊の任務は敵を撃つにあらずして、船隊の護衛にあるぞ、長追ひしては不可んどく」と止めまして、漸くの事に彼等を引揚げさせ、引纏めて船に返りました、福井海軍中佐は船頭に立つて、前刻から此の様子を見て居ましたが、我軍の敵を突殺し、銃剣彈藥其他を分捕つて返るを迎へまして「ヤア怎麼も、お手柄、見る者をして實に勇ましく感ぜさせた」と激賞しまして、サア又た是から迎へまするが、其後は何事なく午後の四時頃に、北倉の船橋の所まで着致しました、福井海軍中佐は直ちに上陸して、師團司令部に到り、山口師團長以下に面しまして「唯今糧食を持つて参りました、モツと早く着く手筈でありましたが、途中敵の殘兵に出遇ひましたので、それゆゑ意外に後れて申譯もムいせん、山口中將「イヤ怎麼も御苦勞ぢやつた、ナニ後るゝ所ではない、早かつた、實は今夜の間に合ふか怎麼かと思つて、非常に心配した位ぢやつたが、まア是で安心ぢや、フム、爾が、敵の殘兵に出遇ふたか、イヤそれは一層

困難ぢやつたの、アツハ、ハ、ハ」と其時の事情を尋ねられますゆゑ、中佐は詳細に語りましたが、サア此の糧食を陸上げるして、そうして夜食と云ふ事になりましたのは、寔に我が軍隊一同の幸福でありました、塚本少將は右岸の敵を追撃しつゝ、新庄の方に前進せんとしたるに行手に川がありまして、思ふやうに進む事か出来ません、先頭に立ちました兵から、少將へ其の趣きを報告して参りましたので、そこで將軍は「それで仕方がないから、今夜は河の此方へ宿營して、明日の事にせい、併し地圖に依つて見ると、其様河はない筈ぢやがなア、怎麼も地圖に往々間違ひがあつて不可ん」と言つて、遂に其夜は河の此方へ泊る事に致しました借又山口師團長は北倉に在つて、其夜此處に宿營する事になりましたが怎麼も蚊の多いに弱り切つて了ひました、平田副官が「閣下、如何でムいます、家屋の中へお休みよりは、却つて船の中へお休みになりましたならば、涼しからうと存じますが」と言はれましたので、山口師團長も「成程、是は爾ぢやらうでは今夜は船中へ寝やうから、其の準備せい」と言ふので、船橋の岸なる船の中で、一番奇麗なのを選びまして、是を司令部船と致しましてそうして師團長と司令部員とは、之に居を移しました、其他は皆北倉の市街に入つて、人家に舍營を致しましたが、人家は何れも風透し悪くして蒸暑いから、其の困苦勿々一通りではありませんが、船中は涼風徐ろに吹き來つて、肌自ら爽かに、寔に快い心地でありますから、山口中將は船中に仰向きとなつて臥しながら、幕僚の諸人々と種々の話しが始まります、山口「此様に豫定通りより早く、北倉が陥落して了はうとは、想ひも寄らなかつたのう」石橋中佐「左様でムいます、寔に意想外であり



ました。各諸外國人も餘程驚歎して居るやうでムいます』山口』と、その様ぢや、何しろ始めの計畫は、塚本の隊一部だけに敵を追撃して、他は一度天津に引返す目圖であつたのが、騎虎の勢ひ爾う行かなくなつて、最う引返すも何もありやせんで、シン／＼追撃する事になつたのぢやからな、イヤ兵は神速を貴ぶるは、思ふも名言ぢや、併し糧食の間に合ふたのが何よりの幸福ぢやつたが、それに就ても此國の奴等は、いよく所を置して居るぢやうと思ふ、何故ならば我國が斯うに勇敢に行らうとは、思はなかつたらうと思像するから』伊藤野矢『左様でムいます、廿七八年の戦役で、我國の技倆を知つたとは言ふもの、彼時から比較すると、彼等は長足の進歩をして居ますから、今度は日本兵など恐るゝに足らん位の意氣込みで、蒐つたに違ひないのでムいますから』山口』ム、イヤ、考へて見ると、國家の盛衰榮枯は、恰も四時の交るゝ来るやうなものぢやから、油断は出来んテ、歴史を見るに、足利義満の頃には、此の國が明の盛世であつて、我が義満を封じて日本國王などと稱し、義満も亦喜んで之を受けたやうで、義満が薨するに及んで、明帝は義満を諡して、恭獻王などと云つたりなどし、又た義満存生の時も、明帝から永樂錢などを賜り與へられ、足利氏喜んで之を受けたやうぢや、又た同じ足利義政の代には、三度も此國へ使者を送つて錢を借り、就中文明十五年四月に、義政から明帝へ贈つた書には「日本國王臣義政」などと云ひ、尙ほ「銀十萬貫を賜ふてとを得ば、我國の用足る云々」などと哀求してある、イヤ怎麼も足利氏は我が國體を辱しめたぢやが、それと云ふが、此國の盛大ぢやつたからぢや、それが今日は此の有様であるから、矢張り國家の盛衰も夢ぢやな

ア』など、嘯して居られました、此處で申し遣した事を一寸演じて置きますが、曩に歩兵第九旅團長眞鍋少將閣下が、右翼隊の指揮官として、左翼隊に些し後れて行進し、部下の右翼隊が己に所家海の敵を擊退し、進んで王庄の敵をも破つて、益々勇進致しましたる時の事でムいます、少將は王庄の南方土境の上に立つて、副官以下の將校と戦況を見て居りますと、京濱日々新聞の記者大野觀令と云ふ、未だ年の若い人は、活潑勇敢なる氣質と見をまして、此の砲兵陣地よりズン／＼前へ進まうと致しますから、眞鍋少將は是を見附けて『オイ、其處へ行くのは新聞記者か、危険だ、其様に何故前へ進み、無暗に前へのみ進んだとて、それで戦況は分るものではないぞ』と止めにになりましたが、此の大野觀令君は昨日或る軍人の方と頗る激論をして、其の軍人に向つて『貴官は吾々新聞記者の天職を認め得ない』と言つたので、其の軍人が『イヤ、吾々は君方を眞箇の従軍記者とは思へない、それが證據には、彈の来る所までは進めまい』と戲談半分に揶揄つたので、年の若い大野君は頗る憤激して『吾輩は日本男兒だ、苟くも従軍記者たる者が、彈の来る所へ怖ろしくして行けないうらなら、従軍記者でない』と言つて、壯語を放つたさうだが、果して敵彈雨注の中を厭はずに前進した爲め、氣の毒にも足を撃たれて了ひましたが、遂に廣島の赤十字病院に入院中、死んで了つたのは實にも氣の毒な事でした、北倉の戦鬪は大概是で終りを告げましたが、唯演じ残したのは彈藥繼列の事と衛生隊の事であり、衛生隊の事は、他日赤十字事業の話しを演じますから、其時詳細に演ずると致しまして、只彈藥繼列の事だけは、一寸講演して置いて、それから楊村の戦鬪談から、有名なる楊村



大會議に取違ふ事と致しませう。楮我が彈藥總列は、砲兵少佐栗原甲也氏が、彈藥大隊長として指揮を取つて居られたすが、總列を二ツに分ちまして、天津居留地の西なる畑地と、同北營門の西なる畑地とに分けて、宿營して居りますと、いよいよ北營の戦争となりました時、早速に前進するやうと云ふ命令が下りましたので、そこで彈藥大隊長栗原少佐は、直に北營門なる西の畑地に居る總列に命じまして「サア、師團長閣下からの命令ぢやから、直ちに前進せんければならぬ、先づ火藥局に向つて行くのぢや」と勿皇準備をして、宿陣地を出發致しまして、火藥局へは何事なく着致しましたが、此時、既に火藥局は陥落して了つて、敵は逃走する最中であるし、我兵は又た之を追撃するの時でありまして、師團司令部も早や前進したやうですから、栗原大隊長は「サア躊躇して居て彈藥に缺乏を來すやうな事があると、我が大隊は言譯がないぞ、速やかに進んで、補充の道を附けんければならぬ、サア急いで行れッ」と號令したが、何しろ歩兵と運つて、重いものを馬に着けて運ぶのですから、爾思ふやうには、進も急行は出來ません、殊に何處に於て敵に出會ふか知れぬと云ふ恐れがありますから、部下の砲兵少尉田坂延次氏は、是を大いに心配しまして「大隊長殿、是から先無暗に前進するのは、頗る危険と存じますが、何處で敵の敗兵に衝突するも知れませんが、護衛の兵がなくて我が彈藥總列のみでは、若し敵に出會ふた時に如何んとも致し方がありません、怎麼にかして護衛兵を切めて一個小隊位でも宜しうムいますから」栗原少佐「イヤ、それは吾輩も爾思ふて居るが、何分にも今の場合、躊躇して居れぬからサア兎に角行かう、ナニ敵は最う此邊に居やせぬ、ム、大丈夫ぢや、若

し敵に衝突したら、衝突した時の事と仕様ぢやないか、何の出會ふた所が、吾輩が敗退の死に損なひ兵ぢや、恐るゝ事はありません、行け」と勵ましたので、そこで田坂少尉は先頭となつて勇ましく前進致しまする、けれども是は大隊長栗原少佐も、大いに心許なく、頗る憂慮されたのでムいまするが、併し此際猶豫して居て若し戰團隊が彈藥の缺乏する如き事あつては、それこそ一大事でムいますから、それゆゑ斯の如く危険と知りつゝ急行前進せしめんと決心したのであります。勿論茲處を出發の際、大隊長は一人の兵に向ひまして「貴様、急いで火藥局に行き、守備隊が残つて居るやうぢやから、其の守備隊長に、唯今彈藥大隊が前進しますが、護衛の兵がありませんから、萬一一個小隊だけでも宜しうムいますゆゑ、護衛して下さい」と言へ、併し最う直ぐに前進するから、其事をも言ふと云ふと命じまして、さうして直ちに前進を始めましたが、火藥局と韓家樹との中間まで参りますと、果して高粱畑の間から、敵の敗兵が現はれ出で、我が彈藥大隊を見るや、開を作つて咄と襲來しました未だ此時は、敵の敗兵が所々に一團となつて潜伏して居て、我兵に出會ふ毎に、襲來しては困らせましたから、後續部隊の前進を雖も、決して油断は出來ません、況して此の彈藥總列に衝突した敵の敗兵は、我れを彈藥總列と見たるが故に、之を奪はんとの目的なるが、大膽にも猛烈に突撃して來さうな様子が見えますので、是を擊退したいにも彈藥總列には、唯砲兵と云ふ名のみにて大砲は一门もなく、劔のみでムいますから實に弱りました、其の先頭隊長たる田坂少尉は、心の中に「此様事だらうと思つたから大隊長に爾いふたの



だが、大隊長が彼の通りの大膽家だから、勇断で行つて来たが、果して此様な事になつて了つた」と思ひながら四邊を見ると此邊には敵の死體が算を亂して倒れて居りますので、田坂少尉は是に心附き「サア皆此の敵の死體にある銃弾を取つて敵を撃て」と號令した、我兵速くも心得て各々銃うて敵の伏屍の傍へ居る銃又は腰に附けて居る弾を手敏く取つて之を以て敵に撃ち出しました、然れども敵は勿勿の優勢にして、殊に彼等は死物狂ひとなつて襲ひ来りますので、流石の我兵も實に危殆に陥つて参りますれば、田坂少尉は必死となり「サア皆決心せい、假令全隊残らず死するも一歩も退く事は出来んぞ、今に最う援兵が来る」と部下を勵まして居ります所へ、栗原彈藥大隊長も馳せ着けましたが、是なども護衛兵のなほに弱つて居りますると、恰も好し火藥局に突つて居ました一隊の兵士が護衛として馳せて参りましたが、此の銃聲を聞き付けて、蹙足にて来り加はつて烈しく敵を撃ちましたので、漸く敵を退くる事を得ましたが、若し此の火藥局に残つて居ります一隊が馳せ着けなかつた、如何なる状況に立至つたやら分りませんでした、併し此の戦に人は幸ひにして一人の負傷だになかつたが、彈藥馬を二頭斃されたのは誠に残念の至りでした、サア彈藥縦列は徳云ふ有様に、随分危険を冒しつゝ一先づ轉家樹まで前進しまして、是から直ちに北倉に向つて行進せんと致しますと、此時英國の砲兵が西沽の土手の上に砲列を布いて切りと敵の敗兵を砲撃して居る最中で、其の砲弾が恰と前進しやうとして居る彈藥隊の行進路へ落下するので、頗る危険にして、勿々前進が出来ませんから、些し躊躇して居りましたが、併し大隊長の身になつては今猶豫すると云ふ事が出来な

いのです。何故ならば昨夜天雷の宿營地に於て命令を受けた時に、成るべく速かに前進せよと云ふ命令であつたのですが、道路の悪い上に雨が降つて一層道が悪くなり、彈藥を附けたる馬が道に滑つて轉がるやら、泥濘へ踏込むやら、殊に眞暗で、怎麼しても思ふやうに行進が出来ずして、とう／＼火藥局の戦闘には間に合はずに了つたのだから、彈藥大隊長の胸の中には始終「彈藥が缺乏しはせぬか知らん」とそののみ心配して居るのであります。故に今の場合多少危険を冒しても、一刻も速かに北倉に到着せなければ其の任務を果す事が出来ませんのみならず、縦令我軍北倉を占領したにもせよ、若し敵が大いに奮つて再び襲来するやうな事があつたら、それこそ一大事であります、それがゆゑ此の中を急行せんと致しますのです。其中に幸にして英軍の砲聲も緩漫になつて参りまして、落下する砲弾も稍遠く落るやうになりましたので、我が彈藥大隊は「サア、此間に早く駆け抜けて、北倉に入らなくては不可ん」と云ふので、各々急行前進します所へ、今度は又英の騎兵、即ち印度兵が續々と行つて参りまして、遠慮なく馬上にて我が彈藥縦列を横切りますので、前へ進んだ隊は可いけれども、後の方の隊は、其の印度兵即ち英國騎兵隊の通過するのを俟たなくてはならなくなりましたから、隊長等は大いに焦立ちまして「オイヤ、其の印度兵に爾う言へ、今日日本の彈藥縦列が、甚だ急ぐから、些し突つて居て通して下さい」と、其の隊長らしいのに爾う言へ、何と言つても駄目です、言語が全然通じません」とそれは日本語では通じないから、支那語で行れ、支那語ならば彼等にも必ず多少分るに違ひない、備不可と行つて見い」「オイヤ、備不可」「你不可」「サア



、真似して居やがら、仕様がないな、實に是には我が縦列も大いに弱つて居りますと、聽て米國の騎兵も又た参りまして、是に次いで英の野砲が前進して來ると云ふやうな有様にて、イヤイヤ其の混雜踏、實に名狀すべからざる程にして、眞に困却致しましたが、致方がありませんので、其の雜踏の中を外國兵と外國兵との間に狹まつて、行進して参りますと、英の砲兵隊長が我が大隊長に向ひまして日本の軍隊は實に立派なもので、斯までに進歩して居やうとは、我々は夢にも思はなかつたですが、今度の戰鬪を見て感心しました」と言つて大層讚めましますから、栗原彈藥大隊長は「イヤ、其のお詞を承はつて恐縮の至りですが、何しろ我が司令官を始め、全軍は既に疾くに北倉に達して居て、吾が彈藥隊の行くのを俟つて居らるゝですが、道の悪いのと、途中敵の敗兵に遇ふて妨害されましたので、意外に後れました」と言つて、其の状況を物語りましたら、英の砲兵隊長は氣の毒に思つたか「イヤ、それは氣の毒ですな、爾云ふ譯ならばそれでは、小官、何とかして貴隊を先へ進ますやうにしませう」と、此の砲兵隊長は寔に心切な義侠心に當じ人を見せまして、騎兵の隊長の居る所へ馳せ行きて、何か霎時語つて居りましたが、聽て騎兵隊長は少時行進を止めまして、我が彈藥縦列を通過させて呉れましたゆゑ、それから横切らるゝ憂もなく、漸く英兵の騎砲兵に先んじて、北倉へ着致しまして、司令部に行きました。是は未だ前に在る山口師團長が、船中に入つて、船を司令部の寢所と極めましますと前事でありまして、栗原少佐が彈藥縦列を率ゐて着したと聞き、師團長は大いに御安心なさいまして「それでは直ちに補充せよ」と命じまして、直ちに各隊へ彈藥の分配を命

せ、茲に漸く補充が附きましたので、各將校も兵士も「サア最う何様敵兵に出會も恐れぬぞ」と大いに勇氣を奮ひ興しました。是等の話は總て八月五日の事でありまして、サア是で北倉の大戦争も略纏まりが附きまして、是よりいよいよ楊村、南蔡村、河西務、馬頭、張河灣通洲の戦争を大略演じまして、是よりいよいよ楊村の戦争に取巻る事と致しますが、此の楊村の戦には、我が師團長は英と米との司令官に御協議をなさいましたけれども、露國の方へは何の打合せも致しませんのであります。それは何故かと云ふに、前展々演ずる如く、露國の行方が餘りに人も無氣に、自ら薦めて議長席に就いたり、又た北倉の戦争には、左岸攻撃の任務を請合ふて置きながら、十分に其の任務も盡さるる中に、右岸へ渡つて來たりして、實に我儘勝手過ぎるのであります。英米人は頗る是に憤激致して居りますし、又た我が師團長とても、餘り快い心地ではありませぬゆゑ、そこで露國へは何の御相談もなく、日英米の三國司令官參謀官だけで、密かに協議して、楊村の攻撃を行ふ事に決しましたが、併し北倉の戦争には、日本軍が獨舞臺の有様であつて、英米の軍は全然日本軍隊の後援隊の如き状況であつたので、兩國の司令官も面目ないと思ひまして、我が司令部へ其の參謀官を寄越して言はしむるに「本日の戦争は、殆んど日本軍隊一手を以て行られたと云ふて可い位でありますから、我々英米軍に取りましては、實に遺憾の至りです、それで萬望明日の楊

百六十五

は、我々英米軍に取りましては、實に遺憾の至りです、それで萬望明日の楊







所なく命令に従つて戦争するのぢや、好んで何も我々に敵する奴原ではないから、逃げる者は逃がせく』と云つて、巻煙草を燻らしつゝ見て居たと云ふ話ですが、流石大國の大隊長は、何處も屑々しないで、大度量な所があります。スルと此時、米國の砲兵隊へ向つて、突然に砲彈を打込んで参りましたので、倭兵が未だ何處にか潜伏して居たか、米の將校も下士兵卒も驚いて、皆警戒を加へた米國の砲兵大隊長は屹と思案を致して居りましたが、大聲に『是は敵彈ではない、必ず味方の砲彈ぢや』 中隊長 『大隊長殿、敵彈ではない味方の砲彈とは、如何なる意味です』 大隊長 『今頃敵が砲彈を送り来る謂れがない、想ふに露か佛の左岸軍が、我國を敵と見誤つて、撃つたものに違ひない、必ず爾ぢや、味方打ちをする位馬鹿くしい事はないから、匿藏して居れつゝ』と號令して部下に成るべく身體を露はさないやうにさせて居ります、是は後に調べて見たら、全く佛兵が米兵を敵と見誤つて打つたのだとうです、サマ其の中に又た露國の軍も米國の歩兵を敵と見做して、砲彈を打ち込み、米兵五六人を負傷せしめたとうですが、實に此日は米國軍が最も先頭に進んで戦つて、一番多く損害を被つたる上に、加ふるに味方たる露佛の軍にまで敵と見誤られて砲撃を受け、爲に負傷者を生ずるに至りましたのは、實に氣の毒の至りでございました、是を以て見まするも、各國軍隊が言語を異にし、隊の編制を異にして居ながら、聯合して敵に當ると云ふ事は、中々難いものであつて、將來是等の事は大いに研究しなくてはならぬ軍隊上の一大問題だとうでござります。此日楊村の戦ひにて死傷は左の如くです、

米兵即死七名、負傷將校一名、下士卒六十名、英兵即死六名、負傷將校一名、下士卒三十七名、露兵即死將校一名、下士卒一名、負傷將校一名、下士卒十六名、

が、それでいよいよ楊村占領となつたら、露國が一番甘い事をした、其の理由は次回に詳しく演じます、倭又塚本旅團は楊村へ進入せんもつと右岸の敵を遠撃しつゝ、王庄茶棚を通過して、桃花口と云ふ所まで参ります、豊國らんや、行手には地圖にない川があつて、逆も橋を架せずには渉る事が出来せんゆゑ、其夜(五日夜)は桃花口に宿陣なし、翌六日の早天に、漸く此の河に橋を架して渡りましたが、些し行くと、先頭隊の方から又た河があると云ふ報告が参りましたので、塚本旅團長も實に弱つて了ひました『北清地方には沼や河が頗る多いと云ふ事は、豫て聞き知つて居るが、是程とは思はなかつたな』と云つて居る所へ、聯隊長竹中大佐も参りまして『イヤ閣下、意外です、今見まするに、大きな沼がありました、皆其の沼から流れ出して居る河です、イヤ、沼から出て白河へ注いで居る河ですが、勿々深いやうでありますから、恠麼しても矢張り橋を架せずには行かれせん』 塚本 『ハア、では矢張り又た沼があるのぢやな、仕方がない、成るべく速かに架橋をせなくては不可ん』 竹中 『已に工兵隊に命じて今作業に懸りましたが、イヤ實に意外ですな、恠云ふ河が幾個もあるやうでは、逆も今日豫定通り前進して、楊村に入るは難いと考へますが』と云ふから、塚本少將も『如何ぞも、爾ぢや』と云はれまして、自ら其處まで進んで見ますると、今や方に工兵隊が架橋



作業に熱心従事して居る最中でありまして、塚本將軍は其の側馬を立つて、双眼鏡を取りつゝ、信と向ふを眺めますると、湖水は勿々廣大なものであつて、向ふ岸は霧の爲めに確かと思はれませんが、其の湖の中央に、數十艘の小船に土人が乗つて居る者澤山ありますから將軍は是を見まして「ヤア、土民が漁業でも行つて居るのかな、イヤ漁業とも見えぬ、婦人小兒が大層居るやうぢや、是は想ふに戦争の爲に土民が被處へ避難して居るのぢやらう」

「爾のやうでいます、婦人小兒の方が多いうらに見えます」

「ハ、それに違ひない、大方敵の敗兵奴が控奪を肆にして行き居つたに違ひないから、それで想う土民が逃げたのぢやらう、併し湖水の中へ逃げて居るとは、ア、成程、婦人子供が多いが、婦人は足が小さいから、それで遠くへ逃げられないのぢやな、怎麼も憫然の至りぢや」と雲時見て居られます内に、河橋は架し終りましたから塚本旅團は其の先頭隊より順次に是を渡渉しまして、そうして湖水と白河との中間に在る道路を行進致しまするが、湖水は意外に大きくして、約二十町ばかり行くと、又た一の河があります、將軍は此の報告に接すると同時に、馬を下りまして「是は逆も楊村の先頭は我が旅團のものではないワイ、仕方がない、北倉の戦争で、我が旅團が餘り巧く演つたから、今度は他の隊へ譲るが至當ぢや、架橋の出来るまで休め」と言つて、休息して居る中に、工兵隊が漸く橋を架し終りましたから、又た渡つて進行を始めましたが、少しく行くと、又も河があるので、いよ／＼皆憫れ返つて了つて、最早や愚痴を言ふ者もありませんそこで塚本將軍が始めて心附かれまして「成程敵が多く左岸へ逃げたらしく、右岸には怎麼も多く逃げた形跡が見え

ぬので、不思議に思つたが、是で解つた、右岸は此の湖水や河が四ツもあつて、逃げるが不便ぢやから、それで左岸へ逃げたのぢやな」と言はれたそうですが、全く其の通りであつて、そうして此の河四ツとも、皆沼から白河へ注ぎ込んで居る河です。

是より前、露國司令官は如何なる考へか知りませんが、我が山口司令官に書面を寄越しまして言ふに「露國軍は楊村を攻撃するに方つて、日本の来るまでは、決して激烈に攻撃はしません、唯緩慢に砲撃を加へ置き、貴日本軍が着するを待ち、共に猛烈に攻めて楊村を占領しませう云々」

と云ふ意味の書面にて、偏へに我が日本軍隊を待つと云ふのでいます。山口司令官も此の書面を見て笑ひながら「シテ見ると、露國司令官も北倉の戦争に、我が軍隊の勇敢なるを見て意外の感に打たれたと見えるわい、それで何處迄も我軍を想ひにするの意を起した様である」と、司令部の人々と語りつゝ行進を始めましたが、勿論司令部は矢張り昨日と同じく右岸を進むので、即ち彼の塚本旅團の後から前進しましたに由つて、意外に後れまして、師團司令部の楊村へ着したのは、午後五時の頃でありました、勿論其のズツと前に左岸を行きたる眞鍋少將と、右岸を進みたる塚本旅團長も、疾くに楊村へ入つて居られましたから、先づ我が軍中にて楊村へ先に進入したる眞鍋旅團長は、師團長の着されたる事を聞いて、直ちに師團司令部へお越しになりました

「師團長閣下、唯今着きでありましたか」

山口「ヤ、意外に右岸は道路が不便で、途中に多くの河があつたものぢやから、それで豫想よりズツと後れて了ふた、怎麼ぢやつたね、左岸軍は」



『左岸軍も今少し早く着する豫想でしたが、何しろ外國軍が唯モッ急いで、メン／＼構はずに進みますのでそれは最う太だしい混雑を極めました。仕方がなかつたです。それで止むを得ず英國軍に掛合ふて、英軍の間へ挟まつて行進したですが、當地へ着して見ると、又た意外であつたです。露國兵は英米の軍隊に先んじて、揚村中に要所を残らず占領して了ふたです』山口團長「それでは露軍が先んじて戦ふたのかね』露國「イヤ、それならば仕方ありませんが、一番戦争に骨を折つて、一番餘計に損害を蒙つたのは米國軍で、英軍が是に次いで働いたですが、それでいよく揚村の市街を占領するとなつた時は露國軍は怎麼して這入つたものか、米英軍に先んじて市街に入つて、否、市街に入らぬ中に第一に先づ肝腎の停車場を占領して了ふたですそれから市街に入つても、第一の要所たる船橋から、それから大きな家屋は大概皆露國兵が入つて、露國の國旗を樹て了ふたです、是を以て見るに、露國軍は餘程此邊の地理に明かであるに違ひないです、英米の軍に散々骨を折らして戦争さして置いて、市街を取る時になると、真先に何處からか這入つて、バタ／＼と要所を占領して、旗を揚げて了ふたですから、全然英米の軍隊は露國のだしに使はれたやうでいすすな』と、眞鍋少將から委細を聞いて、師團長始め司令部の人々皆齒を切つて残念がりました、就中師團長は兩眼を閉ぢて、霎時何も云はずに黙考して居りましたが、稍あつて「好しッ、爾云ふ事なら、此方も又た考へがある、爾他の國の人を出し援いて事をする様では、決して彼の言を信する事は出来ないのであります、我も亦却つて其の裏をかいて遣らんければ不可ん』

前に風々演へまする如く、揚村の戦争は米と英とが主となつて戦争し、露軍も些しづ戦つたのであります、我が日本軍は其の後から進んだので、一寸も戦争に従事しませんゆゑ、如何なる戦ひをなしたるやら分りませんが、何しろ我軍の揚村に入つた時は、要所と云ひ船と云ひ、其の大概は露國が占領して了ふて、我軍は船一艘も取る事が出来ませんので、山口師團長始め我が將校の憤慨された事は一通りでありませんとここで此の六日の夜、我が司令部にて評議を聞きになりまして、先づ山口師團長は一同に向ひ、露國が爾云ふ風であつて見ると、將來我々は其の覺悟で萬事行らんければならぬ、油断して居ると、始終出し抜かれる様な事になるから此の事に就て、今夜諸氏の意見を聞いて、將來の方針計畫を十分に定めて置きたいと思ふ』と怒り發言されましたので、師團參謀長石橋中佐が進み出でまして「實に師團長閣下のお説の如く、露國は如何なる舉動に出るや知れませんが、豫め此方は其の準備をするのが肝要でありませぬ、若し此の先出し抜かれて、南蔡村に、河西務に、馬頭に、通州に、露人の爲に先んじられて了ふたならば、先づ第一に船を悉く分捕られて了つて、將來に於て如何なる不便を來すやも計られぬです、船のみならず、其他の物資も亦た然りです、故に小官の考へには、明早朝に一部隊を、爾も有力なる一隊を前へ出して、さうして船及び總ての物資を徴發すると同時に、敵状をも偵發するに越した事はなからうと思ひますが、如何でせう』と言つて、其の意見を述べにりました、是は石橋師團參謀長のお説は、寔に御有理なる考へでありまして、此日の揚村戦争は、全く露國に出し抜かれて、了つたのだから、今度は此方を出し抜いて了はな



と、彼等は將來如何なる手段を廻らして懸るかも知れず勿々漫然して居られませぬ。スルと福島少將が進み出まして、『小官の考へには、怎麼も露佛の司令官は、復た前進を延ばさうと云ふ説を持出しそくに想はるゝです、それは何故かと云ふに佛の云ひ獨と云ひ、多數の兵は已に本國を出發して、今途中に來つゝ居るですから、必ず此の兵員の來着するを俟つて、北京に向はんと云ふ事を、佛獨指揮官から露國司令官に迫つて居るに違ひないです、露國の司令官も情實上止むを得ず、又は是に同意をするに違ひあるまいと思はるゝです、して見ると屹度前進の延期説が露司令官の口から出るぢやらうと思ふです、それは假令延期説が出ましても、此方が同意せずは何も憂ふる事はなく又英米司令官は我方に贊同するぢやらうと思ふですから我意見さへ確乎として動かなければ、必ずそれは此方の言ふ如く、急速前進の説が勝を得て此方の意見通りになるものと思はれますが、いよく其時に臨んで、前進の順序を定むるに方つてそれこそ屹度面倒な議論が出るぢやらうと思ふですから、それには今石橋中佐の言はるゝ如く明早朝に一部隊を動かに……最も密かに前進せしめ、南蔡村を占領して丁度置くのが、至極妙策であらうと考へます』

(百六十六)

山口中將閣下は、福島少將と石橋師團參謀長との建策をお聞になつて、大いに喜ばれました。山口「成程、是は至極有理なる策である、それに一部隊を前に出せば、自から敵状も知れて、旁々都合ぢやから、爾しやう」と言はれまして御同意をなさいましたが、それにしても何程出さうと云ふ評議になつて、師團長は『一

個部隊だけ出さう、怎麼せ前進せしむるならば、小數の隊を出すより、有力な一部隊を出すに越した事はなから、砲工騎の各隊を若干づゝ附して前進せしめやう』と言はれまして、茲にいよく爾決しましたので、翌七日の早朝に至りまして歩兵第四十一聯隊長大佐小原芳太郎君に司令部へ出頭するやうと命じましたので、小原大佐は間もなく出頭になりまして『山口師團長は小原聯隊長を傍近に呼ばれました』外でもないが、君は直に部下の聯隊全部と、砲兵一大隊騎兵工兵各一中隊砲を率て、前進し南蔡村を占領されい『小原「ハイ、承知しました』』それで途中の河筋にある船は、成るべく殘さぬやうに徵發して丁はんければ不可ん此の楊村では我が日本兵が一番後れて這入つた爲に、最も必要な船は一艘も取る事が出来ないので、誠に遺憾の至りぢやつた、是に懲りたから今度は一番露國を出し抜いて遣る心算ぢや、それぢやから出來得るだけ急行して前進するは勿論ぢやが、沿道の村落に於ても、物資を徵發出來るだけしつゝ進んで、そうして敵状をも偵察せんければならぬが、併し若し南蔡村に、餘り澤山に敵が居るやうであつたならば、一先づ入るのを見合せて宜しからう』小原「ハイ、宜しうムいます……小官の考へでは、最う南蔡村には澤山に居るまいと思ふですが』山口「爾ぢや、澤山に居まいと思ふが、併し分らぬテ、是が日清戦役の頃の支那兵ならば、それは無論最う遠くへ逃げて了ふて、勿々五里や七里の所には居まいけれども、廿七八年の役の時と比較すると、大層に敵の様子が變つて居るからノウ』小原「ハイ、それも爾でありませぬが』山口「それで伊藤參謀を附けて遣るから、萬事協議して行られい』と言はれて、山口師團長は伊藤少佐に向ひまして『君、小原と一所に行つて



行られい』と命じました。伊藤參謀は直ちに了承して、小原聯隊長と同道にて聯隊本部へ参ります。司令部からは砲兵大隊長、及び騎兵工兵へも其の命令を下しました。そこで小原聯隊長は先づ其の本部に於て、伊藤參謀と種々御評議になりました上、騎兵中隊長今井大尉(義一)をお呼びになりました。小原聯隊長は此の事を告げ「君の隊から一個小隊だけ左へ出して、左方を警戒しつつ前進せしめ、君は部下の残部を率て本道を進ませい」と命じました。今井大尉は「承知しました」と直ちに部下に命令し、部下の小隊長をして一個小隊を率ゐさせて、本道より左の方へ廻らして、そうして大尉は自ら他の部下を率ゐて、本道を前みますが、今井大尉を始として、騎兵の人々も口には言ひませんが、心の中には皆楊村では外國兵に先を越されて残念ぢやつた、今度こそは日本軍が眞先に前進するのぢやから、愉快であると思ひながら、勇ましく進み行きます。

騎兵大尉今井義一君は、部下鈴木少尉をして一小隊を率ゐて、左側から前進せしめ、自分は本道を進ませます。約二千米突ばかりも進んだと思ひます頃に、敵の方からズドン／＼と砲撃を始めましたが、其の敵弾が我が騎兵の間に落下しますので、容易に前進が出来ません、そこで今井騎兵大尉は「後へ／＼と號令して、一寸後方へ退かす事に致しましたが此時敵の斥候兵も若干出て参りましたから、我が尖頭に居る騎兵は、之に向つて射撃を加へますと、敵は直ちに退却して了ひました。サテ話戻つて我が歩兵は四十一聯隊の第二大隊、即ち少佐小倉信恭君の率ゐる隊を前衛として、工兵第二中隊、即ち土屋工兵大尉

をして部下を率ゐて之に従はしめます。小倉少佐は第七中隊を尖兵としまして、逐漸に前進しますと、前方に於てズドン／＼と砲撃が聞えますので「ヤア、騎兵が敵に衝突したぞ、サア急げ／＼」と言つて進みます。中に、騎兵中隊は退却して参りまして、今井騎兵大尉は小倉大隊長の前に來つて一禮なし、敵は南蔡村の南方なる定福庄に在つて、砲撃して居ります。又た敵の斥候らしい者若干出て参りましたが、我が騎兵は是に向つて射撃を加へますと、皆退却して了ひましたが敵の砲撃は益々烈しく加へますので、退いて参りました」と報告した。是に於て小倉大隊長は「好し、では一先づ行進を止め」と隊の前進を止めまして、そうして將校斥候を出さうと云ふ考へですから、尖兵隊なる第七中隊の少尉を呼びまして「君は直ちに斥候に行かれい」と命じましたので、少尉は直ちに部下の兵一分隊を率ゐまして出懸けましたから、小倉大隊長は「サア、此間に晝飯を喰べろ／＼」と云ふので、是から晝飯を喰せましたが、此時が恰も十時半で、いまして、斯る所へ小原聯隊長も参りまして「怎麼ぢやね、敵は澤山には居らんやうかね」少佐今將校斥候を出しましたが、南蔡村より此方の村落に敵が居るやうです。ハイそれは騎兵報告に依つて分つたですが、それで今、又歩兵の將校斥候を出しましたぞ」小原「ハ、爾かね、では先づ暫らく休んで、斥候の報告を聴きたら」と言つて待つて居りますと、十二時一寸過る頃、將校斥候は引揚げて参りまして、定福庄に敵の歩兵砲兵が居ります。澤山は居ないやうです。土人に就いて聞いて見ますと、五六百人位しか居ない、大砲も三門位のしかありません。居ります」と報告しました。小原聯隊長は之を聞かれて「それでは兎に角前



進して見やう……オイ、砲兵隊に早く来るやうに言へ」と命じまして、零時三十分に至つて又も前進を始めましたが、此の地理圖に在りまする道路の曲つた所まで行きますと、敵は之を見附けましたか、頻りに烈しく砲撃を加へまする、そこで小原聯隊長は「皆降せい」と言つて、土壕の東側へ入つて隠蔽し、隊を開進して砲兵の来るを俟つて居りますと、敵は無暗に砲撃を致しまするが、聯隊長は其の砲撃に依つて熟々考へまするに、成程三三門位のものであります大佐「ム、是は其様に多數は居ないな……オイ、大隊長」と小倉小佐を呼びましたから、少佐は直ちに聯隊長の側に参りまして「聯隊長殿、お呼びでしたか」小原「ム、二個中隊ばかり試みに前進させて見られい、最う其中には砲兵も来るぢやうと思ふから」小倉「ハ、承知しました」と小倉少佐は部下の第七中隊と第八中隊とに向ひまして、前進を命じたので此の兩中隊長等は直ちに部下を率ゐて前進致しまする、是は一時を一寸過る頃でありまして、其炎熱の強ひ事は勿々一通りでありませんから前進兵の困難は筆舌の能く盡す所でありません。

砲兵大隊は大隊長代理津田大尉が是を指揮して歩兵の後方から前進致しましたが、其中に前方に於てズドーンと砲聲が聞えますので、津田大尉は「オイ副官、君一ツ前方へ行つて見て来て呉れい、ム、聯隊長に會つて、状況を聞いて来て欲しい」と命じまして、部下をば止めて休息致しまする、副官坂本中尉は命を受くるや直ちに駆足にて前方に進みますると、小原聯隊長を始め、我兵は土手の陰に據つて掩蔽しつゝ居る所ですから、坂本中尉は聯隊長の前に來つて一禮なし「聯隊長殿、如何でういます、砲兵は直ぐ此後方に居り

ますが、大隊長殿が聯隊長殿の命令を聞いて来るやうにと言ひますので、参りましたが「小原「ム、爾か、今歩兵を二個中隊程前進させたが、敵も此の通り撃つて居るから、我が砲兵も直ちに來て砲撃するやうに言ふたが宜しからう、砲兵陣地は……ア、彼邊にある、彼處の高地が適當の地と思ふ」中尉「成程、彼處が宜しうムいませう、ハ、是は屈覺の砲兵陣地です」坂本中尉は直ちに馬を馳せて、歸りましたが「聯隊長殿は、直ちに來て撃つやうにとの命令です、ハ、砲兵陣地も恰と適當の所があります」大尉「爾か、宜しい、ではサア直ぐに前進せい」と言ふので、急行前進を命じましたが野砲の事ですから、急進すれば殆んど騎兵と同様の速力を以て、前進が出來ますゆゑ、間もなく小原聯隊長の居らるゝ所へ参りました、聯隊長は之を見て「速く砲撃に寛かれい」と命じましたから、津田大尉は西方に在る高地を以て砲兵陣地と定むるや、直ちに陣地に進入しまして砲列を布かせますと、敵は是を見附けたやうでありまして、其の砲列を布いて居る間に頻りに烈しく撃ちました、皆能く我が陣地の近邊に落下しますので、我が將校等は敵ながらも大いに感心しまして「ヤア、是は勿々油断ならぬぞ能く標準を過らないで、慥う巧く撃つ」支那兵と云ふと、今までは侮つて居りましたが、今此の砲兵の手際を見ては、決して侮蔑は出來ません、意外に急速の進歩をしましたなア」と言つて、皆々感心をして居ります「サア、早く砲列を布て了はなくては不可ん」と云ふので、見る／＼中に砲列を布き、津田大尉は先づ敵の陣地を見るに、砲兵と歩兵と居りますから、二千二百米突の標準を以て先づ試射を行らして見たのでムいす、即ち試し撃ちをさせて見ました所が、甘く敵の陣地に落



下しますので「サア之で好い、此の標準で確平撃れン」と云ふので、榴散弾を猛烈に、即ち曳火射撃を行はせました、スルと果して敵は動搖し始めましたから、小原聯隊長も砲兵陣地に來つて、此の戦況を見て居りましたが大佐「ム、甘い、是では敵も堪らぬぢやうらう、ム、動搖し始めたな」大尉「先刻此方が砲列を布いて居ります時、頻りに此方へ砲撃を加へました、勢とは、全然變つて了ふたやうであります」大佐「爾ぢや……ヤア、彼處には立派な旗が見えるが、是は彼處には餘程地位の高等な武官が居るやうぢやぞ……アレ彼處ぢや」津田「ア、成程、爾ですな、イヤ美事な旗印であります」と話しつつ見て居る中に、我が砲兵の撃つたる砲弾は恰も敵の騎兵の真中に落下破裂して、多くの敵を斃しました、茲に至つて敵もいよく堪り兼ねたと見えて、又候逃げ出したやうでムいですが、此時向きに前進したる歩兵の第七第八の兩中隊も逐次行進して、敵に近附いたやうであります、敵の逃ぐるを見るや、一齊に喊聲を揚げつゝ進撃致しました、其の光景も亦勇ましく見えます、

楮又小原聯隊長は、第一中隊長高野大尉に向ひまして「君は其の部下全隊を率ゐて、左側の方へ前進せられ、左側には騎兵が一個小隊出してゐるから、聯絡を取つて行られ」命令しましたので、高野中隊長は領承して、直ちに部下を率ゐ、左の方の道路に出でまして前進します、行く／＼敵の居たらしい形跡がわります、

「中隊長殿、鞭などが落ちて居ります」「巻煙草や、點火索などもありません」「ム、成程、之は敵奴休息して居たらしいな」彼様に如の高泰が倒れて居りますのは如の中を逃げ去つたものと見えますな「ム、

爾ぢや、高泰の間を潜り／＼逃げたものと見える」と話しつつ、逐漸に進み行きますと、北方の方つてズド／＼と砲聲が聞えますので、高野大尉は「サア皆八方に注意しつゝ行け、何の方向に敵が居るかも知れぬ、何しろ此の通り畑の黍が高くて、且つ繁茂して居るから、敵は隠れて居て、不意に打出すかも知れぬに由つて、始終怠りなく警戒しながら進まないと、意外な目に遭ふかも知れぬぞ」と注意を促しつつ前進します、

部下の小隊長下士兵卒も些しも怠りなく、四方に眼を配りつゝ進みますと、果して前方に敵の騎兵が若干居りますゆゑ「ソラ、敵の馬隊が居るぞ」と中隊長始め兵士等皆勢ひ込んで急進に前進すれば、敵の騎兵はハヤ驚いて逃げ出しました、我兵は之を追ふて、尙ほ進みますと、彼の騎兵等は馬足を藉りる事ゆゑ、忽ちの中に遠く逃げ去つて、姿を隠して了ひましたから、我兵は残念に思ひつゝも前進しますと、馬庄と云ふ所にも敵の歩兵が若干居るやうでムいします、我兵之を見るより是に向つて撃ち出しました敵も少時撃ち合ふて居りましたが、其中に又も逃げ去つて了ひましたから、高野大尉は「オイ、本隊へ聯絡を取らんければならぬぞ、本隊の方へ行つて様子を見て來い」と命じますと、一人の兵士は領承して、直ちに馳せ行きます、幸ひにして途中何の故障もなく、本隊即ち小原聯隊長の許まで参りまして左側隊の状況から、馬庄に居たる敵の逃げ去つた事を報告致しました、そこで小原聯隊長は「爾か、好し本隊の方も今敵が退却するゆゑ、前進して、定福庄に入るに由つて、左側隊も同時に前進して、定福庄に入るやうにせよ」と命じて、傳令使を返らしめましたが、此時に方つて恰と定福庄の敵は逃げ出す最中でありませぬ小原聯



隊長は砲兵に向ひまして『猛烈に追撃せよ、速く追撃して南禁村へ這入つて了はなくては不可から』と言つて、隙さず追撃を加へましたるに、敵はよく慌て、定福庄を残らず逃げ去つて了ひましたやうでいます。是に於て前に進んだる歩兵の第七第八兩中隊は、忽ちの中に定福庄へ入つて、此處を占領して了ひます。左側隊も殆んど同時に此の村に入り來りましたし、左側の騎兵も亦相前後して這入つて參りました。『最上些し烈しく抗敵するかと思ふたが、イヤ、ヤ脆いものぢやつたねえ』『ナニ、君、敵としては此位に行れば、勿々好く戦つた方だよ、何しろ北倉を落され、楊村を破られ、敵に取つたら息を吐く間もなく、我軍が突撃突撃したのぢやから、爾う抵抗は出來ない』『爾ともく、敵の身に取つたら何れ程苦しいか知れやしない、是程に抗敵すれば、マア敵としては誓めて遣つても宜しい』『など』話して居ると、此の定福庄の東方、即ち白河を隔て、向ふへ敵兵若干露はれて見えます。『マア彼處に敵が見えるぞ』『ム、成程、騎兵と歩兵と居るマア、勿々に澤山に居るやうぢやなマア』

我が騎兵、歩兵は定福庄に入るや、直ちに騎兵は又た南禁に向つて前進せんと致します。南禁村の村端、即ち南の入口に若干の敵兵が出て居ります。そこで我が前衛隊長小倉少佐は此の報告に接するや、直ちに自ら定福庄の北端まで進んで見ます。如何と云ふ敵は向ふの村端に居るのみならず、白河の河向ふからも我兵に向つて射撃して居りますので、小倉少佐は一個中隊だけ河向かふの敵に當らしむれば澤山と思ひましたから、第七中隊長に向ひまして『オイ、君の隊は川の東方に向つて射撃せよ』と命じたので、第七中隊

長は直ちに部下に令して、一斉射撃を行はせると、小倉大隊長は他の兵を以て、南禁村の村端に出て居る敵に向つて射撃をさせます。敵も烈しく彈ち出しましたが、其中に我が砲兵が到着しました、それと河向ふの敵も勿々優勢にて、頻りに我れに向つて射撃して、容易に退却しませんので、我が砲兵隊は土堤上に砲列を布いて、スタン／＼兩方の敵に向つて撃ち始めました。此の砲兵の掩護に依つて、小倉少佐は恰も三時と覺し頭を、二ヶ中隊を第一線にして前進させます。南禁村の南端に出て居た敵は堪り兼ねて、皆退却して了ひましたし、河向ふの敵も亦漸く逃げ去つて姿を見せません、然れども白河と南禁村の村落との間なる畑中や、柳樹の森中に居る敵は、頑強にして容易に逃げ去りません、我軍を見ても、小賢しき敵なりソラ塵殺しにして了へと勢ひ込んで向つて參ります。道に頑強なりし敵兵も、たう／＼逃げ出して了ひました茲に於て我が騎兵、歩兵もさしたる苦もなく、此の南禁村へ入つて、占領する事を得たので、休息して居る所へ、ブメツヒユル／＼と飛び來りますので、砲兵隊長は『皆土堤の東側に入つて、隠蔽して居れ』今此處で洗弾などにて中てられては、意不得なり隠れし／＼と命じて、皆隠蔽して休息させて居ります。ヌルと又た白河の向ふ敵の馬隊が若干露はれたので、『マア、敵の騎兵が河の東方へ入る／＼』と頻りに騒ぎ出したから我が砲兵隊長は『ロン／＼』何を騒ぐ騒ぐのぢや静肅にして居れ／＼と部下を戒めて、唯四方を警戒して居ります。此の河向ふの騎兵は少時して姿を隠して了ひましたが、



今度は南禁村の北方に在る村落なる磚庄と云ふ所へ、敵が又た露れたので、小倉大隊長は此の報告を聞き直ちに馳せて南禁村の北端に行き見て見ますると成程磚庄に敵が居て、此方へ向つて来るやうな様子がありますゆゑ、小倉大隊長は矢張り歩兵を二個中隊だけ、南禁村の北端に出して、磚庄を望んで射撃を行はせまうと、是も亦た忽ちの間に退却して了ひましたので、小倉少佐四方に前哨を張りまして、警戒を嚴重にして置いてさうして是を小原聯隊長に報告致しましたから間もなく小原大佐は南禁村に入り来りました、小倉少佐は出迎へまして「聯隊長殿、南禁村は思ひましたより樂に占領が出来まして、まアお目度うございました」と言ふと、聯隊長も莞爾笑ふて「ふ、マア宜しかつたね、敵は河向ふにも餘程居たやうであつたが、何方の方へ逃げたかなア」小倉「左様です、此處に居た敵は河向へは逃げないで、矢張り右岸を逃げたらしいです」小原大佐は南禁村に入つて、小倉大隊長と種々お話しになつて居ります所へ、一騎の傳騎は南方より馬を馳せて参りましたから「ア、傳騎が来た、多分師團長から命令を持つて来たのぢやらう」と言つて居る中に、早やマツ〜〜と聯隊長の前に参りますと、馬を駐めて一禮なし、師團長より命令を齎したる趣きを告げて、ポツマツトより取出したる命令書を、直接に小原大佐に手渡し致しました、聯隊長は取つて之を見るに、師團長は明八日に南禁村へ行くから、南禁村を守備して、妄りに前進はしないで居るやうにと云ふ命令であります、小原大佐は讀み終つて「宣しい、承知しました」と師團長閣下へ爾う云うて呉れい」と言つて、傳騎を返らしめましたが、聯隊長は部下の大隊長中隊長等に向ひまして「サア、師團長の

命令ぢやから、今夜は此の南禁村に宿營ぢや、宿營の準備せよ」と命じたのが、是から宿營の仕度に取り懸りました、此の南禁村と云ふ所は、黒嶺も夜中に一寸立寄つて見ましたが、人家も勿々ある所でありまして、白河の右岸に在る一市街です、河を去る事僅々七八百米突の所に人家が並んで居る、天津から北京への街道中なる宿驛でありますから、中には随分立派な家もあります、依つて、聯隊長は部下に命じて「明日師團長がお出になるとすれば、師團長の入らるゝ家も準備して置かんければならぬ、其の心算で成るべく家を捜して置け」と言付けまして、市街中を彼方此方と捜させました、何しろ人民は戦亂を避けて概ね遠く逃げ隠れて居りますし、僅かに残り止まる者は、極めて身分の賤しい無財産なる者ばかりであるし、且つ支那兵が荒して行つた跡ですから、何の家も一亂暴極まつた有様になつて居て、イヤ、ハヤ見るに忍びないのでムいます、漸く大きな好い家を數軒見附けまして、宿營の準備などして、小原聯隊長は此の家に入り来りました、併し敵はまだ遠く逃げ去つた様子もなく、怎麼も近い所に居さうでありますゆゑ、今夜何時にも攻襲して来ないとは限りません、そこで小原大佐は各隊長を戒めて「警戒は最も嚴にして居なくてはならぬ、八方に前哨を張つて、砲兵へも十分護衛を附して置かなくては不可んから、其の心算で」の其他萬事遺漏なく注意致しました、斯して小原大佐は漸く些しく休息して居りますと、間もなく日は暮れて了ひましたが、聯隊長の軍曹が「聯隊長殿、焼酎があります、一ツ召喚つては如何でムいます」と申しますから、大佐は笑ひながら「爾か、一杯呉れい、疲れ休めに飲んで見やう」と云ふと、聽て軍曹は盃に入れて持参しま



して、其處の卓子の上に在りましたる玻璃杯へ注いで出しましたから。大佐はツツと一口飲んで見ましたが、  
 怎麼も日本の耐焼の様に美味がありません。大佐「是は甘い好い焼酎でないア、副官、怎麼ぢや、一杯飲らん  
 か」副官「ハイ、載せませう……成程怎麼も國で飲むやうには参りません」大佐「それは如何せ、日本の酒とは  
 同一にはならぬ。米と云ひ水と云ひ違ふぢやから、併し悠々云々不自由な中で飲むのぢやから、甘く飲め  
 るのぢやが、想ふに是は日本のやうに酒の糟から取つた焼酎ぢやあるまい、何ぢやか、些し青臭いやうな氣  
 がする」副官「之は唐梨から取るのぢやさうです」と話して居るに、俄かに入方からボン／＼バラ／＼と、  
 豆を炒るやうに銃聲が烈しく聞えて参りましたから、人々はソラ夜襲だ夜討だと騒ぎ出しました  
 小原隊長は夜襲と聞くより「騒ぐなッ」と大聲に言ひつゝ、立揚りまして、少時首を傾けて居りましたが「ム  
 、騒ぐ事はない、撃たしては不可ん／＼、此の暗夜に撃つても無駄ぢやから、撃たすな／＼」と號令して、  
 撃方抜ての號音を喇叭手に吹奏させましたから、我兵は一發も撃たないで、唯成るべく蔭蔽して敵の様子を  
 窺つて居ります。凡そ三十分間はかりはボン／＼バラ／＼、頻りに音がして居りましたが、其中に撃ち止  
 んで了ひましたから、隊長は「ソラ見い、吾輩が思ふた通りぢや、敵は無暗に撃つぢや、敢て此の南葉  
 村を回復しやうと云ふだけの勇氣はモロ無いのぢやが、唯申譯の爲に行るのぢやからして、キンのお役に撃  
 つて見るのぢや、アツハ、／＼」と笑つて居られますが、成程之は小原大佐の言はれる如くを見えまして、  
 其後は寂寥として了ひましたから、各將校も兵卒も「河だ馬鹿／＼しい、是なら心配する事はなかつた」と

云つて一同大いに安心して、任務のない人々は最早や臥した人もあります、スルと殆んど十時とも覺しき頃  
 でありますが、北方の村端なる前哨の方向の方つて、又もや俄然銃聲が烈しく聞え出しまして、夜襲だ／＼  
 と云ふ聲が致しますが、我が將卒等は以前の事がありますので「ナニ、又た申譯のお役夜襲だから今に矢  
 張り退いて了ふよ、騒ぐだけ此方は損だ静肅にして居れ／＼」爾とも／＼、臥て居れば今に退いて了ふよ、  
 敵も北倉楊村南葉村と、僅かに三日の間に、三個所の要地を奪られたのだから、指揮官が朝廷への申譯に、  
 夜襲の眞似事でも行つて、それを口實に敗北の罪を免れせられやうと云のぢやらう」なんかんと嘲り笑ひつ  
 ゝ、臥して居る人々もありませんが、果して少時すると、又た銃聲が止んで了ひましたゆゑ「ソラ如何だ、此  
 通りぢや……聲はすれども姿は見えぬ、キンにも前は屁の様だとは、彼れキヤン兵の事ぢやなア、アツハ、  
 、『空夜襲／＼』と口々に罵り笑つて居ります中には、早ヤツ／＼と高聲で寝入つて了つた人々も  
 わりあります。小原隊長も夜の更くるに従つて、次第／＼に睡氣を催はして参りまして、遂には熟睡をな  
 しました。間もなく北方なる前哨の方の方つて、ボン／＼バラ／＼と云ふ銃聲が爲出しまして、其の音響  
 は逐漸に烈しくなつて参りましたので、隊長は之が爲に眼を覺しましたが「ム、又た夜襲か、五月蠅なア」  
 と言つて居る所へ、一人の兵士は喘ぎ／＼隊長の居らるゝ所へ馳せ来りまして、「一聽するや、隊長殿、又  
 た敵が襲ふて来りました、今度は勿々優勢でムいます」小原「爾か好しッ、オイ副官／＼第二大隊長に夜襲の  
 敵の早く撃退する様に言はれ、ム、一中隊だけ砲兵の護衛に置いて、他は皆行けと言ハ」命令せられたの



で、副官は直ちに是を小倉少佐に傳へました。少佐「承知した」と一個中隊を砲廠へ發して置きまして、他の三個中隊を率ゐ、馳せて前哨の所へ行きますと前哨兵は今や方に夜襲の敵と察し合つて居る真最中であり、成程却々の優勢なる敵であつて、それが又た意外に頑強で、敵は那件那色此の南蔡村を回復して丁はうと云ふ意だと思ひまして、此の夜中を厭はず、猛烈に突撃して來らんと致しますから、小倉少佐は「夜襲の敵へ向つて逆襲せよ」と號令して、三個中隊一齊に喊聲鋭く突進して行き、敵も之には抗し兼ねたと思ひまして、とう／＼退却して丁ひました。併し我兵にも二人の負傷者がありました。小倉大隊長は部下を誡めて云ふに「敵は勿々執念深いから、又た來るかも知れぬ、決して油断するな」と嚴重に警戒さして居ります。

却説是からがいよ／＼楊村の大會議になるので、前回は演べました小原聯隊長が定福庄から南蔡村の方へ進んで居る最中に、楊村では各國司令官、及び參謀官の大會議があつたのでありまして、それは六日の夜、爾も小原大佐が山口師團長から前進の命令を受けました頃、露國の司令官リウエニツチ中將より、各國の指揮官へ書面を以て會議の事を促して參りましたが、其の趣意の概略は「兵士が頗る疲勞して如何んとも致し方がないから暫時兵を休めたい、それに就て御評議を致したいから明日午前十時に御會同下さるやう」と云ふ意味の書面を呈します。それで我が軍へは福島少將宛に參つたのでありまして、其書は黒猫も福島閣下から一寸見せて致した事があり、茶色の様な西洋紙へ書いてあつて、歐文の事

すから私には些しも讀みませんが、何んでも爾も意味の書面だとうてい、そこで福島少將は山口師團長に向つて「徳々云々の書面ですが」と言ふと、山口中將は「フム、疲勞した」と北倉では日本軍にのみ働かして置き、楊村では英米の軍に骨を折らせて置いて、それで疲勞したとは、能く其模範が言つたものぢやな、向ふて疲れたと云ふならば、此方は些しも疲れないと言ふ方が宜しからう、第一彼が其様な事を言つて奇越したのは、想ふに佛獨の兵が未だ來ないから、此處で日を延ばして、そうして佛獨の兵隊の着するを俟ち、北進しやうと云ふ計畫をやらう、今の儘で前進すれば、又た例の如く日本一手の功名にされて了ふから、爾もせないと云ふと、言ふ者へやらうと思像するなア、或は爾も知れませんが、果して爾でめれば、無論大反對に出て、一時も早く前進の説を成立たしめなくてはならぬですが、それで明日の會議には、師團長は御出席になりますか、山口「爾ぢやね、怎麼しやうか、中將師團長閣下は御出席にならずとも宜しいではありせんか、リウエニツチが天津會議の席に先進にして年長なる閣下を差遣き、自ら薦めて議長席に着いたのは、實に無禮も亦甚だしいのであつて、師團長閣下が寛大なればこそ、恕して彼が言ふが儘にしてやれば、北倉の戦争には言ふべからざる不手際を爲したのみならず、茲に至つて又た書面を以て自己の陣營へ呼ばんとするなどは、いよ／＼益々無禮極まつて居るですから、閣下が自ら御出席になるのは、何ぢやか彼が……」と石橋參謀長の言の半聞いたる山口師團長は先づ「アツ、アツ、アツ」と哄笑し「イヤ、實は吾輩も明日は出席しやうと思つて居るのぢや、全體天津で議長席を讓つて遣つてあるし、北



倉では我が日本軍が充分に働いて居るのぢやから、彼の方から一度吾輩の許へ来るのが禮ぢや、そうして本  
 來、今度は吾輩に議長席へ着いて呉れいと云ふのが當然ぢや、吾輩何も議長席へ着きたいのではないが、そ  
 れが禮と云ふものぢや、彼の様子を見るに、唯徒らに自ら尊大に構へて、大國と云ふのを鼻に懸けて威張り  
 たがるだけぢや、禮儀徳儀と云ふ事を知らぬ人物としか思へぬ、吾輩行くに及ばぬから、明日は福島君、行  
 つて十分に論られい』少將「ハイ承知しました、察するに彼必ず此處に暫らく止まつて、佛獨軍隊の來着を俟  
 たうと言ふぢやらうと思ひますし、又た縦令急速前進と決しても、屹度自分の方の軍隊を先頭に立たしめん  
 と言ひ出すに違ひありませんから、其時は十分に論つて遣りませう』と福島少將は、日頃寡言謹嚴な方に似  
 合はない、此時ばかりは意氣激昂して、殆んど天を衝くかと思ふばかりです、  
 山口師團長は楊村の會談へ出席しない事になりましたので、福島少將と原田少佐と二人だけ行く事に極りま  
 して七日の九時頃に宿營を發しまして、露國軍の本營、即ち楊村の北に一寸した丘が有りまして、其處がリ  
 ウエニエツチ中將の本營になつて居るから、福島原田の兩君は、此露の本營へ參りますと、リウエニエツチ  
 中將は欣々然と喜んで兩君を迎えます、リウエニ「イヤ怎麼も、お早くから出下されて御苦勞でありました、  
 全體小官が一才貴司令官の許まで參上する心得で居りましたが、種々用事が取込んで居りましたので、ツイ失  
 禮しました」と大層に丁寧でムいす、福島少將も故らに笑を含みまして「イヤ怎麼致しまして、本日の  
 會議には我が師團長も是非出席する心算で居りました所が、些と風邪の氣味が頭痛がしますのです、それで小

官等だけ出席する事になりましたが、我が司令官から閣下へ宜しう言ふて呉れいと云ふ傳言でムいす』と  
 此方も些しお世辭を交へて演べますと、リウエニエツチ中將は「イヤ怎麼致しまして、貴官がお出下されば  
 結構です」と言つてる中に、米國英國の司令官參謀官も來り、之に次いで佛も其他も參りまして、茲に各國  
 の司令官參謀官、殘らず露國軍の本營に集まりましたので、いよく大會議となりましたが、先づ議長席に  
 着きたる露國司令官リウエニエツチ中將は一同に向ひまして「諸君は早速に御來會下さいまして、寔に有難  
 く存じます、諸官及び諸官の部下たる軍隊の骨折に由り、北倉楊村の敵を撃退して、意外に速かに此地ま  
 で進軍しましたのは、實に我々聯合軍に取つては、此上もない名譽であつて目出度い事です、然りと  
 雖も、茲に一の困難と云ふは、此の極暑の中で行軍戰闘に従事した爲め、兵士の疲勞も亦た非常なものであ  
 り、殆んど困苦疲憊の極に達したと言ふても、過言でないであります、故に本官の考へには、暫らく當  
 楊村に於て兵士を休息させ、其の疲れを慰癒せしめて、然る後前進したいと思ふです、若し此儘にして前進  
 せんとしたならば、兵士は逆も行軍の苦痛に堪へ得るものではありませんに由つて、それで其事を諸官に謀  
 るが爲に御集會を願つたのであります、萬望諸君は御意見のある所を十分に演べて戴きたいのでムいま  
 す』と述べましたので、各司令官及び參謀官、副官等は、互に顔と顔とを見合せて居ります、福島少將  
 は之を聞くと同時に、席を進めまして「小官は敢て兵士を休息せしむるの必要はないと思ひます、成るへ  
 く速かに前進して、北京城を陥れ、其の籠城者を救援するのが、我々の目的であつて、今の場合一刻も猶豫



しては居られぬと考へます』と言ふ詞の終ると等しく、英國の參謀パロー少將が席を進めまして『小官も日本參謀官 福島少將のお説の如く、一日も早く否一刻も遅く、北京を救援する爲に前進したいと考へます、若し今此處に躊躇して居たならば、北京に在る人々は、遠からずして屠殺されて了ふに違ひないのでありますから、假令些し位の兵士が疲勞して居るにもせよ、今の場合は其様な事に拘つて、猶豫遷延は逆も出来ないのであります、其の理由を尋ねたいなりといふならば、小官は詳細に述べませう』と言ひましたので、露國司令官リウニエツチ中將は、英の參謀パロー少將の方に向ひ『では其の理由を聴きたいものですな、本官等は北京に於ける龍城者は、既に過日から休戦となつて、敵の攻撃を受けて居ないのでありますから、今疲れた兵を以て爾う至急に前進せずとも、此處で休まして、十分に慰養せしめた上に行つても、決して遅い事はないと思ふですが』と言はれました。

英國のパロー少將は、議長リウニエツチ中將の言が終るや否、莞爾笑つて口を開きました少將『小官が一刻も速かに前進しなくてはならぬと言ひます理由は、實は本日、天津の我が領事から電報を届けて寄越したですが、此の電報と云ふのは上海の我が英國領事が掛けたのであります、芝罘で取次いで天津に達し天津から持たせて寄越したものですから、確然たるものであります、それで其の趣意はと云ふと、北京にて一時休戦を申込み來つて攻撃をしなかつたのが、又た七月三十一日頃から、再び攻撃し來つて、矢張り日々猛烈に各公使館を攻立て、居るとの事です、そのみならず、李秉衡は一萬の兵員を募つて、近々北京へ

着すると云ふ事であるし、李鴻章も亦た皇室保護の爲め、一萬の軍隊を率ゐ、已に南方を出發して北京を指して來つゝ在るとの事です、サ、此通りの電報であります』と言ひつゝ、パロー少將は其の軍服のポケットより一葉の電信文を出して、議長リウニエツチ中將始め、各司令官の前に置いて示しました、スルとリウニエツチは此の電報を手につつて熟々見て居りましたが、少時して『ハ、ハ、是は意外ぢやねえ』と言發せられた儘、又た黙して何事か考へて居ります、時に福島少將が進み出でまして『無論、是は疾く進んで、一刻も速かに北京救援の目的を達しなくてはなりません、小官熱々想ふに、敵は北倉の戦争に敗北して必ずや落膽して了ふて居るに違ひないです、それであるから、最う勇氣も何も沮喪して了ふたればこそ、此の揚村の如き、極めて肝要なる地さへ、僅々一小戦を以て、何の苦もなく占領されて了ふたです、今更喋々するまでもなく揚村は戦略上頗る要地にして、北倉よりも寧ろ此處で敵は確乎踏張らなくてはならぬ所であるのに、聯合軍が左岸から行つたので、忽ちの中に敵は敗績して了ふたですから、此一事を以て見るも最早や敵の勇氣は挫屈して居ると云ふ事は明かに分つて居ります、戦闘上斯云ふ場合には透さず追撃して敵をして息をも吐かせず、彼が逃ぐる隙に就いて行くを以て、最も得策と爲す事は我々數回の經驗に由つて知つて居ります、是を追撃して急速に前進さへすれば必ずや意外に容易に北京まで行くことが出来るぢやらうと思はるゝです、又た今一の理由は、英國のパロー少將のお示しになつた電文の如く北京の敵は全く再び公使館の攻撃を始めたと云ふ事と、其他の事も、吾々が此間から度々得た北京よりの密使が持つて來まし



た報告と、恰も符を合せるやうに合ふて居るですから、北京の籠城者は、實に其の危急なる事、命旦夕に迫ると言ふても敗て過言ではないです、今若し躊躇して居たならば、公使以下屠殺になる事は分り切つて居るので、假令敵の爲に屠殺されないまでも、肝要なる糧食が盡きて了へば、餓死するに至ります、萬一にも爾云ふ事に立至つたならば、吾々救援を以て任務とする者は、何の面目あつて將世人に見ゆる事が出来ませうや、且夫れ今の場合、猶豫して居りましたならば、それは我が聯合軍も増加して来るではありませうが敵の軍も亦大いに勢力を増し加はつて来ますゆゑ、矢張りそれだけ餘計に骨が折れて来るで故に是は怎麼あつても急速に追撃するに越した事はありませぬ』と、斯の如く演へ立てますと英の司令官と米の指揮官とは、共に膝を打つて是に賛成して言ふに『吾々は日本參謀官の急速前進の説は最も同意を表します、今の場合、決して猶豫して居られませぬから、萬望直ちに前進と云ふ事に決して戴きたいです』と、慫慂賛成の意を演べますと、佛國の司令官フレ、少將が席を進めました

時に佛國の司令官フレ、少將が進み出でまして『それは、北京に向つて前進を急ぐと云ふ事は、固より同意でありませぬが、奈何せん、我が佛國兵は昨今下痢患者が深山に出来まして、頗る困難を極めて居ります、殊に今の場合、我兵員は日露の兵員に比較しますと、少數ではあるし、至急に前進と決しましたも、怎麼も思ふやうに兵員を出す事が出来ないうです、若し明日からにても前進と定りますと、我兵は怎麼しても五百以上は出せないのであります、併し此處四五日とい遷延して下すつたならば、目下上陸しつゝある兵員

が悉皆集るですから、四千位は確かに出させませう、故に冀くは、數日間前進を延ばして戴きたいのであります』と、斯の如く數日遷延の説を立てますと、露國のメテツセル少將は『小官も矢張り數日間延したいと思ふです、此の炎熱の中を此の疲憊せる兵を以て、強いて進まんとすれば、患者は益々殖えて来て、如何なる状況に陥るやも知れぬです、此處僅かに數日位遷延したとて、それが爲に在北京の人々が屠殺される様な憂は決してあるまいと想像します、且つ現在の聯合軍の兵數を以て長驅して敵の帝都を衝かんとするは餘りに敵を侮り過ぎはせぬかと思ふです且つ今小官が喋々するまでもなく、凡そ敵を撃破して、敵の要地を一個所占領すれば、先づ暫らく其地に兵を休めて之を慰め、然る後更に戦闘準備を充分なして、又た前進すると云ふのは、是が戦術上當然の事であつて、聯合軍は已に北倉を破り、休息する間もなく、楊村に進み、尙ほ此上に一休みもせず急進せしめんとするは餘り兵の使ひ方が酷に陥ると思ふです、小官は古來、戰史を見るに、其様な事は殆んど戰史上の例にないと言つても、敢て過言でありませぬと存じます、餘り兵が可哀想ですから、萬望暫らく休ませたいと思ひます』と言ふ詞に連れて、佛國のフレ、少將も矢張り休息説を繰り返して演べますと、福島少將は之れに反對駁撃して言ふに『成程、それは佛國司令官とメテツセル少將との説の如く、多少兵は疲勞しては居りませう、さりながら此方が疲勞すれば敵も亦疲勞して居るです、吾等敵の方が我兵より無論疲勞が甚だしいです、如何となるに勝ちたる方は其の勝ちたる勇氣に乗じて行くのぢやから、疲れが少ないが負け方は勇氣が沮喪して居るゆゑ、疲勞も又た一層甚だしいのであります、



且つ敵は我が聯合軍が何れの方面から攻来るや知れず、日夜少しも安心が出来なくて、それこそ水鳥の羽音にも驚くと云ふ様な有様になつて居るですから、疲勞困憊は必ず我軍に倍して居るです、其の確證は今も言ふ如く、此の楊村の要地を僅かに一支へしたただけで逃げ出して丁ふたではありませんか、是れ議論よりも證據、敵の疲勞困憊の極に達して居る事は明かです、それでゐるから、此の機に乗じて急進追撃すれば、手に唾して南蔡村、河西務、馬頭、張家灣、通洲を撃破して、備々たる日子を以て北京城を衝く事が出来るです、若し之に反して今纔かに聯合兵の疲勞位のを意として、追撃を緩にしたならば敵は之を幸ひとして、又も途中に幾多の防禦工事を築くから北倉の様な所が所々に出来て、聯合軍が之を破るの困難は、必ず北倉を破るに倍して、骨が折れるに違ひありません、況んや南方から敵の増加する事が分り切つて居るですもの、故に小官は他までも急速前進説を主唱して止みません、又た疲れたくと言はるゝが、我が日本兵は寧しも疲れた様子はありません、兵士の中に一人として疲勞した顔色をする者さへなく、皆擧つて一刻も早く北京に達して、同胞を救はん事を熱望して居ります、

福島司令官は尚語を繼いで言ふに『諸君にして若し兵員が疲勞したる爲め、前進する事が出来ないと思はれるならば、小官は日本兵は疲れないから日本兵だけにても急速前進したいと思ひます、之は敢て吾々日本人が功名心に驅られて言ふのでなく、全く一時も速かに北京龍城者を救援したいと思ふが故であります』と演へますと、米國司令官も之に續いて『小官も日本參謀官の言はるゝ所は、至極道理と思ひますので、我

が米國兵の如きも其様に疲れては居りませぬゆゑ、是非急速に前進したいのであります、今若し些しの疲勞を口實として、此處に滞留し其中に敵をして途中何個所にも防禦工事を築かしむるは、我軍に取つて此上もない不利益であつて、日本參謀官の説かるゝ如く、北倉を陥れて直ちに急速前進したればこそ、此の楊村の要地さへも敵が防禦の準備を爲すの暇なくして、意外に容易く取れたのであります、是を以て觀るも、急速前進に越した事はありません、猶豫して居ると、此處から北京までの途中に北倉の様な所が幾つも出来て、假令今の倍數の兵員を以て之に加ふるも、勿々破るは容易であります』と斯の如くに反覆丁寧に繰返して演へますと、英の司令官は又た此の語に次ぎ『小官も急速前進に賛成同意の事は前演ぶる如くであります、若し飽きでも之に反對をなさるならば、其の反對の國々は一時此處に止まるとして急速前進説を唱ふる國々の兵員だけは、速かに進むとしたら如何です、其方が議が早く決して好都合と思ひますか』と演へましたが、イヤ此の一語には露國司令官も餘程頭腦を刺激されたと思ひました、黙して俯向いて居たさうであります、ヌルと此時の露國參謀長ワスレフスキー少將が進み出でまして『小官は日英米三國將軍の如く、一時も速かに前進せなければならぬと存じます、其の理由は既に日英米三國將軍が演へ盡されて居ますから、今更小官が演ぶるに及びません』と意外にも露國の參謀長だけは日英米の議論に同意をしたさうでありますが、是は如何なるものか、向ふの内情は分りませぬけれども、嚮に天津の會議の時にも矢張此のあ人だけ我が司令官の説に同意を表したと云ふ事は、ヌツと前に演へました天津會議の時を御覽下さる



ど、詳細に分りますが是は何も向ふに内情のあつたのではなく、全くワスレフスキ少将は、急速前進の必要を認めて居て、斯の如く此方の論に同意したものに相違あるまいと云ふ事で、尤も今回の北清事件には始めより不思議な位に日英米の三國が自ら其の議を同し、又た不思議な位に露佛が自ら其の取る所を同一にしたさうで、日英米の同盟は暗に此時分から成立つて居て、決して滿洲問題の爲に、俄かに成立つたのではないと思はれます、黒猿が此の楊村の會議を演ずるに方りまして斯の如く演べますと讀者の中には今日滿洲問題の爲に際し、故らに斯の如く講演するであらうなど、想像さるゝ人がないとは限りませんが、私は決して其様な妄らな事を演ずる者ではありません、今より數年を経ますと、北清事變の歴史が參謀本部で出来上つて發賣になりませんが、それと見比べ下ると、私しの日本の旗風に些しも嘘出鱈目は加へてないと云ふ事が全くお分りになります、餘事に渡つて相済みませんが、何しろ折の如き有様であるから、議長たる露國司令官リツエニエツチ中將も、逆も急速前進説へ反對するも成立たないと思はれたのか、此時漸く口を開きまして、本官も速かに前進論を取る者で、實に今日の場合猶豫は出来ません、だが併し、急速前進するに就ては、大いに諸君に御勘考を願はなければならぬのでありますると演べました、

前同度々演べまする如く、急速前進は全く我軍の主唱する所でありまして、英國米國の司令官が最も之れに同意賛成して呉れましたので遂に此の我が急行前進論が勝を占め、さしも剛復なる露國人をして、同意

せしむるの止むを得ざるに出でしめしたのであります、尤も我が司令官の内決は、露國司令官が怎麼あつても急に前進しないと云ふならば、日本兵は疲れて居ないから、日本一手獨力を以ても急行前進して一日も早く北京救援の目的を達しませうと、恣に言ひ出す心算であつたのです、爾すれば英米は必ず我が説に賛成するに違ひないですから、福島少將の胸中には、會議の席に於て最後の場合は『我が日本は清國と僅々一帯水を隔つるのみの隣國であつて、従つて諸君の國よりもズツと古くから交通を爲して居るのに、今其の清國人の爲に、各國公使及び其他の各國人が苦しめられつゝあるのを見て、兵數が寡少であるの、兵士が疲勞疲たのと言ふて、躊躇しては居られません、怎麼しても疾く進んで、諸外國人を苦境中より救ひ出すのが、我が日本人の盡すべき義務であるから、諸君は疲勞に堪へなければ、當地に御滞留なさい、日本軍は前進して救援の事に盡力します』と、恣に言ふ心算で會議に臨まれたので、それであるから、日頃温厚慎重にして寡言なるに似合す、此日の議論は頗る激語を放つて、縦横自在に辯説したので、黒猿が斯の如く演じますると、如何やら福島將軍を故らに讃て言やうに思召す讀者もあるか知らないが全く是が事實だから止むを得ませぬ、それで此の楊村の會議の状況は、嘗て私しが福島少將に窺はうと致しますると、同少將が言ふには『吾輩自分の事を自分で言ふのは、心に尤めて出来ぬ、他に知つて居る人が幾千もあるから、知りたければ他人から聞いて呉れい』と恣言はれて、御自分には其の大意をもお話しになりません、故に私は櫻田少佐と、其他一二の軍人方から聴いたので、決して私しが故らに事を誇大に演べ立てるのではな



く、皆悉く事實でありますから、萬望其の思召しでも讀みを願ひますが、それに就て、其の當時福島少將が戯れに作られた文句入りの都々逸がありましますから、事の序に一寸演じて、諸君のお慰みに供するばかりでなく、此の都々逸を以て見れば、當時の楊村會議の状況が如何でありしかと云ふ事は眼に見ざるやうで

楊村會議

可厭ならお止しよ、私何處までも、

公使館教はず敵手に落ちば

何の面目わつて世人に見えん

北京抜かずにや止みはせぬ

又以て當時如何に露佛司令官が急行前進論に反對せしか、我が師團長以下將率諸君が、如何に熱心以て急進前進を希望されたるか、十分に知る事を得られるのであります。中には是を讀んで都々逸が巧いか拙いとか評するお人がないとも限りませんが、それを云ふのは野暮でありまして、福島安正君は堂々たる日本帝國の將官にして、國家の干城であるから、都々逸などは日頃作つた事のないのは勿論であります。此のお人にして此の都々逸を作つて戯れられたと云ふのが、如何にも面白いと思ひますから、それで一寸此處に演じて置いたのであります。此の事は軍中の大評判となりまして、兵士衆の中には内々語つて喜んで居る人も

もありました、併し此の都々逸の如くに、斷平たる決心を以て急進前進を唱へたからこそ、露國佛國も同意したのでありませう。

リウエニエツチ中將が急進前進に同意を表しましたのは、逆も其滯留説が多數の容るゝ所とならざる事を見抜きましたゆゑ、それで斯の如く急進論に賛同されたのであります。中將は尙ほ語を次いで言ふに「斯の如くに決しましたる上は、明日一日だけ休息なして、明後日から出發すると云ふ事に決したいと思ひます。諸君の御意見は如何であります」と演べます。福島少將は之にも反對して言ふに「小官は今の場合、一日所か一刻も休息する事は出来ないと思ひます。一日此處に休息すれば、敵に一日だけ防衛工事を爲らしむるの不利があります。故に明日未明から行進したいと思ふのであります」と言ふ詞の終るや否、英米の司令官も進んで共に口を開き「我々も亦明日休息するの必要はないと思ひますから、是非明朝前進と決する事に希望します」と賛成せられました。そこで是も亦福島少將の説が徹りまして、遂に明八月八日楊村出發と云ふ事に決しました。スルト議長リウエニエツチ中將は福島少將に向ひまして「如何でせう、此の楊村へ無論守備隊を残して行かなくてはなりません、何程位も殘留せしめて置いたならば宜しいでせうか、貴官の御意見を一寸窺ひたいです」と尋ねました。福島閣下は「左様ですな」と暫らく考へて居られましたが、應て「まあ一個中隊を残して置いたら充分であらうと思ひますか」と應へました。リウエニエツチ中將は「小官も亦其位で可いと思ひましたでは」と言ひつゝ佛國司令官フレイ少將に向ひまして「今貴官の御聞な



された通りであつて、一個大隊位も當地に守備兵を殘留せしめたいと思ひますから、貴國軍隊に此の守備を任じて戴きたいですが、如何でありませう。先刻貴官の御詞に、患者も多く生じたし、其他にも急速前進し難いと云ふやうな説でしたから、萬望貴官は暫らく此地に残つて守備して貰いたいです」と言ふと、佛の司令官フレイ少將は露時何の答へもなく考へて居ますゆゑ、リウエニエツチ中將は重々ねて「貴國軍が暫らく此地に残つて下されば、後續部隊の來着次第、それと交代して前進するやうにして下すつて差支へありませんから、萬望爾ら願ひたいです」と願ひやうに言ひますので、フレイ少將は「ハイ宜しうムいます、では暫時我軍が守備の任に當りませう。そうして後續部隊が來ましたならば、何れの軍隊にせよ、此處に残つて貰ふて、本隊は前進すると云ふ事に致しませうと速かに承諾しました、リウエニエツチ中將は莞爾と笑を洩しまして「早速の御承諾にて、我々も大いに喜ばしく存じます。サテ諸君が聴きの如く、佛國司令官は當地の守備に任ずる事を御承諾下さいましたので、我々は後顧の憂ひなくして、速かに前進する事が出來やうと思ひます、就ては行軍をするに方りました如何なる序列を以て行りまするか、無論其事を確と決定して置かなくてはなりませんので、萬望諸君は此の行軍序列に就きまして、御銘々の御意見を演べて戴きたいと言はれましたが、誰も直ちに口を開く人がありません、そこで福島少將が矢張真先に意見を演べて言ふに、小官の考へでは、各國聯合の大部隊を一ツに纏めて行進すると言ふ事は、それは無論出來ない事であつて、今喋々するに及びませんが、と言つて又た幾箇にも分つと言ふ事も出來ないと思ふですから、二ツか

若くは三ツ位にも分ちて、そうして行進した方が、急速に進軍が出來て且つ總ての事が互に便利でせうかと思ふですが、諸君の考へは如何でせうか」と斯の如く言はれましたので、是にも亦種々なる議論が沸いて參りました

二百六十八

行軍の序列と云ふ事に就ても種々なる議論が起りまして、随分喧しうムいましたが、福島少將は聯合軍を二分して、兩岸から進むと云ふ事を頻りに唱へましたゆゑ、英國と米國との司令官は又た是にも同意を致しまして、頻りに兩岸から進む事を唱へましたが、是も露國は不同意を言ひまして、種々なる議論が起つて參りましたが、勿々容易に決しません、然れども我が福島少將は確乎として動きませんで、廢慮しても兩岸に分れて前進の議論を唱へます、そこで露國司令官は「では怎麼いふ風に分れて進みますか」と言ふから、福島少將は「日英米の三國軍は、矢張以前の如く右岸を進行し、其他は左岸を前進すると云ふ事にしたら如何です、是非爾ら致さなくてはなりません」と演べると、露國司令官リウエニエツチ中將は、何の答へもなく黙して居りましたが、側に在りたる露のステッセル少將と、アレキシーフ少將とが顔を見合せて、應てリウエニエツチ中將に向ひ、何やら密々耳打を致しました、スルどリウエニエツチ中將は頭きつ、又た口を開きまして「日本參謀官福島少將は飽きでも白河の兩岸に分れて前進せんとの説でありますが、是は多數の説に従ふ心算でありますから、其の思召して、諸君は御意見を十分に演べて戴きたいです」と言ふ詞の終るや



否や、露國の參謀長アレキシフ少將は進み出でまして、白河の兩岸に分れて前進する事でありましたなれば、今度は我が露軍が是非其の右岸を前進する事と致したいです、萬望其の心算で願ひたい」と此の言を聞くより、福島少將は面を正して進み出で「イヤ、それは甚だ困るです、抑も戦争の始めから我が日本は白河の右岸を前進したのであつて、唯小官が始めて天津へ着した時だけ、汽車の便を借りたが爲、僅かに左岸を來りましたが、其後の隊は皆多く其の右岸を來つて、總ての物が右岸の方に準備してあるです、そのみならず我が日本軍の前衛は、已に楊村から北方六哩位の所まで右岸を前進して、其邊一體の地を疾く占領して居るです……」と福島少將の言を半聞きたる時は露國司令官始め人々皆思はず顔を見合せました英米の司令官と雖も是には一驚を喫したやうに思はれます、福島少將は尙語を次いで言ふに「爾云ふ有様であつて見れば、今更日本軍隊は後戻りをして、左岸へ渡ると云ふ事は、逆も出來ないのであつて怎麼しても右岸を進んで居る前衛隊と一ツになつて皆一所に前進しなくてはなりません」と言つたので、人々驚き呆れて居る中に、露國のステツセル少將は福島少將に向ひ、日本軍は何時の間に爾う前進なされたです」と問ふから、福島少將は莞爾と笑つて「それは我が日本軍が當地へ着しましたのは、各國軍隊から比へますると一番后でありましたから、着しますると直ちに前進させたのです、當地では貴官の方がお健きになつて、定めしお疲れであらうかと存ずましたゆゑ、是は成るべく早く我が新手の兵を以て前進せしめ、北方を占領して置いたならば、大いに前進を容易ならしむるから、聯合軍に取つては頗る便利であつて、敵に取つては大なる不

利であると、我が司令官は成るべく急速に前進して、敵をして防禦工事を築造するの暇なからしむる様にせんとすの意より、斯の如く急速に前進せしめたのです、それであるから、明日聯合軍隊が前進するに當りまして、南蔡村までは敵は一兵も居らぬゆゑ大いに樂ですし、爾云ふ有様ですから、我軍は是非とも右岸を前進して、此の前衛に合しなくてはなりません」と始終笑を合みつゝ演べましたので、列席の各國司令官參謀官は、是には餘程驚いたやうであります、

福島少將は尙語を繼いで言ふに「それで我軍が右岸を前進する事となりまして、各國兵殘らず右岸を行くと云ふ事に決しましたならば、長一本の縦隊になつて了ひまして、萬事に就き、太だ不都合極んであらうと考へます、故に右岸左岸と兩方に分れて、進むに越した事はありません」と斯の如くに演べますと、リウエニエツチ中將は福島少將に向ひ「當地から北京まで宿營の地は凡そ何ヶ所位にて、何處くの地でありませうか」と問ひまするゆゑ、福島少將は「左様ですな、先づ南蔡村、河製務、馬頭、張家灣、通洲と、此の五個所でありまするな、それですから、通洲へ行つたから、更に北京を攻むるの評議を爲す事として、兎に角先づ此儘に通洲まで急進したいと思ひます」と言はれますと、是は誰一人として不同意を唱ふる者はありませんが併し此の兩岸を前進すると云ふ事は露國が不同意でありまして、怎麼しても右岸を行かうと言ひま

して動きませんので、是にも種種激論の末に、とう／＼是だけは露國の説を容るゝ事となつて、右岸のみを一本縦隊にて前進すると決しました、そこで議長リウエニエツチ中將は、更に列席の人々に向ひ「爾決しま



した以上は、第一の日は日本軍が前頭となり、二日目は我が露國兵が前頭、三日目は英國軍、四日目が米國軍と、斯くの如く毎日交替して前進すると決まませう』と憚う先頭を日々交代して進まうと云ふ説を提出しました。是は露國司令官が勿々抜目ないのでありまして、楊村から先は宿營地が五個所とすると、第一日前進の日、則ち八日が南蔡村宿營にて、此日は日本が先頭となり、其次の日は露軍が先頭にて、則ち九日は河西務に宿營し、十日は英が先頭にて馬頭に十一日は米軍が先頭にて張家灣に宿營し、十二日は又た日本軍先頭となりて通洲に宿營し、通洲の次はいよいよ北京攻撃であるから、露軍が先頭の順番になるのでまい。故に露國司令官は早くも前頭兵の毎日順番交代説を唱へまして故意に日本軍を第一日の先頭に立て、露國軍の其の次に立ち、そうして置いて、いよいよ北京攻撃の日には、露軍が先頭となつて、第一番に北京の城内に進入せんとすの計畫でいます所が我福島少將は、早くも彼が狡猾手段を覺りましたゆゑ、心の中には又た例の狡猾手段を用ゐんとして居るわいと思ひながらも、満面に笑を洩らしつゝ、徐かに口を開きまして、議長のお説に由りますると、前頭は毎日交代順番にて、各國軍隊が交るゝ其の任に當らんとのお詞であります。成程それは一寸承はると、一應御道理で、眞に不公平のない至極宜しいお説のやうであります。が深く慮かつて見ますると、其の交代前進と云ふ事が、勿々容易に行はれるものでありません、尤もそれは一ヶ國か二ヶ國位の軍隊なれば、ソリヤモウ何の混雜もなく行れませうが、四ヶ國五ヶ國の軍隊となりますると、第一各國各自言語を異にして居て、將率と將率との間に非常な不都合を生じて來まするし、爾かと云ふて、中隊に殘らず通辯を附けると云ふ事は、それは逆も互に出来るものではなし、此の言語の通じない所から、必ずや言ふべからざる不都合を生じ、繁雜を來たして、それが爲に行軍の日取が意外に後れて了ふて、豫定通りに行進が出来なくなる事があらうと思ふです。第二は軍隊の組織が、各國多少違ふて居まするし、且糧食の材料が違ふので、是等に就き宿營する上に於ても、言ふべからざる不都合を醸すので、此等の爲に逆も交代前進と云ふ事は言ふべくして行ふべからざる事に立至るぢやらうと考へますので、實際に行へない事を行はんとして蹉跌を來たしてから又た改むるより、寧ろ初めから、其様な事は行り始めないに越した事はないと思ひます』と今度は福島少將些し議長たるリウエニエツチ中將に向つて議論を仕掛ける體にて、鋭く舌鋒を向けました。

リウエニエツチ中將は我が福島少將の言を聞いて、暫時考へて居られました。聽て面を正しまして言ふに『福島少將のお説は、成程一理ないではありませんが、併し先頭は特權で持切ると云ふ事は、道理上に於てあるべからざる事です。福島君のお説の通りにすれば、先頭は日本軍隊で持切にでもしやうと云ふ様な御口氣であるが日本軍隊が特權を以て先陣を持切る理由がないと思ひます』と憚う言ひ出したのが、サア又た種々なる議論が起つて來て容易に結局が就きません。時に福島少將は憤然として聲を張り揚げ『諸君』と高く一聲呼んだので、人々の視線は皆福島少將の方に集中して列席の人々漸く口を閉ぢたので、席は俄かに靜肅になりました。福島少將は之を見るより透さず『諸君は前刻から種々なるお説がありましてイヤ特權である



とか、イヤ不特權であるとか言はれますが、今の場合小官は其様な事を言ふて居るのは、實に意了ん事だ  
 失敬ながら小兒の戯れに等しいと思ひます、堂々たる各國司令官の會議に、其様な瑣細な事を論じて、時間  
 を消費するのは、實に馬鹿／＼しき事にて、天下後世の物笑となりませう、我々は眼の前に重大なる任務を  
 控へて居ながら、此様な些末な事に徒らに時を遷延せしめては、相互に各自の仕へ奉る 陛下、及び國民に  
 對しても申譯がありません、相互に瑣細な事は譲り合つて、吾々の大任務を一時も早く果すのが、吾々の職  
 責です、唯今議長は日本軍を以て先頭を持切ると云ふ特權はないと云ふ仰せでありましたか、決して我日本  
 軍で先頭を持切ると、小官は言張るのではありません、唯今の場合、我軍が南榮村までも前進して居るので  
 あるから我軍を前衛隊として通州まで行きたいと言のでありますが通州まで入進めば通州に到着して後又更  
 に北京を攻撃するの畫策は、如何やうにも評議の上、決定する事が出来るのでありまして、今茲で何も北京  
 を攻撃する其の行軍の序列を定むるのでは、決してありません、議長のお説の如く通州へ進みまで行軍序列  
 を毎日變更したりなどしましたならば、それこそ弊害百出して、殆んど矯正すべからざるの状況に陥る事は  
 識者を笑はずして知れ切つて居るです、それを知りつゝ斯の如き事をするのは、餘り馬鹿／＼しいと思ふか  
 ら、我が日本軍を以て先頭として、通州まで行進させようと言ふのであります、小官等は決して功名心に驅  
 られて、妄りに先頭を希望する者ではありません」と、福島少將は理非明白に演へましたので、遺の傲慢な  
 る露國司令官リウエニエツチ中將も唯賦して下俯向いて了ひました、其他の司令官も誰一人口を開く人なく

暫時は席中靜肅になりましたる事、恰も人無きが如くでふいふましたが、稍ありまして其の司令官は徐ろに開  
 口し「先刻から福島少將のお説を拜聴しまするに、一々其の御論は肯綮に當つて居られました、寔に一點の  
 間然すべき所がありません、依つて小官は福島少將のお説に同意して、兎に角通州までは日本軍を以て先頭  
 と爲すが、當然と思ひます」と斯の如く述べますると米國の司令官も之に次いで「小官も矢張之に同意しま  
 す、北京攻撃の事は兎に角に、先づ通州までは、現在當地より三里先に出て居らるゝものなれば、日本軍を  
 以て先頭となし、又た日々交代などして云ふべからざる不都合を招くより其儘に通州まで前進するを得策に  
 思ひます」と賛成しましたので、そこで露國司令官リウエニエツチ中將も、據なく之に同意を表明したが  
 併し尙ほ言ふべき事ありとて云ひ出ししました、  
 露國司令官リウエニエツチ中將は、一同に向ひまして、然らば多數の御論に従ひまして、日本軍を以て通州  
 までの先頭とする事は同意しましたが、就ては一言言ふべき事があります、それは何であるかと云ふと、日  
 本軍を以て通州までの先頭としたならば、我が露軍を以て其次と爲さん事に定むることでありませう、之に對  
 して各司令官の御同意なき以上は、露國は日本の先頭も亦た飽までも不服であります」と滿面赤を漲ぎて  
 演へました、ヌルと其の司令官は蕪爾笑を含みました、露國司令官の御説は、寔に御道理であります、我々  
 は唯北京在留の各國公使以下を救ふと云ふのが目的であつて、他に決して目途とする所はありません、故に  
 先頭争ひなどは好ましからぬ事ですから、日本軍隊が先頭に立つて、其次が露國軍であらうが、米國軍であ



らうが、將た我が英軍にせい、決して其様な事は意に介しません。唯最う一日も早く北京救援の目的を達したいのが大希望であります」と演べました。そこで露國司令官は米國司令官に向つて「如何です、御不服はありませんか」と言ふと、米の司令官も「別に不服はありません」と應へたので、茲に於てリウニエツチ中將は「然らば日本軍を以て先頭と爲し、其次が露國軍、其次即ち三番目が英軍、四番目が米國軍と斯の如き順序を以て前進する事を致しませう」と演べました。スルと米國の司令官チャップマン少將は、些しく面色を變じまして「シテ見ますると、我が米軍は毎日一番後から出發しなくてはなりませんゆゑ、日々に恰ど熱い眞盛りを行軍せなければなりません。我が兵士の困難を察し下さい可愛想です」と言つたさうですが、成程是は米國司令官が爾云ふのも無理はありません。四番目の一番後から出發すると、怎麼しても十時頃の出發にありまして、一時二時の頃行軍しなくてはならない、恰ど炎熱の眞盛りであるから、兵士の困難は一通りでムいけません。故に米國司令官が部下兵士を可哀想に思はれて斯の如く些し不服を唱へたのです。スルと露國司令官は米國司令官に向ひ、恰も思ひるが如き口氣にて「貴官の軍隊は他國に比して少數ぢやから、まあ御幸抱なさい」と慫云つたらば、米國司令官は面を背向けて、苦笑ひして居たさうでムいまして、此事は後で楊村會議一ツの笑ひ話になつて居ります。サテ露國司令官は斯くの如く決しました時、又た一同に向ひまして「いよく行軍の序列も決定しまして、まあ互にお目出度うムいしますが、それに就て大行李輜重は、行軍序列と同じ様な順序を以て、戰團兵の直ぐ後背へ附したいと思ひますが、其の思

召してお行り下さい」と言ひますと、今度は福島少將が「是は無論爾しなくてはなるまいと思ひます。就ては先頭隊は毎日午前四時に宿營地を出發して、五十分づゝ歩行しては、一度休息する事に致したいと思ふです。其の休息の時間は十分づゝとして、歩行時間と休息時間とを合して、一時間づゝとしたならば宜しからんと考へます」と演べましたので、一同是も異議なく決定致しました。時にリウニエツチ中將は「騎兵の方は怎麼云ふ事に致しませうか、露英日の騎兵を合して一隊となし、獨立騎兵隊として運動せしむる事に致したいですな、それで此の聯騎獨立隊の司令官は、英國の聯隊長を以て是に當て、歩兵隊よりは半日若くは一日位の前方へ出して、運動せしむるのが宜しからんと考へます」と演べました。英國の司令官は第一番に是に賛成しますと、我が福島少將は、又た是にも大反對論を唱へ出しました。露國司令官リウニエツチ中將が、日英露の騎兵隊を合して獨立騎兵隊と爲し、是が指揮官を英國の聯隊長に任ぜんとしたのは、其の底意たるや、英國軍の歡心を買はんとするに在る事は火を觀るよりも明瞭であつて、實に片腹痛き事でありますが、英國の司令官は自國の聯隊長を以て指揮官とするは、自國の名譽であるから直ちに同意賛成するは理の當然でムいす。故に英の司令官は満面に笑を洩しつゝ、「議長のお説の如く、露日英の三國騎兵隊を合して、獨立運動をせしむるは、最も小官の同意を表します」と斯の如く演べましたが、福島少將は之を聞くと、憤然として席を進めました。何故に福島安正君が憤然せられたかと云ふに日本の騎兵聯隊長森岡大佐と、英國の騎兵聯隊長とは、其の年齡と云ひ進級の前後と云ひ、我が森岡大佐の



方が古参であつて、怎麼しても森岡大佐を以て指揮官としなくてはならぬ道理で云います。それでゐるのに、露國司令官が議長の權を以て、妄りに我が聯隊長を英の聯隊長の指揮下に屬せしめんとします。それで福島少將は憤慨したので云います。「それは不可んです。何故ならば日本の騎兵聯隊長は、英國の騎兵聯隊長よりも古参であつて、年齢も亦た二ツ三ツ長じて居ます。それであるのに、英の聯隊長を以て指揮官とする云ふ法はあつて思ふです。年長にして古参の人を指して、後進なる年若の人を指揮官とする様な悪慣例は、決して残すべからざる事と思ひます」と言ひますと、英の司令官は「それは一日、日本の聯隊長を指揮官としたならば、一日は英の聯隊長を指揮官とするやうに、騎兵だけは指揮官を隔日と定めましたら、如何です」と言ひ出したから福島少將は顔色を變じて聲を厲まし「イヤ、軍隊に其様な事は決してありません。苟も世界列國軍隊が聯合しての戦闘であつて見れば、後世にまで好慣例を残して置かなくてはなりません。若し道理に背き法に違ふやうな悪慣例を残したならば、後世の物笑ひとなるばかりか、世界の軍隊の爲に甚だ宜しくありませんから、諸君は萬望此事に、熟々注意されて「一事を雖も、苟も決せぬやうに、充分考への上に發議し、さうして十分に理のある所に基いて、決して欲せぬ」と演べられたので、米國の司令官は、最も之に同意を表して言ふに「福島少將の言はるゝ所は、至極有理であつて古参の人を棄置して、新参若輩の人が其上に立つと云ふ様な悪慣例を軍隊に残しては、甚だ宜しくありませんゆゑ、之は怎麼しても日本の騎兵聯隊長を以て、指揮官に任ずるのが宜しう云ひませう」と言はれました。そこで英

國司令官も一歩を譲り、遂に日本の騎兵聯隊長森岡大佐(正元)が獨立騎兵の總指揮官に任ずる事に決しました。時に福島少將は又た發言して言ふに「斯の如く決しました以上は言ふまでもなく明早朝から騎兵を先頭に立てなければなりません。夜に入つてからは、其の騎兵を前哨線内に返へすことにした方が宜しからうと思ふですな。それがないと給養其他の事、總て不便であるから、是非ともそうしたいと思ひます」と演べました。是は無論各司令官の間に何の異議もなく、皆同意して直ちに決定しました。是は怎麼云ふ理由かと申しますれば、私が演べるまでもなく、前進するには騎兵を先に立て、敵を搜り行くのですが、夜に入つてからは其の騎兵を歩兵の一番先頭になつて居る其の此方へ返して置かないと、危険ですから、それで前哨内へ入れると云ふので云ひます。

【百六十九】

前回に演べましたのが即ち楊村の會議で云ひまして、此の評議の終ると同時に時計を合せましたが、是は矢張議長たるリニエツチ中將の時計を合せて、さうして出發時間の違はないやうにしたのでありました。此の會議は午前十時からして午後一時四十分まで即ち三時間と四十分の會議であるから、勿々に長會議と云つて過言でありません。サテ福島少將は會議の終るや否、急いで日本司令部に立歸りまして、師團長に向ひ詳細に其の模様を話されましたので、山口師團長は大いに喜びまして「それは甘く行つて来たねイヤ彼の剛愎な男を爾屈服させるには随分骨が折れたらう、吾輩察するアハツ、ハ、ハ、ハ、」  
「ハイ勿々一時は激論で



した、併しまゝ幸ひにして英米が此方へ始終賛同して呉れたので、怎麼やら想やら此方の言ふ通りになつて宜しうムいました』山口は爾でもあらうが君の一方ならぬ盡力に由るのである……そこで勿論此勢ひに乗じて敵の踵へ附いて行くやうに追撃すれば、それこそ破竹の勢力であるから、通洲までは必ず容易に前進が出来るぢやあらう。途中に敵が防禦工事を施すの暇はなからうと思はるゝが、唯茲に一ツ困る事は云ふと糧食ぢやなア』福島は左やうです、是には實に困り居るです、まア一ツ成るべく急速に輸送する様に命じてはなりませんです』と御評議になりましたが是には流石の山口師團長も福島少將も餘程困却されて居らるのでムいます何故なれば前に屢々演べてもありません如く、始めの計畫は北倉を占領したら塚本將軍の一部隊だけが楊村に敵を追ふて進撃し、他は一先づ天津に歸つて休息し、塚本將軍の隊だけは楊村に止まつて、そうして此處に數日滞在して後方から糧食を澤山に運搬し、充分準備の出来てから北方に向つて前進しやうと愚云ふ計畫であつたのでムいます、所が北倉の戦争が既に済んだる如きの有様であつて、我軍は勢に乗じてズン／＼進み、いよいよ楊村占領の時は英米は先へ進んで楊村を攻撃し始めたので、我軍も勢以半部隊を天津へ引返すなど云ふ事は出来なくなつて、遂には悉皆楊村へ進んで見ると、露國軍は英米軍に骨を折らせて置きながら、殆んど英米軍をダシに使つた様な有様にて、露兵が第一番に楊村内に入つて要所々々を占領して了つたので、我軍もいよいよ是は漫然して居られないと云ふので、英米露へ交渉なしに出し抜いて先へ南蔡村に兵を進め、諸外國軍が知らない中に南蔡村を占領して了ふたと云ふ様な有様ゆる糧食

の計畫が未だ立たないのでムいます、故に山口師團長福島少將石橋師團參謀長始め司令部の人々は、此事に就いて頗る御心配をなさいまして、種々に評議を廻らされたのでありますが、福島少將が言はるゝには、何でも通洲まで行けば彼處には米庫があるのですから、此の米庫を占領して丁へは最う糧食の心配はないのですが、それまでの所今の場合憂ふるのは敵より速る我隊の糧食の缺乏に在るのです、夫れ故通洲までは怎麼しても日本軍が先頭に立つて通洲へ第一番に這入り、此の米倉を占領するのが何よりの急務であつて、小官が今日の會議に於て通洲までの先頭を他々でも唱へて頑として動かなかつたのは、此の米倉を是非日本の手に占領したいと思ふたるが故であります、我が司令部に於ては、怎麼しても明八日午前四時には楊村を出發して、北進しなくてはなりません、そこで種々御評議になりましたが、山口師團長は「先づそれでは、後方に在る兵站監督部長に、船を早速蒐めて、糧食を晝夜兼行で運輸するやうに命令せい」石橋鐵道隊で車を持つて居ますから、此の車を輸卒の方へ貸す様に言ふて遣りまして、陸は陸から運輸せしめる事に致しましたならば、大に便利ぢやあらうと考へますが』山口「ム、爾ぢや、さうして電信をも成るべく早く此方へ延長せしめなくてはならぬ電信隊に爾言ふて遣れ」と命じて居ります所へ、恰も好し電信隊から報告が参りましたが、それは何と云ふ報告かと云ふに、電信隊は此の楊村から約二里ばかり南方の馬家口と云ふ所へ今到着したと云ふ報告でムいます、山口師團長を始め、司令部員は此の報告書を讀んで、何の位喜んだか知れませんが、山口「是は意外に早く電信隊が来た、此様な場



合、電信隊が爾近くまで来れば何より幸ひぢや、では誰かを遣つて……、豊田大尉「豊田」ハイ……、怎麼も意外な幸ひでムいすす」山口「爾ぢや、君一ツ、馬家口とか云ふ其の電信隊の来て居る所まで行つてなア、電信で兵站監督部長に早速船を揃めて、晝夜兼行で糧食を運ぶやうに言ふて遣つて呉れい」豊田「ハイ承知しました、直ちに参ります」山口「ム、成るべく急行して、今の場合最う一分間も躊躇しては居られん、それから鐵道隊の持つて居る車を残らず出さして、陸は其の車で運搬させい、さうして電信も成るべく速かに延長せしむるやうに、之も晝夜兼行でやれツと云へ」と詳細に命じましたので、豊田参謀は委細領承して、直ちに準備なし、騎兵數騎を従へて出發し、馬を急がせて参ります、幸ひにして月が出でましたので、半月ではありませんが、道は怎麼やら悠々やら解るのでムいすす、豊田参謀は時々馬を駐めては、回顧つて傳騎に向ひ「半月にせい、此の月のあるので、大層に助かるなア」傳騎「左様でムいすす、此の月がなからうものなら、勿々不案内の道路ですから、容易に進行が出来るものぢやありません」豊田「ム、併し爾等も八方に注意しつゝ進まんぞ不可んぞ、何處に敵の殘兵が居ないとは限らぬから、それに義和團の奴原は到る處に散在して居るらしいからな」などと話しつゝ進んで参りますと、其の中に空は何時となくにドンヨリと響つて参りまして、今まで河を渡りたる月影もいつしか雲に吞まれ忽ち眞暗になつて了ひましたので、サア其の不便なる事一通りでムいすせん、されども豊田参謀は口へも少しも出しません「最う近いぞ」馬家口までは幾干もないぞ」ア、彼處へ見える彼の燈火のチラ／＼する所、彼處が馬家口に違ひないぞ」などと傳騎を勵

ましたつゝ、行進致しますが、へよ／＼道は暗くなりまして、益々危険になつて参りましたから、馬から降りて歩行致しましたが、漸く其夜の夜半頃に、馬家口に到着致しまして、電信隊の隊長に面會し、山口師團長の命を傳へまして、さうして先づ兵站監督部長に向つて、成るべく速かに船を集めて糧食の運搬を爲すやう、目下の所糧食の缺乏と云ふ事が、一番の心配であると云ふ事と、鐵道隊の車を借りて、陸をも運搬せしめいと云ふ事とを命じました。ヌルと問もなく兵站監督部長から「宜しい、承知した、晝夜兼行で従事しますから、御安心下さい」と云ふ返電が参りましたので、そこで此方は少し安心したが、電信隊の方も師團長の命を豊田参謀から聞くと等しく、直ちに「サア行れツ」と云ふので、電信の架設に従事しましたが、併し此の電信隊の人々も上陸以來、殆んど晝夜兼行、一寸の休間なく任務に従事して居るのだから、身體は疲れて了つて、常ならば逆も動けないのですが、慫云ふ場合ゆゑ、互に勵まし合つて従事します。前に演ぶる如く、八月八日午前四時に楊村出發と決定しましたので、七日の夜半に、豊田参謀を馬家口へ遣ると、殆んど同時に南紫村に出て居られます小原聯隊長の許へ傳騎をお遣りになります、是は石橋参謀長が騎兵二人を呼びまして「爾等、是から直ちに此の訓令書を持つて南紫に行き、小原聯隊長に渡して來い」と命じましたので、二名の傳騎は領承して直ちに乗り出しましたが、楊村から南紫村までは、日本里數にして約三里です、道路は白河に沿つて居る北京街道でありまして、悪い道ではありませぬ、夜中とは云へ、最早や此邊は決して危険のない事は分り切つて居ますから、二名の騎兵は勇ましく馬を驅つて、途中何事もな



く、其夜の一時頃に南蔡村に着しますと、市街の入口に歩哨が立ちて居りますゆゑ、傳騎は是に聲をかけまして「聯隊長殿は、何處に御在ぢやね」と聞くと、歩哨は「聯隊長殿は、此の市街の真中の大きな家屋に被在や」と告げましたから、傳騎は直ちに市街の真中に到りますと、右手の長家門のある大いなる家屋が、小原聯隊長殿の聯隊本部になつて居りますゆゑ、傳騎は長家門の所にて馬を降り、シツ／＼本部の室前に進んで一禮なし「聯隊長殿……師團長閣下から御訓令でムいます」大佐「ム、爾か」と言ひつゝ、聯隊長は徐ろに椅子を離れて起立しました傳騎はポケットより一葉の命令書を取出して、是を聯隊長へ直接手渡し致しますと、大佐は取つて見ると、いよく明日から前進と決定して我が軍が先頭に立つ事になつた、師團本部は明八日の午前四時に、楊村を出發して南蔡村へ宿營する豫定ぢやから、其の心算で、其の隊は午前六時に南蔡村を出て、前進するやう、併し少し前へ進めば、それにて宜らしい云々と云ふ趣意の命令書でムいます、小原大佐は之を讀み終つて「宜しい、承知しましたと復命せし」傳騎「ハイ謹領ました」大佐「別に師團長閣下へ報告すべき事はない……イヤ副官、師團長閣下の宿舎は宜しいか」「左様です、今其の事をお話し致しますやうと思ふて居た所でムいます、まア師團長閣下の宿舎に當てべき家と云ふたら、此處ぢやらうと思ふですが、併し閣下は家屋の中を蒸暑いと被仰つて北倉でも船の中へも寝みになつた位ですから、家の中より寧ろ何處か涼しい風當りの好い所の方が、ハイ、外の方が宜しいと思ふですが」大佐「ム、それも爾ぢやなア、併しマア兎に角此處を司令部に當て置かれい」と言つて、種々お話しになりましたが、其中に

傳騎を返しまして、小原聯隊長は専ら前進の準備に取懸りました、ヌルと此時、我兵は三四人にて一人の大兵なる男を生捕にして、聯隊本部へ連れて参りまして、門口の所に縛し置き、聯隊長の前に出でまして「聯隊長殿、捕虜を連れて参りましたが、此奴は實に不埒至極な奴でムいます」大佐「ム、何か書でも加へたのか」「今其處へ己れ放火せんとする所を見附けましたゆゑ、直ちに縛して引立つて参りましたのでムいます」大佐「ム、爾か、通譯官を呼んで調べさせて見い」と直ちに通譯を呼びましたので、それへ参つて此奴を取調へると、意外なる事を言ひ出しました、それは何であるかと云ふと、直隸總督裕祿の自殺一件であつて全く裕祿は此の南蔡村に於て自殺したのでムいます、戦争當時の新聞や又は渡清したる人々の話しを聞くと、裕祿は北倉の戦争破れたる時、鴉片を服用して死したりと云ふ噂が専ら高かつたのでムいましたが、其實は此の捕虜の口から出でましたのが確説ですから、次回に詳細演ぶる事と致しませう。

直隸總督裕祿は、北倉の戦の破れて後、楊村を経て南蔡村まで退きましたるが、同所の寺院に入つて休息したる時、北京から早馬の勅使が参りまして裕祿に面し、勅書を渡しましたさうです、裕祿は之を取つて拜讀すれば、裕祿が直隸總督として、天津城に在りて聯合軍と戦ひ、敗戦したるをも、尙ほ勝戦の如くに表聞し、天津城陥るに及んで、始めて其の眞想を報告奏上し、次いで北倉の陥るに至りて、到底外國聯合軍に敵すべからざる理由を詳細に認めて、上奏に及びましたる其の罪を責めたる勅書であります、そこで道の裕祿も天を仰いで歎息なし「吾れ先に戦敗の實情を具申せざりしは、我が朝廷の勇氣を挫くまじと思ふがゆゑな



り、圖らざりき、今に追んで是が爲に罪を得んとは、嗚呼之れ天我れを亡すなり、戦ひの罪にあらざるあり」と歎息する事是れ久うしきして、聽て一書を認めて、是を日頃側に侍する韋元且と云ふ者に渡し「汝之を持つて、我が家に歸り、妻子に手渡しすべし」と命じましたゆゑ、韋元且は何心なく領承して、此書を携へ歸つて、是を裕祿の妻子に手渡ししましたから裕祿の妻は披き見ると、豈圖らんや、永訣の書でムいす、妻は之を見て霎時は涙に暮れて居りましたが、流石に支那婦人と雖も、直隸總督をも勤めたる裕祿の妻たる婦人だけありまして、直ちに其日自殺して了ひましたさうです、韋元且は泣く／＼南葉村に歸つて見れば、最早や裕祿も南葉村の寺院内にて短銃を以て自殺して了つて居りますが、其の自殺の模様を聞いて見ると、勿々感心したもので、湯を沸かして之に入り、身體を能く洗ひ清めまして、頭髮を撫でつけ、僧徒を呼んで讀經をなさしめたる上、香を焚き、一室の中央に床を後背にして座し、從容自若、短銃を以て前額を貫きし儘、後ろに仆れて深く死したさうでムいす、日頃裕祿に恩を蒙りましたる者二人まで、之に殉死を遂げたご云ふは、淺き薄情なる世の中には、珍らしい話ですが是を以て見るも、裕祿が平常其の部下に、如何に目を掛けて遣つたかと云ふ事は、明かです、サテ韋元且は矢張裕祿の爲には、一方ならぬ恩徳を蒙つて居りました、裕祿死したる上は、最早や吾れに目を懸けて呉れる人もなく、此身も戦敗の生残り者、人に面を合するも耻かしく、恩人裕祿の後を追ふて殉死せんかと思つたが、唯死するのも残念、切めて敵の隊長一人なりとも討取つて死なんものと思ひ立つたが、容易に敵の隊長の居所に近附く事は出来なから、そ

で放火したならば、幸ひに今夜は風が強いから、忽ち大火となつて騒ぎ出すに違ひない、其の騒ぎに紛れて、隊長を討取らんと斯く思ひ立ちて放火せんとし、武運拙く日本兵の爲に見附けられたのであると云ふ事を、些しも悪法ずに深く申し立て「サア、此上は速かに殺して呉れるやう、敵の爲に捕虜となり、助命を乞ふやうな者ではない、斯の如く毫も包み隠さず自状したのだから、最早や決して言ふ事はなす」と言つて、其他の事を種々に尋問しましたが、如何に言ひませんで、唯知らぬ／＼殺せ／＼と言ひ張るのみでムいす、そこで此様な者を助けて置いた所が仕方がなし、殊に捕虜として置くには、人を附け置かなくてはならず、厄介です、爾かと云つて、放火までせんとした者を放免して遣ると云ふ事は、無論出来ませぬゆゑ、小原大佐は部下の兵士に命じて殺さして了ひましたが、併し此の捕虜韋元且の口から始めて直隸總督裕祿なる者が、此の南葉村の寺院に於て、自殺を遂げたと云ふ事と、裕祿の妻なる婦人までが自害した事が判然しました、北清の戦史に大いに花を咲かせて居ります、

(百七十)

却説此方は、楊村に在りては山口師團長始め、司令部員は種々御評議の上にて、左の如く行軍の序列を定め

- 右側隊 歩兵二十一聯隊の第一大隊、工兵一個小隊
- 左側隊 歩兵四十二聯隊全部、砲兵一個中隊



此の左側隊と云ふのは、本道より約一里ばかりも西方、即ち本道の左の方を前進するのであつて、又右側隊と云ふのは白河の東方に渡りまして、其の左岸を警戒しつゝ、行進致します。さうして師團本隊は本道を前進する事に決しました、そこで言ふまでもなく、騎兵を先頭に立てるのでありますから、師團長は斯の如く決すると共に、直ちに騎兵隊長森岡大佐を呼びに遣りますと、應て参りましたから、其の趣きを告げ「斯の如く福島の盡力で、先づ我が軍隊が先頭と決したるのみならず、騎兵も君が英露の騎兵までも指揮することになつたのは、實に日本の名譽である、それで本隊の先頭は午前四時に出發するから、騎兵は三時半に出行かれら」と命じました、森岡大佐は莞爾笑つて「それは何より名譽な事でありませぬ。宜しう申します、其の心算で一ツ確平行りませう、では英露の騎兵は此方へ集合する筈になつて居るでせうな」山口「爾ぢや、此方へ集合する事になつて居る」と言ひまするので、森岡大佐は領承して、聯隊本部に歸りまして、それら準備を命じましたが、騎兵の將校等は此事を聞くや大に喜びまして、口々に噂とりくで申します「我が聯隊長殿が、英露の騎兵をも指揮する事になつたさうぢやせ」爾か、それは萬歳、英の聯隊長の指揮を受けるなればまだしもぢやが、露國の指揮を受けるやうになりはせぬかと思つて、吾輩などは頗りに心配して居たが、爾云ふ事になれば、さア安心ぢやなア併し能く向ふが承知したね」何でも餘程激論があつたさうぢや」と話しつゝ、出發時間の来るを待つて居りますと、其の中に逐漸に時間は経過して、最早や三時になりましたが、英露の騎兵は来る様子がありません、森岡聯隊長は副官に向ひまして「怎麼ぢや、英露は

未だ来る様子が無いのう、最早三時過ぎたぢやないか」副官「左様で申します、最早直きに参るで申させう」  
 『又た拔懸けるやうな事はないかな』副官「豈夫其様な事もあつたと思ふですが」  
 『と思ふが、併し露人は分らぬでなア』など、話して居る所へ、司令部から傳令が参りまして、森岡大佐に命令書を渡しましたから、見ると「露國は輜重が續かぬから、約束通りの時間に出發出来ぬるに由つて、先へ出發して呉れい」と云ふて来た、其の心算で英國騎兵と集合したならば、露の騎兵には構はずに前に出發せいと恣意の訓令で申します。副官「露國の騎兵は輜重が間に合はぬから、後れると言ふて寄越したさうぢや」  
 『ア、左やうですか、では英が来たら』副官「先へ出發しやう、それにしても英は最早来るさうなものぢやね」  
 『最早来なくてはなりません、矢張英も後れますか』副官「爾ぢやなア、後れるなら後れるで、何とか云ふて寄越さんければならぬがのう……イヤ最早三時三十分ぢや……ム、構はん、サア出發せい」  
 『宜しう申しますか』副官「構はん、出發時間が来て、それで集合しないのは、向ふが悪いのぢや」と、茲に於て直ちに出發の命令は下りました、故に日英露三國聯合の獨立騎兵隊の心算であつたのが、圖らざりき、日本一國の獨立騎兵隊となつて、整々肅々順序正しく出發を始めましたが、何しろ三時半で申しますから、未だ薄暗くして中天に弦月は懸り、曉星は微かに輝いて、涼風肌に透り軍容自から勇ましくして、馬蹄の響々たるは四方に響き渡ります、騎兵隊にては、第三中隊の一小隊が前衛隊となりて前進致しましたが、馬庄と云ふ所を通過して、南薬村に



入るの豫定でいますから、先づ下士斥候を本道へ出しました、それから左側へも斥候を出さなくてはなりません、是は聯隊長が矢張り下士を呼びまして「備は部下二騎を従へて、左側に斥候に行け、南禁村の西の方つて、約三里位の所に、酒村店と云ふ所があるンラ、此の地圖を見つて」と言つて、地圖を示して「是ぢや、此の方向を能く偵察して、南禁村に來い、總て南禁村で本隊へ合するやうに、其の心算で行け」と命じました、下士は領承して直ちに部下二騎を従へ、左側の方へ馬を馳せて参ります、斯して森岡大佐は、本道を前進致しましたが、途中何事もなくして午前六時に南禁村に着しました、此の前日から當地を占領して居る小原聯隊長も、已に出發の準備をしつゝ居りまして、今將に其の先頭は行進を始めんとする所でありましたので、森岡聯隊長は「ヤア、小原君、今出發かね」小原「ヤ、御苦勞です、大層早かつたね」と互に挨拶がありました、森岡大佐は「當地は君の隊が早く進んだので、さしたる抵抗もなく取れて、幸ひぢやつたが、是から先は怎麼ぢやね、敵の様子は」小原「ナニ、吾輩の考へでは、其様に頑強に抵抗はしないと思はるね、通州までは……通州へ行つたらば、些しは抵抗を試みるかも知れんが、其の此方では防禦しな」と考へるね、それに敵は最う防禦する勇氣はありはせんラ」森岡「併し、通州の此方に張家灣と云ふ所があるが、彼處は勿く要害の好い、敵に取つては極めて地の利を占めて居る所ださうぢやから、防ぐかも知れんテ」大佐「爾さ、張家灣では些しは抵抗するかも知れぬ、前年英佛の同盟軍が攻込んだ時、清兵の逆襲に遭ふて、幸ひ目にやられた所ぢやからね」大佐「それぢやから、英圖軍などは天津に居る時から、張家灣では必ず

激戦があるに違ひないと言ふて居たやうぢや」などと、兩大佐は頻りにいろ／＼話して居られますが、酒村店方向に出しました斥候から、何の音沙汰もありませんから、森岡騎兵聯隊長は、副官に向ひまして「酒村店方向に遣つた斥候が、怎麼も心懸りぢやから、一ツ將校斥候を彼の方面へ出して見やうと思ふ、其の心算で」副官「ハイ、承知しました、誰を遣はしますか」森岡「爾ぢやなア、誰を遣つたものかなア……」と……ム、森元少尉を遣らう、森元を呼んで呉れい」副官「ハイ、承知しました……」オ、從卒、森元少尉を呼んで來い、ム、聯隊長殿が御用ぢやから、直ぐに聯隊本部へ來られ、と爾言ふて「と命じましたので、從卒は直ちに馳せ行きます、總て騎兵少尉森元重雄氏は、聯隊本部へ出頭致しまして、其の入口にて一禮致します、森岡聯隊長は「森元少尉か、此處へ來られい……今から斥候に行つて貰はんければならぬ、知つて居らるゝ如く己に酒村店の方向へは下士斥候が出してはゐるが、今以て何の報告もないので、至つて心配して居る、それで君は部下一分隊を率ゐて、此の方向へ行つて、偵察を遂げられ、ンラ此處ぢや、ねえ、此邊總て一體の地……此處に武清縣と云ふ所がある、此邊をも能く偵察せんければならぬ」と命じつゝ、地圖を示します、森元少尉は命令を聞き、地圖を熟視しまして少尉「ハイ承知しました、では是から直ぐに出發する事に致します」と領承して本隊に歸り、部下の兵七名を撰抜して是を従へ、南禁村を出發して、只管西北方へ馬を馳せて行進致しました、

却說前衛隊なる小原大佐の率ゆる歩兵四十一聯隊は、午前六時に出發して、些し進めば宜しうと云ふ師團長



からの命令でありますから、小原大佐は其の心算で南蔡村を出發致しましたが、大孟庄と云ふ所まで進むと、敵が若干居ましたので、我が尖兵は直ちに射撃を開始すると、敵は些し支へたのみで、直ちに敗走してしましましたから、左程の戦争もなく、大孟庄を奪ふて了つたのであります。そこで小原大佐は一寸休息させました。此時一ツの美談のありましたのは、此の大孟庄の空家の中に、敵の隊長らしき男、爾も日本にしたらまあ中隊長、即ち大尉位な人でもありませうが、頗る重傷を負つて倒れて居ますが餘程苦んで居ます、我兵二三人が是を見附出して「ヤア、敵の隊長らしいぞ〜」と、成程普通の兵ではない、假令重傷にもせいで、隊長を捨て、置いて逃げ去るとは、餘り酷いではないか」「そこが支那兵の支那兵たる所だ」「イヤ、それは支那兵に限らぬだらう、負戦になつたら、或は我が日本兵と雖も、爾なるかも知れない、兎に角可哀想ぢやないか、モウ程なく死ぬわい」「是を見ては、敵と雖も忍びんなア」「〜、此處が孟子の所謂、人皆人に忍びざるの心ある所ぢや、即ち惻隱の心が起る所を以て見れば、人の性は善に違ひないなア」「ア、死んだく、怎麼ぢや、慙して居る間に葬つて遣らうぢやないか普通の兵ぢやないからなア」と一人の兵が言ひ出すと、皆之に賛成して、三四人の兵で其の空家の背後へ穴を掘つて、死體を埋めて遣つたので、此事を小原隊長が聞いて頗る感心をなさいまして、大層に此の兵士等を賞めました。「爾等が今日の所爲は、寔に文明的の行方であつて天晴徳義を知つとる仁慈の所行と云つて過言でない、それに就て思ひ出したのは、千八百九年七月二十八日、英佛兩軍が西班牙のサラベラ府で戦争したが、暫らく双方兵を休めた時、兩軍の兵が

水を求めんとして、戦場の一部分に流れたるダグヌ河の一小支流の岸邊に至つたが、此時彼此兩軍の兵相接して、親しく言語を交へ、且つ水器を換へ、酒瓶を易へて飲を共にし其の状恰も同盟軍の如く決しの敵味方とは思へなかつたと云ふ、殊に感すべきは其の休戦の間、互に先を争ふて、激戦の場所に算を亂して倒れて居る負傷者を移送するに方り敢て敵味方を懼まず、均しく之を扶けて後方へ送致する事に勉めた、然るに軍鼓俄かに鳴つて頻りに戦争を促すと、兩軍の兵卒等手を握つて別れを告ぐる者多く、後僅と十分間にして、再び銃槍を以て相接するに至つたと云ふ事が、歴史に載つて居る、イヤ怎麼も實に美しい情で、爾等が今日、敵の隊長の死體を埋めて遣つたと云ふは、是が果して徳義上人類たる者の爲すべき事であると云ふ事に、氣が附いてしたのであるまい、ホンの一時の惻隱の情、即ち仁心の端が動いて行つたのであらうけれども、誠に好い行方で、頗る文明的である、諸外國人に聞えても、日本兵士の名譽ぢや」と言つて讚めましたが、是は成程、戦争中の美談でありまして、諸國兵の暴行に比して、天地青壤の違ひで云います、それに就て一寸餘計なお話したが、黒猿は過日九段坂上の階行社で、或る將校の談話を聞きました。逐漸に此頃は武器が進歩して來て敵に彈を中てるも、成るべく速く全快するやう成るべく敵の生命に關はらぬやうな銃彈を用ゐる事になつて來て是は各國ともに爾だううで云います、して見ますと、人文の進歩と共に、戦争中にも自然徳義を重んずる様になりましますものを見えます、騎兵本隊は、七時に至つて南蔡村を出發致しましたが、大孟庄と云ふ所まで参りますると前方に敵の騎兵が



見まするので、森岡隊長はそれと聞くや、副官を連れて先頭の所まで馬を進め、馬上双眼鏡を取つて敵の状況を凝視して居りましたが、「ム、成程、居るな、ア、勿々居るわい」副官「随分居りますな、此の様子では河西霧で一防線行ふ心算で寄りませうかな」森岡「或は爾かも知れん、怎麼も支那騎兵は、白馬に乗つた奴が多いのう」と見て居りますと「隊長殿、英國の騎兵が参りました」と背後から叫んだ者がありますので、森岡大佐は回顧つて見ますと、成程英の騎兵が續々と進行して参りました、其の隊長は矢張副官と共に我が隊長の居る所まで来りまして一禮なし「イヤ、日本は萬事も手廻しが能く整つて居たから、あ速いですが、我々の方は勿々爾参りませんで、ツイ遅くなりまして」大佐「怎麼致しまして、日本とても勿々準備は整つて居ないですが、何しろ先を急ぐので、止むを得ず、不整頓の儘で行つて来るです」と種々話して居ります所へ、今度は又た露國の騎兵も参りました、英は約二百騎ばかりですが、露國の方は百騎ほどでムいます、併し是で日英露三國の騎兵が集合して、聯合騎兵獨立隊が編成されて、我が隊長の指揮の下に運動する事になりましたゆゑ、そこで森岡大佐は先づ敵状を偵察せんと、英露の隊長に語りまして、斥候を出して見ますと、其の斥候が返つて言ふに「西方に一の河があります其の河の堤防上に敵の騎兵が若干居ります」と報告しました、森岡大佐は是を聞いて「爾か其の河と云ふのは、多分地理圖に在る風河と稱する河に違ひない」と、是から直ちに隊を進めて見ますと、果して斥候騎兵の報告に違はず若干の敵兵が風河の堤防上に居りますので、我が先頭兵はそれと見るより、烈しく一齊に射撃をせんと、忽ちの

中に逃げ出しましたが、其の逃げるの速い事と云つたら、進も是を追ひ駆けても無駄ですゆゑ、森岡大佐は「追ふな、追ふても了らん」由つて、舍け、と言つて追はせませぬ、惜又此方は前に斥候を命ぜられたる騎兵少尉の森元重雄君、部下を率ゐて西方に進みまして、風河の橋の邊まで参りますと、矢張前方に敵の騎兵が約五十騎ばかり居りますので、森元少尉は馬上眼鏡を取つて熟々見て居ますと、敵も此方へ進む様子なく同じやうに馬上から眼鏡で我軍を凝視して居ます「ヤア、彼奴等も矢張双眼鏡で見居やがるな、約五十騎ばかり居るな」左やうです、彼奴等も此方へ進む様子はありませんですな「ム、勿々進んで来はせぬと言つて、我兵が寡勢ぢやから逃げさせぬわい、何しろ是だけの兵數では、進んで戦ふ事が出来ない、残念ぢやな」實に残念でムいます、ア、少尉殿、隊長らしい奴が、馬から下りましたな」森元「ム、下りたく何しやがるかな」ア、糞をするのでな、ア、臭い」馬鹿ッ、此處まで匂ふものか、偏は全體物事を誇大に言ふて不可ん、軍人と云ふものは、總て物事を成るべく遠慮せんけりや不可ん」ハイ併し糞の事は、誇大に言ふても、敢て害にもなるまいと思ひますが」森元「イヤ假令糞の事でもぢや、何様な小事でも正直に言はなければ不可ん」ハイ宜しうムいます、爾來憤みます、併し人を馬鹿にした敵ですな」と見て居ると、馳て彼等も逐漸に立去つて、姿を隠して了ひましたから、止むなく此方も引返して参りましたが、此日午後二時に騎兵隊は磚廠と云ふ所に達して、此處に舍營を致しました、磚廠は南葉村から十六五丁も北に在ります一寸した村落でムいます。



話頭戻つて師團本隊の運動に取懸りまするが、師團本隊の楊村を出發致しました時は、未だ暗いので、いまますから、露軍で架したる橋を渡りまするのに、破壊して居て仕方がありませんから、兵士も將校も自から愚痴を殺します、何だつて此様に橋を破壊したのぢやらう、豈夫我軍が先頭になつたと云つて、意地悪く此様事をしたのでもあるまい、『何だか分らぬテ、將校等は正可そんな事もしまいが、露兵の中には随分あるからなア、亂暴な男が』ム、大ありく、昨日から昨夜へかけて、勿々暴行を行つたやうぢやせ、『何しろ、露國奴、一番先へ楊村へ遣入つたのぢやから、行り放題に行つたのぢや僕が見た婦人の死體などは可哀想なものぢやつたぜ、未だ年頃はさうさ、漸く廿二ぢやア色の白、口元の可愛らしい好い女ぢやつたが酷い殺されやうをして居たな、想ふに強姦して置いて、殺して了ふたに違ひない』殺さなくても可なりなものぢやに、何故殺して了ふのぢやらう』知れると不可んから、それで殺すのぢやらう』顔を見知つて居て、アラ彼の人だよナンナンと喋舌られでもすると、不可んからなア』併し亂暴ぢやなア、亂暴を通り越して、寧ろ無茶苦茶と言ふ方が可いぢやらう、何でも彼等の眼から支那人を見ると、犬か豚の如く思ふぢやらうさ、人種が違ふて、文字が違ふて、總ての風俗習慣が異つて居るのぢやから』と各自に露國兵暴行の噂どりくで、いいます、漸く八時過る頃になつて南葉村に達します、と此時恰も北方の方つて、銃聲の豆を炒る如くに、最も烈しくバラ／＼ボン／＼聞えます、山口師團長は馬上に之を聞いて、『前衛が敵に衝突

(百七十一)

して居るな』石橋左様です、此の様子では餘り遠くはわりませんですな』山口ム、近いのう、何しろ、此の市街の北端に集合させ』と命じまして、直ちに南葉村市街の北の方に集合する事になりました、そうして山口師團長も、市街の北方なる柳の樹の繁茂したる森の中に入つて、休息して居られますと、馳て北方から一騎の傳騎は馬を驅つて参りましたが、師團長の前に來つて一禮なし、報告書を取つて之を師團長に渡します、取つて見ると、最早や敵の退却したと云ふ報告でありませぬ、サアそれでは宿營に就けと云ふので、各自宿營に就くの準備に取懸りましたが、山口中將は相變らず『吾輩は此の森の中に露營しやう』と言ひますので、小原副官は『何處か一ツ涼しさうな美麗な家がゐるかも知れません、見付けて参りませうと、言ひまして、小原少佐自身に彼方此方と歩行して見ますが、怎麼しても思ふやうな家がムいません、私も此の南葉村には一夜泊りましたが、家は勿々立派な門建家などもありません、此時は未だ敵の死體が所々の家の中にあるやら、汚穢物が散亂して居るやら、殊に敵屍は腐敗して、其の臭氣逆も堪るものではありませぬ、加ふるに家の中は一層蟻が多くて、南京蟲が居ます、百萬の敵をも恐れぬ流石の豪傑も、此の南京蟲には頗る閉口せられて居ると見えまして、山口中將は『イヤモウ、恐ろしい物は南京蟲く、是には二十七八年の役の時から閉口して居るが、今度は又一層恐れ入つたわい、家の中より露營に限る』と言はれて、矢張此日も森の中に陣營を定められました、ヌルと此時、俄かに何だか騒がしくなりまして、ワイ／＼／＼言ひ出しましたので、司令部の主人も何事かと思つて居ますと、馳て前哨の方から一人の支



那人を連れて、此の森の中の司令部へ行つて参りました。山口師團長の評へ一人の支那人を連れて参りましたのは、如何なる理由かと言ひますると、我が前哨が北方の要所に前哨を張つて、此の方を監視して居りますと、一人の支那人が前面からスタク／＼行つて参りましたゆゑ、歩哨兵は之を見るより大聲に『止まれッ』と叫びましたが、彼支那人は毫しも止まらずに、スタク／＼進んで参ります、歩哨兵は早くも心の中に、其の言語の解せざる事に心附きましたから、手眞似を以て『止まれ／＼』と云ふ様に制しますと、彼漸くに氣が附いたと見えまして、歩みを止めましたが、全體此の歩哨と云ふ者は、勿々任務が重大なものでムいまして、總て軍隊一般の耳目となつて、活動しなくてはなりませんから、歩哨兵の重任務を帯びたる者は、一寸も油断は出来ません、今茲に歩哨線に在る歩哨が、一般に心得へべき事項を擧げますれば

- (一) 敵に就て何事かを発見したる時の處置
- (二) 歩哨線は人の通行を許すべきや
- (三) 軍使降参人の取扱ひ方
- (四) 歩哨の保つべき姿勢

等でありまして、第一に敵が襲來したと見れば無論是を後方へ報告しなくてはなりません、時機危急にして、報告すべし暇なき時は、急射撃を行つて之を後方へ知らせるやうにします、又口頭報告の爲、其地を

退くには、地形の許す限り、成るべく身體を隠しつゝ、必ず正面を避け、即ち眞直に退かないで、左右何れかの翼側に迂回すべしださうです、第二は我兵と雖も、又何人と雖も、相當なる手續を経ずして、通過せんとしたる時は歩哨兵は身振り手眞似等を以て之を止め、又た導き、若し彼にして聞入れず、強て歩哨線を通せんとしたる時は、之を銃殺して了ふて構はんやうです、第三は敵の軍使などの來た時も、種々注意してよい上敵の軍使と見れば、歩哨兵は是に眼覆までもして、連れて來らなくてはなりません、第四は歩哨の任務中、座したり臥したり、或は銃器を手放したりする事は無論出来ず、又上官が來ても之を敬禮するに及びません、若し上官より質問する事あれば、只姿勢を正しくして應答するまでにて足りります、其他の前哨兵任務中には、種々面倒な事があります、此等は詳細に演へませんが、只前哨兵の任務は斯の如く、勿く骨の折れるものであると云ふ事を、一言演へましたゞけてムいます、それでありますから今南萊村北方の我が前哨が、此の支那人を見て、手眞似を以て制止したのでムいしますが、彼が止まるを見て、其の側にツカ／＼と進み寄りて、鉛筆と手帳とを取出して『汝何人』と書いて質問しますと、彼は其鉛筆を請ひます故、渡しますと『吾者密使自北京來』と書きましたから、そこで直ちに之を後方に居りましたる獨立下士哨に連れ行かして、此の趣きを報告しました、下士哨で一應筆談尋問を試みましたが、矢張り密使であつて、北京から來たと言つて居ますゆゑ、下士哨は直ちに之を司令部へ送らしたのでムります、司令部山口中將は此事を聞かれまして、通譯官に向ひ『取調べて見い、最う恰と密使の來る頃ぢや、併し書面を持



つて居らんけれども不可ん』通譯「ハイ宜しうムひます」と。是から直ぐに呼んで見ますと、年齢四十位な男でムいまして、勿々確乎した人物と見え、些しも恐るゝ色なくそれへ進み出ました、通譯官は「お前、北京から来たと言ふるのだが、全くか」人「左様でムひます、北京日本公使館の背後に在る肅親王府に、籠城して居ましたる教民でムひます、日本の武官指揮官、柴中佐殿に頼まれて参りました、ハイ、五日に北京を出て来たのでムひます」

通譯官は之を聞いて「では、柴中佐から頼まれて来たと言ふ何か確かな書面でもあるか」證據を持つて居るか』と尋ねますと、彼は猶然と笑ひまして「ハイ、それは確乎とした證據がムひます」と言ひつゝ、一封の書面を取り出しましたので、受取つて見ますと、正しく柴中佐の自筆の書で、印まで捺してありますから、之を師團長の前に出しました、山口中將始め司令部の人々披見すると、其の主意は大略左の如くでムひますが、併し是は書面の意味だけを取つて、茲に掲げましたものでありまして、原文は勿々立派に書いてあるのでムひますから、其の思召して御覽を願ひ上げます

(一) 嚮々に報告致せし如く去月中旬より休戦にはなると雖も眞の休戦とは云へず或る一部の敵兵は時々刻々射撃を爲すゆゑ毫も油断は出来ず

(二) 檜原書記官の死去後他に死亡したる者なし

(三) 糧食は今日より約十日分しかなしそれとても人々十分に食する事は進も叶はず粟の粥其他の食品を以て之に當て漸く十日分位しかなし

(四) 銃丸は一人前に就て平均三十發づゝしか所持せず尤も敵兵休戦後密かに銃弾を賣りに來りしゆゑ之を購求して各自に分配なし携帶し居るなり

(五) 總理衙門よりは屢々引揚げを申込み來り其の度数は殆んど數へ難き程度々にして又其の申込の趣意は各國共に兵士を殘らず速かに天津へ立退かせるやう若し躊躇なすに於ては止むを得ず攻撃すべし各國公使の引揚ぐる節は清國兵を以て護衛するゆゑ心配に及ばずとあり想ふに是れ各國籠城者を誘ひ出して途中に壓殺するの策ならん依つて我々籠城者は裏りに彼が言に乘らず只管に救援軍一日も速かに來つて吾々を苦境中より救出する事を希望し居れり然れども表面上は飽までも彼等の言葉に従ひ當地を立退くと見せかけ日限などの談判書面の往復に日を送りて救援軍を味つの外他に手段なく籠城者は實に憐むべき境遇に陥れり

(六) 聞く所に由れば清國政府中の開明黨とも云ふべき許景澄袁徵等の人々は頑迷黨の首領端群王に抗論せしを以て殺害されたりと云ふ

(七) 李秉衡なる者が武衛軍の參謀長となりたる由彼は無二の頑迷黨にて端群王の股肱也

(八) 北京に集まつて居る清國兵は武衛軍なりしが昨今になつて老湘軍が二十四營ほど來ると云ふ噂あり又陝西省から入營の敵軍救援の爲北京に來ると云ふ噂専ら支那人中に行はれ居れり



(九)先づ目下の所其の實北京に在る敵兵の数は二十營内外と想はるなり

(十)聯合救援軍が北京城外に着されたる節城門を破つて入らんとするは門扉堅固にして頗る困難ゆゑ公使館所在地なる南方の壁の下に水道あり其の附近は米兵の守備ゆゑ是より入り易からん且つ城壁とても南方は薄弱にして東方は頗る堅固なり旁々南方より入るを以て容易なりと想はる云々

其の書面の概略は、まア右の如くであつて、五日の夜に出したる書面でありますが、其の名は柴中佐より山口師團長、及び福島少將宛でムいます、そこで山口中將、福島少將以下司令部の御人々は、此の書面を見て各々互に顔を見合せて居りますと、彼の使者は通驛官に向ひまして「如何でムいます、私しを胡亂な者と云ふも疑ひが晴れましたか、いよ／＼と疑が晴れて御信用になりましたら、私しより申し上げる事がムいます」

通驛官は密使に向ひまして「ム、疑ひは最う晴れた、徳云々確かな書面のある以上は、お前を十分に信用するから、何なりとも知つて居る事思ふ事を演へて呉れ」  
「では申し上げます、私しは北京の城壁を出でます時に、壁の南方の、米國兵が守備して居ります下の方に、堀がありました、それから潜つて出でましたのが堀と申しました所が、天氣の好い時には水は殆んど無く、空堀同様ですゆゑ、此處から這入れれば譯はありませんが、御書面にも書いてあるか知りませんが、私しは現に潜つて出て來ましたから、其の思召がありますならば其邊の様子を有の儘に申上げませう」と言つて、彼は鉛筆にて略圖を畫つて、詳細に話しましたが、

それは勿々に委しいものであつたさうです、一同大いに其の注意の行届いて居るのに感心致しましたが、併しそれは、今の所此男に向つて、それでは其所から這入らうとも這入らぬとも、明々とは答へが出來ませぬゆゑ、通驛官は「お前の注意の周到綿密なるには、司令官閣下始め、吾々に至るまでも皆擧つて感心を致して居る、併し今は何とも確答は出來ない、唯お前の厚意だけは、十分に禮を言ふて置く」と感答へまして、それから師團長以下、此の返事に就て評議をお開きになりましたが、師團長は先づ一同に向ひまして「此の書面に依つて見れば、休戦ぢやからとて、決して油断は出來ない、殊に今以て北京籠城者に、北京を立退ひて呉れるなど、申込んでくる所を以て見れば、怎麼して、未だ勿々頑迷黨の勢力が強いと見ゆるから、一日所か、一刻も速かに前進して、早く救ひ出さんと、如何なる状況に立到るやも知れぬ、そこで明日、無論此所を出發するとして、約そ何日に北京へ到達する事が出來るかやらう」と言はれましたので福島少將は此問ひに答へまして「左様ですな、明夜河西務へ宿營としまして、明後十日の夜が馬頭ですな、其の次の十一日が張家灣として、十一日が通州……まア途中何等の故障なければ、十三四日頃には北京に達しますな、此分ではさしたる防害はあるまいと思ふですが」  
山口中將、最も意外の故障もあるまいと、石橋外圍入の中には、張家灣を頗る氣遣ふて居るらしいです、それは前年、英佛の同盟軍が頗る惱まされた所ですからな」  
「メヤモツ、必ず其様憂ひはないと思ふ、唯まア些し抵抗が強からうかとも想ふのは通州ぢや、是とても何太だしい事はあるまい、何しろ其の心算で、返事をお遣りになりましたら、宜しうムいませう」  
山



「ト爾ちや、其の心算で書いて遣られい、行進して途中の宿營する場所と日取りとを詳細に書いて爾し  
 ないど、龍城者が安心しないから、確乎たる事を詳細に書いて、そして途中に意外の故障がなかつたなら  
 ば、十三四日の頃には、必ず達して救ふから、それまで成るべく持重して行つて居れ、最う假令救援軍の到  
 達が一日や二日後れても、北京を立退くなど云ふ事はしない方が好いと、恁云ふて遣れ」と命じまして  
 書記に命じて返書を書かせます、其の返書の出来る間、彼の使者は埃つて居りますから、師團長は「何か馳  
 走して遣れ、彼も頗る辛苦して來たのぢやから」と言はれましたが、此の缺乏の中ですゆゑ、別に何も馳走  
 も出来ませんが、徴發して來た麥粉の饅頭がありますので、副官が「是でも食へるして遣りませう」と言つ  
 て、與へますると、彼の喜びは一通りでムいません彼は通譯官に向て、頻に禮を言まして「私しも長々の龍  
 城で、食物に一番不自由を致しました中ゆゑ、恁云ふ甘い物を戴きますと、何様に嬉しひか知れません、ア  
 、甘い、イヤ久しぶりで、此様な美味い物を食へました」と眞に喜んで、ムシヤ／＼食して居ります  
 ので、是を見るに附けても、北京龍城者の困苦を察しやつて、見る人皆落涙嗚咽せざるはわりません、  
 北京よりの密使に渡しましたる返書は左の如くでムいます  
 日本及び聯合各國軍は八月五日北倉附近を掃蕩し同六日楊村を占領し而して日英米露の聯合軍は本日楊村  
 を發し北進の途中午後八時二十分南樂村に於て貴書に接し北京の状況を詳かにし衆皆公使以下の恙を  
 慶し併せて一日も早く我が聯合軍の北京に到着し公使以下貴官等其の苦境より救ひ出さんと期し我が師

團長以下衆意奮激す聯合軍は意外の故障あるにあらざれば九日河西務十日馬頭十一日張家灣十二日通州に  
 到る豫定にて其の北京城下に進軍するは蓋し十三四日の兩日ならん

柴 砲 兵 中 佐 殿  
 福 島 少 將

と、斯の如く福島少將の名にて遣る事になりましたが、そこで今一ツは此の密使の口からも言ふたる如く、  
 北京城壁の南方なる空堀を潜つて這入り、内より城門を開けば意外に容易に城内へ入れるであらうと、云ふ一  
 事であつて、是は柴中佐の書面にも此事が建議的に書いてありますので、此の事に就いて福島少將は何か  
 言つて遣つた方が宜しからうと思ひまして、師團長へ御相談になりますと、師團長も暫らく考へて居られ  
 ましたが、良あつて「爾さ、それはそうしたら容易に這入れるかも知れぬが、併し堂々たる我が皇軍が四百  
 餘洲の帝都を攻陥するに方り、堀などを潜つて這入つて、内から門を開くなどは、如何にも數々然して居  
 て見苦しい、外國軍に聞へても餘り譽でない、それより寧ろ立派に城門を破壊して我が皇軍の向ふ所敵なし  
 と云ふ勢で、整々堂々と進入したいぢやないか」と言はれたのは、流石に山口中將でムいます、それに北京  
 攻撃の畫策は、聯合會議で能く／＼評議をした上でなくては、今我軍のみで豫め決して、日本軍が勝手に其  
 の南方へ向ふと云ふ事は出来ないのでムいますから、福島少將は左の如き趣意を以て別紙に認めさせました  
 是も唯意味を取つて書いただけです



貴官が北京攻撃に關する意見は至極道理であつて我が師團長も大いに喜ばれて居るが併し其の戰闘の畫策は今から豫め決する事能はず何れ通洲に達して後各國司令官の聯合會議を開いて決するから其心算で居て呉れるよ云々

右の如き趣意の返書でムいすが、通驛官は使者に向ひまして『お前太だ疲れたではあらう、誠に氣の毒ぢやが、是も多くの人を救ふが爲ぢやから、一番奮つて行つて呉れ』い、サア是が返書ぢやから持つて行つて呉れ』と言ふと、彼は莞爾と笑ひまして『私も多くのの中から選まれて参ります位ですから、何も利欲的や又はホンの表面の義理などで参つたのではありません全く箱城各國人と我が教民とを救ひたいと云ふ眞心から來たのでムいしますから、自分の身體の疲勞位な事を厭ふては居りません、宜しうムいします、是から直ちに掛かけませう』と言つて快く返事を受取つて懐中し最も叮嚀に暇乞ひを致しますから、福島少將感心なさいまして、支那語を以て『お前の艱苦は察するぞ』と言つたら、彼は復も猶然と笑つて『サニ貴官、茲が故人の所謂豈艱險を憚らざらんや、深く國士の恩を懐ふ季布二諾なし、候願一言を重んず、人生意氣を感ず、功名誰か復論せん』と云ふ所で、北京で柴中佐殿に多くの中から選まれ、此方へ参つては又た有難いお言葉や御丁寧なる待遇を受け、慙慙して此の恩に報せず居られませう、私も多少教育のある人間です、吃度一言の謝は果しますと、彼は唐詩選を引いて斷言しました

河の左岸を前進致しまして、途中に止したる抵抗も受けず、北禁村にまで着致しますると、最う北禁村の敵も疾くに逃去つて了つて、一兵も居りません、唯敵の掩堡の跡などが、所々にあるだけでムいしますから我が將校兵士等は之を見て『ヤア、敵奴、此處で十分に防ぐ心算であつたのが、我兵が餘りに烈しく隙間なく攻め立て來たから、とらへ〜支へもせず逃げて了つたのぢやね』爾ぢや、敵は我軍の意外に神速なので、周章狼狽して逃去つたらしい』など、話して居りますと、一人の兵士が駆け参りまして『中隊長殿、彼處の家の中に、一人の支那人が縛られて、傷だらけになつて居ります、私が参りましたら、何か頻りに言ひつゝ、助けを乞ふやうでムりました』サニ縛られて居る、曉曉……連れて來て見い』と兵士二三人をして連れ來らしめて見ますと、如何狀四十位な支那人でムいしますが、兵士とは見えません、通驛官を呼んで『此の男を一ツ調べて見て呉れい、慙慙も兵士ではないらしい』と言ひましたから、通驛官は『宜しうムいします……ナイコラ、你は何者ぢや、支那人には違ないが、兵士か普通の士民か有の儘に言へ、偽ること偏の爲にならぬぞ』支那は決して兵士ではムいしません、北京に籠城して居た耶蘇教信徒でムいまして、外國人に頼られました、救援軍へ使に行く途中を、支那人に捕へられました、已に殺されやうとして居る所へ、貴公方外國の御軍隊が來たものですから、支那兵は周章へて、私しを縛つた儘にして置いて、早々逃げて了つたのでムいします、決して偽りは申しません、萬望お助けを願ひ上げます』と言ふ様子些しも偽りらしくムいしませんから』では偏は、何處の國の人に頼まれて來たのぢや、唯單に外國人と言つた所が、多く



の外國軍がやから分らぬ』私しは露國人に頼られました、ハイ、全駐英國の公使館に避難して居つたのです  
 が、露國の宣教師が是非行つて呉れいぞ申しますのでそれで参りましたのです、此處まで参りますと、支  
 那兵士は矢庭に私しを捕へまして、裸躰に致しまして検めました、私しは露國人の書面を持つて居りました  
 ゆゑ、早くそれを隠そうと思ひましたが、隠す暇さなかつたので、どうとう彼等に書面を奪はれまして  
 いますけれども、一人として露國の文字の解る奴がおりませんので、彼等は私しに向つて、種々なる事を問  
 ひましたが、私しは眞實なる事は一ツも申しません、勿論彼等如き道理も何も解せない禽獸に等しき者に  
 何を言つても分らう筈がありませんから、唯私しは外國人の所へ行く者に違ひない、お前方に捕へられたの  
 は、私の命數の已に盡きたのだから、早く殺しなさいと申して、私しは最う死を決して居りました、そうす  
 ると彼等は怒つて、此の通り打つ、突く、蹴る、モウモウ傷だらけになりまして、今はハヤ殺されんとした  
 所へ、貴軍が参りましたので、私しを其儘にして逃げ去つたのでムいす』と演へますので、此の趣き  
 大隊長に告げますと、大隊長も『では早速、露國軍へ送つて遣れ』と言はれますから、彼の細目を解いて  
 食物を與へ、助り慰めて露國の方へ送り遣します、彼の喜びは一方ならず、我が將校兵士に向つて『日本軍  
 は王者の師でムいすな、古の文王武王の師と雖も、是には優りますまい、日本軍西面して征すれば、東人  
 怨み、日本軍北面して征すれば、南人怨みます』などいふ世辭を言ひつゝ、行きましたるうです、そこで我  
 が右翼隊は、前衛を其の前方の村落、約五百米突位の所に在る村中に出しまして、他は皆北葉村に宿營する

事に決したのでムいす、故に此日、右翼隊の方は、戦争なしに済んだのであります  
 備此方は師團本隊の方ですが、南葉村まで進んだけれども、唯困るのは糧食の一事でムいす併し此の南  
 葉村に於て、前衛隊が船二十艘程を分捕りましたので、之で楊村にある米を運輸させやうと云ふ山口師團長  
 の考へでムいす、故に山口師團長は石橋參謀本長に向まして、山口で『成るべく速かに、糧食を運搬させな  
 くつてはならぬ此處で分捕つた船で、楊村から運せ』石橋ハイ、宜しうムいす、併し此處で前衛隊が集  
 めた船は、纔かに二十艘しかありませんから些と不足です、故に至急船舶集收隊を組織して船を集めさせる  
 事に致しましたら如何でせう』山口ム、それが宜しからう、早速工兵隊に命じて爾うさせやう』と是から  
 直ちに工兵大隊長に出頭するやうと言つて遣りますと、間もなく工兵第五大隊長馬場工兵中佐が、司令部  
 へ御出頭になりました、此の工兵中佐馬場正雄と云ふ人は、至つて辯舌の能い話し好きのあ人でありまし  
 て、黒猿は北京の得勝門外に於て、此のあ人の本部へ二夜宿泊させて戴きまして、いろ／＼面白い話しを  
 聽かせて貰ひましたが、其の談話の上手な事は、勿々我々の及ぶ所でありませぬさうして、此のあ人の長所  
 は人を使ふに妙を得て居て、決して人の非を擧げると云ふ事がないさうです、他人が『唯々は何云ふ事をし  
 て居ますか、アレは不可ません』と言ふと、中佐は『イヤ、彼の男は又た徳云ふ長所があるから』と言つ  
 て、必ず其の人の長所を擧げて贊めるさうです、誰の事でも決して悪く言ふと言ふ事はないので、それであ  
 るから、部下が寔に能く懐いて居て、自分の手足の如く、意の儘に動くやうでムいす、餘事は措いて、本



文に懸りまするが、山口師團長は馬場工兵大隊長に向ひまして「船舶集收隊を組織して、至急に船を集める  
 せし、當地で前衛が集めた船だけでは、迎も不足なやから、成るべく速かに集めて、さうして糧食を運搬  
 させなくては、糧食に大だ差支へて居るから」中佐「ハイ、宜しうムします急速に行らせる事に致します  
 集めてそれを後方へ送るやうに致しますす」山口「ム、爾等や、楊村から糧食を運ばせなくてはならぬ  
 から、それで歩兵へも爾等て援助させるから」と言はれまして、師團長は歩兵二百名だけを出して、工兵  
 に力を添へさせるやうに命じました馬場工兵大隊長は直ちに本隊に歸つて、部下第一中隊の少尉井上謙吉君  
 を呼び出しまして、師團長から命令の概要を告げました 馬場「爾等命令であるから成るべく速に集收さ  
 れい」と命じましたので、そこで井上少尉は領承して部下の軍曹二名と兵士二十名許を率ゐて行く事にな  
 りますると、歩兵の方からは、船を扱ふに慣れた者はばかり選んで、百名程寄越しましたが、是は各隊から漁  
 夫や船夫出の兵士を選抜して呉れたのでありまして是が意外に役に立つたのでムいす、サテ井上工兵少尉  
 は此等の兵士を分ちて船に乗りしめ、河上河下兩方に遣つて、船を捜索せますると、未だ何處の國の軍隊  
 も來ない中でしたから、意外に船がありません、勿論船を取ると言つた所で、妄りに土民の所有して居るも  
 のを分捕つて了ふのではありませんそれは船主も何も分らぬやうな船ならば分捕つて了ふけれども、船主や  
 舟人が居れば、先づ其者に向つて、我々は日本の軍隊であるが、船が入用だから徴發する、又た爾等も相當  
 なる日當を遣はすに由つて、一時我が日本軍隊の爲に御用を足せ、我が日本軍隊は十分に爾等を保護して遣

る、決して害を加ふるやうな事はないに由つて、安心せし」と怒云ふ風に懸るに説諭して、集めるのですか  
 ら、支那人と雖も、皆喜んで是に應じました、故に忽ちの間に船を多く集收したのでムいす、是等の様子  
 は外國の徴發の仕方と、大いに異なつて居ります、  
 徴發と云ふ事は、分捕の意味を含んで居るかなど、言はるゝ人がありまするが、是は怪しからん次第であ  
 りまして、決して分捕の意味を含んで居るのではありません、頼山陽が外史の論文中に「廷議冗兵を汰す、  
 殷富の百姓、才弓馬に耐ゆる者、専ら武藝を習ひ、以て徴發に應じ」云々と書いてあるが、詰り徴發と云ふ  
 事と同じであつて、召集する事の意味になります、故に船なり米なり、又は人夫なり出せと言つて、それを  
 拒むと云ふ事は決して許しませんが、爾かと云つて、妄りに分捕などは大違ひでムいす、必ずや物品な  
 らば相當の代價を與へ、人夫ならば又た相應な日當を與へて、召集するのでムいす、併し日本の徴發は爾  
 ですが、露國などの徴發は、是は餘程異つて居て、全然最う分捕同様な事をして居ました、物資は言ふに及  
 ばず人夫まで分捕りにするから酷いのです、人足を分捕りにすると云ふは、些と妙な語でありますが、支那人  
 と見ると、構はずに引捉へて、賃銀などは遣らなひで、人夫に使役するので、假令相當な資産のある支那人  
 でも何でも、其様な事には構はずに、バシク捕へて働かなければ打つたり撲いたりして、使役すると云ふ  
 様な有様ですから、實に憐れむべきは、露兵に捕へられたる土民でムいす、イヤ是は長たらしく餘事に涉  
 つて済みませんでした、何しろ爾等有様ゆゑ、日本に徴發する時は、皆喜んで之に應ずるのでムいす



故に船舶も意外に早く集収する事の出来たのは、寔に仕合せでムいしました、そこで先づ此の船を後方、即ち楊村の方面へ廻しまして、糧食運搬の事に取寛らせますが、茲に一ツ困る事と言ふのは楊村と北禁村との間、意外に白河の水が鮮いのでありまして、船舶の往來が極めて不便でムいます、井上工兵少尉は不思議に思ひまして、微發したる船人に向ひまして「何故恁う水が鮮いのぢや、何處か水を減するやうにでもしてありはせんか」と言つて聞きます、と船人は「如何にも減河がムいます、楊村と北禁村との間に、東方へ河水を流出せしめて、白河の水を減らしてムいます、それゆゑ此の流が恁う鮮くなつて居ります」と答へましたから、井上少尉は「爾ぢやらう、恁麼も餘り水が鮮な過ると思つた、それでは其處へ案内して呉れい、其の流出せしめてゐる口へ」と、是から船人を案内者と致しまして十人ばかりの兵士を率ゐて参ります、成程思ひの外、流出口が廣くして、白河の流水殆んど半は此處から東方に流出して居るので、井上少尉は之を見て「ヤア随分澤山に流れ出して居るなア」爾です、それに頗る水勢が激しいから是を塞ぐには、勿々容易の事ではありますまい」井上「ム、容易でない、けれども恁麼しても、之は塞いで了はないと不可ん」と言つて、少尉は暫時見て居りましたが、好しツ、サア返らう」と言つて、返つて参りまして、馬場大隊長に此事を申しますと、馬場中佐は「それは無論塞いで了はんければならぬ、早速に行れツ」と言はれました、何しろ最早や日暮れになりましたゆゑ、明九日と極めて、其夜は各隊とも露營、或は宿營に就きました、此夜の暑氣と云ふものは極めて烈しく、人々勿々眠られませんでした「恁麼も暑いなア、日本では幾

干暑さが烈しいと言つても、此様な事はない、土用中など随分夜は酷い事があるけれども、此様な事はありはしない」これは宿營より露營に限る、師團長閣下は露營を好まる、箸ぢや」などと言つて、夜半に至り外へ出て了ふ人もあります、恰と此夜は月が冴えて、青空に雲なく、北清の原野を照す光景は又た格別のものでムいますから、將校の中には詩を吟ずる人もあり、歌を歌ふ人もありまして、夜中とは云へ、勿々の賑かでありましたが、其の中に二時半とも覺しき頃、師團司令部の方に方つて、ズドーンツと一發の銃聲が致しましたので、人々はと驚くと同時に、又もや續いてボン／＼／＼と烈しく聞きましたから、サア各隊とも騒ぎ出しました

(百七十三)

山口師團長は其の幕僚と共に、南禁村の側なる森林中に露營して居られましたが、月は冴えて涼しい風はソ／＼と吹いて來るので、司令部員一同寔に快い心地だと言はれつゝ、中にはハヤ熟く睡つた人もムいます、山口師團長と福島少將とは、未だ眠らずに話しつゝ居られます、山口「まアそれでも、我軍が先頭になつたのが、何より幸ひぢやつたが、北京の城内に這入るにも是非先んじたいものぢや」福島「無論、是は先んせんければなりません、若しも露國が先に入らうものなら、それは最ふ何様な事を行ひ出すか知れやしません」山口「爾ぢや、彼國の奴が先では堪らん、それこそ滅茶／＼ぢやなア」福島「それは是非通州では、米倉を占領して了はなくてはなりません、米倉が二三ヶ所にあるさうですから」山口「是は是非一ツ占領したいも







する者があつたやうです、吾々日本人の眼から見たら、殆んど狂人の如くに思ひませうが支那人は之を當然、否願る親に孝なる者として御閣下で稱賛するやうでいます、けれども是は、些と孔子の教への意味を誤解して居るらしいので、論語にも禮は其の奢らんよりは、寧ろ儉、喪は其の易めんよりは、寧ろ戚と言つてあるから、喪即ち親の死には、戚め悲めとは教へてあるが、家宅田畑まで賣却して、喪を行ふと云ふのは、所謂虚禮に流れて了つて、實に馬鹿くしい事と思はれます、イヤ是は又候生意氣を演らかして、甚だ相濟まぬが、何しろ、彼の晏忠傳は、全く父の喪に服して居たのだと言ふ事が判然しましたゆゑ、直ちに放免して遣りましたが、司令部へ向つて發給したのは何者だか、どうも分らずに了つたのは、實に残念でしたけれども想ふに、義和團などが數名此邊に潜伏して居て行つたのだらうとの事でいます、それが爲に山口司令官は、外は危険ゆゑ、司令部を家屋の中へ移しましたが、山口中將は福島少將に向ひ「君は此國へ度々來て居るから此國の事情に最も精通して居るは勿論の事やが、昔から此國は父母の喪に居る事を、大層孝行のやうに言ふて、皆之れを義務の重きものとして居るやうなやが、今以て矢張り爾かねい」福島の「怎麼もその様ですなア、御承知の如く、論語の陽貨篇に、子生れて三年、然して後父母の懐を免る、夫れ三年の喪は天下の通喪なりなど言つてあります位で、孔子の門人宰我が、三年の喪は長過るから、一年で宜しからうと言つたら孔子が、君子たるもの三年の間は心の樂まざるものやと斷言し、汝若し樂しと思はば短喪の儀を實行せ、然れども汝は君子にあらずと言つたとしてあります」山口「ム、爾々、論語の陽貨篇にそんな事

があつたのう、それは親が死すれば喪に服すると云ふ事は、之は當然なやが、三年の間も喪を行ふて居たら、中には往々生涯を誤る者が出来るぢやらうなア」福島の「爾です、それは最う必ず是が爲に生涯を誤る者があつたやうです、尤も通常の人は、唯一夜を墓の側に過して、晝間は依然職業に従事して居るやうですが、中に物堅い男は、正則的の儀式に従はなくては、心に快しとしないで、三年の間全く職業を廢して、墓の側に居て結ひ此處に在つて只管泣き悲みつゝ、光陰を送る者が随分あるやうです、今の晏忠傳とか云ふ男も其の類ですな」山口「フム、其の精神で生て居る中に、孝行して置いたら、それこそ大層なものぢやなア、併し爾云ふ奴は、親の生て居る間も頗る孝行ぢやらう」福島の「それは必ず孝行でせう、一體支那人は孝と云ふ事を好くするやうですが、其代り中には又甚だしい誤つた事があるです、それは何であるかと言ふと、自分の父が重罪を犯して死刑の宣告を受けた時、其の兒が父に代つて死刑になる事が、今は怎麼か知りませんが、ツィ此頃まではあつたです、是を孝心の最も深き者として、自分も快く死刑になり人も賞め官も賞めて許したですな」山口「ハ、ア、妙な風習ぢや、吾邦も舊幕時代までは其様な例があつたわい」と笑ひつゝ、八日の夜を明かしましたが、翌九日はいよいよ河西務に向つて前進でいます、山口師團長は八日の夜南葉村に止まつて、斥候は勿論の事、支那間諜を八方へ出して、敵の動靜を探らせましたるが、間諜等は何れも夜中に歸り來つて言ふに「河西務では、敵が十分抵抗する準備をして居ますから、其の心算でも出が宜しうございます」と報告に及びました、そこで師團長以下、皆其の心算で出發する事にな



りましたが、右側左側の兩隊は前日と異りませんで、唯前衛だけは歩兵第十一聯隊を以てする事に決し、粟屋大佐を呼んで之を命じましたので、大佐は領承して、直ちに出發の準備に取懸りましたが、獨立騎兵隊の方は、九日の午前三時に磚廠へ集合する事に決して、英露兩國の騎兵隊へも是を通知して、第二中隊と第三中隊とが、三時までに磚廠へ参りました。スルと間もなく英露の二國騎兵も來着しましたので、先づ互に御挨拶がありました。森岡騎兵大佐は英露の指揮官に向ひ「北倉と云ひ、楊村南築村と云ひ、騎兵隊はさしたる戰團を行きませんので、殘念で堪りません、萬望一番見事な快戦を行つて見たいものです」と言ふと、英の指揮官が「爾でムいさす、是非一ツ一大快戦を試みたいものであります、併し日本の騎兵隊は、嚮に天津で大層な働きをせられて、各國軍の中に名譽を博されたから羨ましいが、我が騎兵は未だ戰功を顯はさるんですから、今度は怎麼しても行きたい」露の指揮官も「是非一ツ突撃を行りたいです、日本騎兵は天津で敵中へ突撃して、勇名を博されたがイヤ彼の時は吾々も遠くから見居たが、實に勇ましかつたです」などゝ世辭半分に言ひますので森岡大佐も笑ひつゝ受答へを致しましたが茲で行軍の序列を定めまして、先づ我が第三中隊を前衛と致しました。次に森岡大佐は英國の指揮官に向ひ「貴軍は萬望右側隊となつて、前進して載きたいです」露の指揮官「ハ、承知しました、森岡大佐は地理圖を開き示し「斯の如く、左の方に武清縣と云ふ所があつて、茲處には兵營もあるらしいので、此の方向へ進む心算ですから、無論此の風河と云ふ河を涉つて行かなくてはなりません、其の心算で」と命じまして、次ぎに露國の指揮官に向ひ「貴軍は何卒左

側隊となつて前進して載させよう、日本軍は中央隊となりませんから、それで互に二百米突の距離で、無論聯絡を取りつゝ行く事に致しませう」と怒り命じましたから、英露の指揮官共に何の異議もなく承諾して、其の準備を致し、馳つて相前後して、いよいよ出發致しましたが、前衛となりたる我が第三中隊は、磚廠を出ると、直ぐに左方に曲り、馬足を揃へて進みましたが、間もなく風河と稱する河に達しましたゆゑ、此の船橋を渡りまして、些し行くと、向ふの森の中に敵兵らしい者が見えますゆゑ、先に立ちたる騎兵は振り返つて「敵が居ります」と報告した、我が前兵隊長は是を聞くと齎しく「撃てツ」と號令したので、尖兵等は馬上からポン／＼バラ／＼撃ち出しますと、森林中に居たのは敗兵であつたですが、驚いて逃げ出しました、其中に一人負傷して逃げられない奴が居ますので、擊殺して了ひましたが、畑の中に土人が二人ばかり居ますから、是を連れ來りまして「怎麼ぢや、武清縣には支那兵が居るか」と言つて聞いて見ると「居ません、一昨日頃までは些しは居たやうですが、南築村へ外國軍が這入つたと云ふ評判を聞くと、皆河西務の方へ引揚げて了ひました」と言ふ様子は誠にしつのであります、所へ恰と武清縣の方から、一人の支那人がスタ／＼行つて參りましたが、日本軍を見ると、嬉しむらに猶然笑ひつゝ、近附いて參りました。土人は日本の騎兵隊を見ると、喜ばしむらに進み寄つて、一禮を致しますので「何ぢや」と云つて尋ねますると「私は間諜に頼まれて、武清縣まで行つた者でムります、ハ、日本の隊長から頼まれて」と其の證據を出し示しましたゆゑ、我が將校等は疑を晴しまして「爾か、それは御苦勞ぢやつた、怎麼ぢやな、武清縣



の方に敵は居るか』と言つて尋ねますと『いえ、最う居りません、一兵も居ません、南葉村の陥落した事を聞く、皆狼狽して河西務の方へ逃げて了ひました、河西務の方には多少居るらしいです、武清縣の人民は至極穩かで、皆安堵して業を營んで居ります』と答へますから、そこで此の事を森岡聯隊長の許へ報告しますると、大佐は之を聞いて『爾か、それでは武清縣に入るのは止めにして、直に北方へ向つて前進しやう』と言はれまして、英露の指揮官に報じ、矢張り日本を中央に、露英を左右として北方に向ひ、前進を始めましたが、河西務を去る事一里ばかりの西南ならんと覺しき村落まで進みますると怎麼も敵兵の通過したらしい跡が、ありくと見えます、それは何故かと云ふと、人家が大層荒れてあつて、人民も逃げて空家が多くあるし中には焼けて居る家もありますから、森岡大佐は之を見て『是は必ず敵の軍隊が通過したに違ひない想ふに敗兵であらう、聞いて見い』と云ふので、土人を二人呼び來らしめまして尋問致しました大佐『怎麼ぞや、此邊を支那兵が通つて行つたらう、有の儘に云はぬを爲にならぬぞ、有體に語れ』土人『ハイ通つて行きました、昨日から今日にかけて、随分通りました』大佐『それは騎兵か、歩兵か』土人『騎兵も歩兵も兩方行きました、多くは河西務の方へ行きましたが、中には西の方へ逃げたのも有りました』大佐『此邊で亂暴でもして行つたか』土人『ハイ、此邊の人家に這入つては、食物を出せの、人足になれのと申しました、随分暴行を働いた兵士もありますので、土人は多く遠くの親類などへ逃れた者も澤山あります、女小兒などは畑の中へ避難して隠れて居りました』と、寧しも包まずに潰へ立てましたゆゑ、そこで敵の機子は畧

分りました、森岡大佐は直ちに前進を命じまして行進し出しますると、敵の騎兵約二十騎ばかり、遙かに向ふの土手の上に露はれましたから『ソレ、敵が見えるぞ』と言ふと、相手欲しと思つて居たる我兵も、英露兵も死んど同じに、急速前進して射撃を始めました、ヌルと敵は次第々に露はれて、約二百騎ばかりなりましたが、土手に沿ふて向ふの方へ馳せ行く様子でいますから『ソレ、残らず打取つて了へ』と我が兵五六騎真先に進めば、英兵も之に後れじと、二十五六騎ばかり、真先に進みたる我が騎兵に續いて、急進致します、其後に續々と英兵が進行しましたので、此時は英が先頭となり、我が騎兵は之に次ぎ、露は一番後になりましたが、何しろ三國の騎兵が殆んど競争的に追撃致しまするので、敵は息をも吐かず、逃げます、其の逃ぐるの早きには、各國兵も驚歎致した位でいます、味方も亦一息もせず追撃する事、殆んど一里ばかりでいました、敵の騎兵は唐庄と云ふ村落内に入つたやうであります、間もなく此の唐庄から烈しく撃ち出しましたので、英兵は皆馬から下つて、徒歩となつて、此の敵と撃合ひを始めました、我が聯隊長森岡大佐も之を見るや『徒歩して撃て』と號令して、皆飛び下つて徒歩戦になりました、併し敵は村落内に隠蔽して居て撃つのですから、其の姿の見えないのは、實に弱つて了ひました、其中に英の騎兵は少しく方向を變じて、廻つて唐庄を圍み包むやうな態度を取つて、攻撃し始めたので、我が聯隊長は大聲に『英兵に後るゝな、速く村落内に突進せ』と令しました

英國の騎兵が頗る勇敢に猛進したので、我が騎兵も是に後るゝなど、互に觸まし合つて勇進すれば、敵は最



早や堪り兼ねて逃げ出しましたが、併し勿々頑強な敵ですから、逃げながらに頻りと撃つて居ります。スルと英の指揮官は其の部下を指揮して、敵の背後へ廻すやうに進撃させましたので、いよく敵は狼狽なし、四方八方へ散亂して逃げ出しましたから、是を見るや日英露の三國騎兵は、面白半分に追撃を始めましたが、敵が散亂して逃げるのを追撃するのだから、此方も矢張り四方八方に分れて追撃致しました、然るに逃げる敵が畑地と道路との嫌ひなく、無暗に逃げたのですゆゑ、畑の中に避難して居たる婦人や小兒が驚いて、ワイ／＼泣きながら逃げ走つて、之を避けんと致しますれば、敵の乗つたる馬は驚き狂ふて跳ね廻り、婦人小兒を蹄にかけて蹴飛ばし踏散しなど致しますので、其の慘酷なること眼も當てられません、我が聯隊長森岡大佐は遙かに此の爲體を見て、不憫に思ひ、大聲に「オイコラ、其の畑中に避難して居る婦人小兒を救ふて遣れ、助つて遣れ」と呼ばりましたので、我が兵士等は敵を追ひつゝも、此の憫れむべき婦人小兒を救ふて介抱して遣りますから、彼等の喜びは一通りでムいませぬ、森岡聯隊長も自ら畑中に到りまして、彼等の様子を見ますと、中には負傷して血だらけになつて居る者もあるし、馬足に胸を蹴られたる爲め、已に氣絶して居る娘などもありますので、森岡大佐は兵士に命じて信切に介抱させ、藥などを與へて遣りますと、彼等は涙ながらに其の愛らしき両手を合せて拜むもあり、又泣きながら禮を言ふ婦人もあり、實に可哀想にも又たいぢらしいのでムいます、其中に年齢十七八にもなるならんかと思はるゝ一人の令嬢が居ります、爾も面容の美きのみならず、衣類も亦楚々たるものにて、其舉動も何處となく氣高く、窈窕く、一見

して大家の深圃に養はれたる令嬢と見えますので、森岡大佐は側に進み寄り、大佐の得意なる官話を以て「貴嬢は如何なるお人の娘ですか、見受る所、普通の家に養はれたる御婦人とは思はれませんが、御両親は御存生でありますか」と最と信切に尋ねますと、彼の女は漸うに涙を止めまして「寔に御信切なる御詞で有難う存じます、何を隠し申しませう、妾は唐庄の者にて、父母もツイ此頃までは存生で居りましたが、家は代々耶蘇教を信仰致して居ります爲め、義和團徒に悪れまして、遂に父母ともに、この殺されて了ひました」と又た潸然と泣き出しました森岡大佐も可哀想に思ひまして「それはお氣の毒な事でありませうが、併し死したる人は如何に歎いても返らぬ事ゆゑ、致し方がありません、斷念めて御自分の身を大切になさい、最早や遠からず、義和團徒などは退治して、安堵出来るやうにして上げます」と言つて慰めて遣りますと、彼の令嬢を始め、他の婦人も大層に其の心切を感しがつたさうですが、此等の婦人は耶蘇教徒にして、家は焼かれたり、親や兄弟は殺されたりして、據なく畑中に避難して居たものと見えます、清國は日本よりメツと古くから耶蘇教が遣入つて来て居るから、到る處に其の信仰家が随分澤山に在ります、何でも唐の時代から遣入つて来て、遂漸に此の宗教を奉ずる者が殖えて来たやうでムいますから、随分豪家舊家などにも信仰者が多くあるらうムいます、是等の話しは格別面白い事でもないが、實際にあつた事だから、演じて置きます

唐庄の敵は遂に残らず逃げ去つて了ひましたので、日英露の三國騎兵は、相前後して唐庄に入りまして、休



息を致しましたが茲に一つの不思議と云ふは、露國のユサク騎兵が、ズツと後から進んで来て居ながら、銃劍の先へ血潮を附けて居りまするのが澤山あります。中には又た敵の旗などを分捕つて携へて居る兵もありまするゆゑに、我が將校兵士は不審に思ひまして「露國の騎兵も、何處かで敵に衝突したかなア」「ナニ衝突する理由がないぢやないか、英兵と我兵の行進した後を来たのもの」では何で彼様に銃劍の先へ血潮が附着して居るがなア、旗も澤山に分捕つて居る。誰か語の分る將校が聞いて見ると可いがなア」などと言つて居ります。其中に英國の一將校が露の騎兵に向つて「貴様等は銃劍の先に血潮を附けて居るが、怎麼したのぢや、又た貴様の持つて居る其の敵の旗などは我が英兵が殺した敵の側に捨てゝあつた旗ぢやが、如何して其様な物を携へて居るのぢや」と言つて聞くと、露の兵卒は猶然笑ひながら「是は敵の死體を突いて、此の通り血を附けたり、死體の側にあつた旗を取つたりしたのです、是を司令官に見せて司令官から褒美を貰ふのですから、萬望内々にして下さい」と云つたさうですが、イヤハヤ呆れ返つたもので、是等も決して私の作り事ではなく戦争當時の新聞にも載つて居たし、我が従軍將校の人々中にも、笑ひながら語された人があります。却説日英露の三國騎兵は、九時頃になつて此の唐庄を出發し、河西務の方向をさして進行しましたが、我が先頭兵は、行く／＼四方八方に注意して見ますると、遙かに西北の方に方りまして、若干の敵兵、例の美々たる旗を押立て、退却して居りますから「ヤア、彼處に敵兵が行進して居るぞ」と、成程、敵だ／＼西北方へ退却して居るぢやなア」と、森岡聯隊長に之を報告しましたから、大佐は馬上に双眼鏡を取つて見

ましたが、何しろ距離が些と遠過ぎて、射撃しても功がありませんゆゑ、其儘にして置いて矢張り河西務方向に進みましたが、河西務へ近附くと、意外にも敵の大部が居りまして、其の入口から猛烈に撃ち出しましたゆゑ、我が聯合騎兵も皆馬から降りて撃合ひしましたが、敵は勿々の優勢ゆゑ、容易に前進が出来ません。森岡大佐は英露の指揮官に向ひまして「此の有様では、逆も容易に河西務に入る事は出来ませんゆゑ、今少し時機を俟ちませう」と言ふと、英露の指揮官も「爾です、是は怎麼も意想外の大敵でありますな、味方は是だけでは、敵が出て来られると、止むなく退却しなくてはなりません、併し敵も容易に出て来る模様はありません」出ては来ますまい、それに最う本道の方からは歩兵隊が追つて来ませうから、勿々出て来る事は出来ません」抑留左様、兎に角歩兵隊の迫るのを俟つより外仕方はありません」と言つて、騎兵は暫らく止まりましたが併し敵が撃つのを、此方も撃たずには居られせんから、尚ほ撃合ひしましたが、日本騎兵が一人敵弾に中つて負傷しました、それに困つた事には、我兵は遂に茲で弾を打盡して了ひましたゆゑ止むを得ず唯見て居ります。若しも此時に敵が大いに奮つて出て来やうものならば、三國騎兵は怎麼しても退却しなくてはならないやうな事になりましたから、一同頗る心配して居ります。故に森岡大佐は英國の指揮官に向つて「日本騎兵は已に彈丸を打盡して了ひしましたが、貴國の方は如何です」と言ふと「イヤ、それは困りましたな、實は我軍も大撃撃を盡したです」と答へましたので、露の方を聞くと矢張り殆んど打つて了つた、モウ餘りは些し／＼かないと言ひますので、サア愈々心配になりました。



(百七十四)

八月九日、いよ／＼師團本隊は南禁村出發と云ふ事になりましたが、其時の前衛の軍隊區分は左の如くで

△前衛騎兵今井大尉の率ゆる中隊

△前兵歩兵第十聯隊の第三大隊(二中隊欠)

△工兵第二中隊

前衛本隊行軍序列

△第九旅團司令部歩兵第十一聯隊の本部と第三大隊の二個中隊

△砲兵第五聯隊の第一大隊(一中隊欠)

△歩兵第十一聯隊の第一大隊

斯の如き前衛にて、九日の午前四時半に南禁村出發と云ふ事に決しましたので、山口師團長は參謀中川大尉を呼ばれて『中川大尉、君は前衛隊に附けるから、真鍋の司令部に行つて、萬事行られい』と命じました『ハイ宜しうムいます』と、中川參謀は直ちに真鍋旅團長の許に参りまして、其の趣きを告げましたので、旅團長は『では其の心算で行られい』と、是から少將の側に在つて種々御盡力になります。サテ午前四時に参りますと、前衛騎兵隊は出發する事になりました。今井大尉は先づ斥候を東西兩方面に出しまして、

そうして今井騎兵大尉は真中を進行して参ります。二里ばかりは一兵にも出合はずに参りましたが、今井大尉は弗と見ると往手に方つて一ツの小村落があります。此の村落内に敵が居るかも知れせんゆゑ、先づ其の搜索を行はなくてはなりません。そこで大尉は一人の上等兵に向ひまして『オイ貴様、彼の村落を搜索して来い』と命じました。私は残念にも此の上等兵の姓名を聞洩しましたが上等兵は直ちに馬を驅つて勇ましく進み行きました。疑はしき村落と思つたから、馬足を以てタツ／＼と、極めて速かに村落内を通過して、直ちに又た引返して参りましたが、中隊長の前に来るや『村落内に少數の敵兵が居ります』と報告しました。今井大尉は『凡そ何の位居る』と尋ねますと『十名ばかり居ります』『好しッ、それ行けッ』と號令して、我が騎兵は馳せ行きますと、敵は如何さま上等兵の報告の如く十名位しか居ないが、敵の斥候兵と見えます。我が兵を見ると周章で逃げ出しましたが、併し此の搜索に行きましたる上等兵の如きは、寔に好く任務を盡して来た者と思はれます。我が騎兵は逃げる敵兵を逼立て／＼遂に何時しか河西務の南まで参りますと、茲に百名ばかりの敵が出て居りますので、今井大尉は先づ我が兵の行進を一寸止めました。それは何故かと云ふに、成るべく注意に注意を加へつゝ行進しなくてはなりませんからです。斯して先づ敵の状況を觀察しますと、其の歩兵は散じて居るのでムいます。今井大尉は尙何處かに伏兵があるかも知らぬと思ひましたから、そこで左右の兩翼へ斥候を出す事になりました。下士斥候を出しました。些と餘事を申して済みませんが、斥候の任務は至つて重大なるものでありまして、此の斥候の任務の盡し方



が悪くと、勝つべき戦争も敗軍する事が多くなりますので、總て斥候は地形を利用しなくてはならないものでありまして、其の動作は地形の難易、開濶隘蔽等に由つて差異があります。斥候の務めて早く高地に登り敵状を偵察するのが肝要ださうでございまして、それで騎兵斥候の馬に乗り方は初め我が陣地を出ます時は、静かに乗出し、中頃は馬足を早めまして、後敵の陣地に近附いたる時は、又た静々と乗るのださうでございまして、何故ぞうするかと聞いて見るに、我が陣地を静々と乗り出すのは、馬の衛生に宜しく、中頃に速く乗るのは普通の乗法でありまして、後に又た静々と乗るのは、敵に覺られぬやうにして、其の状況を細かに探るの便であります。そうして敵方より我方に歸る時は、初めと中とを早く乗り、後を静かに乗るのです。之は何故かと云ふに、我が陣地に近附く時疾驅すると、何か異状ありしかと、大いに人の疑惑を起さすからでございまして、

今井騎兵大尉は、前に演ぶる如く、下士斥候を兩翼に出して、そうして充分に警戒を加へつゝ居りましたが斥候兵等は途中屢々馬に水を飲ませたいと思ふけれども、井戸のないのに大いに困つて居ります。斥候兵は馬に時々水を飲ましむると云ふ事を忘れないのが肝要ださうでございまして、それは何故かと云ふと、馬を十分に馳驅させて置いて、そうして一度に過量の水を飲ますと、馬の健康を害しますので、時々適度に水を與ふれば、壯健なる馬は、水のみにて能く一週間を堪ふる事が出来ると言ひますが是等の事は騎兵は能く心得て居りますゆゑ、頻りに井戸を搜索しつゝ進行して居りますと、茲に左翼の方へ斥候に出た一人の騎兵

が、井戸らしいものゝあるのを見附出しまして「ヤア軍曹殿彼所に一寸高い所がありました。堂のやうなものが多ありますが、井戸ぢやないか見て参りませうか」下士「ム、見て来い」併し井戸があつても、桶無暗に水を飲んでは不可んぞ、能く注意して飯め、敵の奴が毒でも入れて置いて行くと意なき目に遇ふぞ」「ハイ宜しうございます」と二人の兵士は直ちに馬を馳せて其の高地へ登つて見ますと、關魔王を祭つてある破れ堂でございまして、其の傍に井戸がございまして、騎兵は覗いて見ると、極めて淺うございまして、傍に釣瓶もありまして、其の釣瓶は我國の柳行李の様な編んだもので、矢張釣瓶の如くの形になつて居りますから「蹠蹠な、敵の奴釣瓶を置いて行くとは怪しからん、井戸の中に毒でも打込んで置いたかな、イヤそんなに疑つた日には總ての事が恐くて仕様がなくなる、若し毒が打込んであつて、中毒で死ねばそれまでの天命だ最うく喉が渴いて堪らん、搦ふものか飲め飲め」と汲まんぞ致しますが、編んだ釣瓶へ麻繩が附けてあるのだから、慣れないと容易に汲めませんが、やうやうの事で、一杯汲んで飲んで見ると、水に些しは鹽氣があまりますけれども、渴して居る時ですから、願る甘いのです、彼の兵士は水があまりますと呼ばりつゝ、一人でガブ／＼飲んで居ると、左の方に當つて物音がしまするので、弗と見ると、左方五六百米突の森林中に、敵の歩兵數十名居りまして、我が騎兵の少數なるを見るや、襲撃し來らんとするの模様が見えますので、我が騎兵は釣瓶を投げ棄て置いて走り歸り、之を斥候長に報告しました、そこで斥候長なる下士は勿々大膽なる人ですから「好しッ貴様等此處に居れッ」と號令しましたが、是は今居る此の地點が、動作の自由を保ち



得べき地點と此の下士官が見たからでムいす。總て斥候が敵に出會しました時は、怎麼しても我が動作の自由を保ち得べき地點に出なくてはなりません。特に騎兵斥候に於ては爾でムいす。故に軍曹は斯の如く命じて置いて、大膽にも唯一騎馬を驅つて其の高地へ登り向ふの森林を偵察するに、成程部下騎兵の報告に違はず、敵の歩兵が若干居りますので、並々の人ならば直ちに引返させようが、軍曹は悠々と馬を下りまして、敵の方を見ながら、油断せずに井戸の水を汲んで、釣瓶に口を附けて飲んで居ります。敵も高地の此方に、我兵が澤山居ると思つたのか知らんが、出て来ないのみか、一發も打たないで、五丁位の前方から見て居ります。軍曹は一人心中に「ア、彼奴等も此方に伏兵があると思つて居ると見えるわい甘いく此の間に馬に水飲て遣らう」と、沈着なものです。緩々と水を飲まして、そうして復た馬に乗つて引歸して参りました。兵士等は「軍曹殿怎麼です、敵は出て来る様子はありませんか」と、容易に出て来ない様ぢやな、向ふも此方を疑つて居るらしい、已が一人彼の高地へ登つたのは、誘ひ出す爲めと想像したので出て来ないぢやらう、ナニ敵も澤山は居らぬ、今些し右方を搜索して見やう。此の軍曹の名が分りませんが能く調べて後日お知らせします。

此方は今井大尉、右左兩翼に斥候を出して置いて、待つて居ります。八時一寸前になつて、我が歩兵の前兵が参りました。前兵隊長たる歩兵十一聯隊の第三大隊長村山少佐が、今井騎兵大尉を見て「怎麼ぢや、敵は居かね」今井「ハイ、彼の邊に居ります、今左右の兩翼へも斥候を出しましたが、未だ何の報告もあ

りません」村山「ソム、成程、勿々居るな、是は砲兵が来なくては不可んわい」と云つて居る中に、前衛司令官眞鍋少將も間もなく馬を馳せてお出でになりましたが、馬上から敵の様子を見て「ム、是は砲兵に擊ちさせた方が好い、オイ傳騎、砲兵の所へ行つて、速く前進するやうに言へ、駆足で往け」と命じたので、騎兵は直ちに砲兵を呼びに参りましたが、聽て間もなく砲兵が二個中隊参りました。是は勿論前衛に属する山砲でムりますが、此處へ着きましたのは、恰ど八時二十分頃でムいました。そこで眞鍋少將は砲兵大隊長に直ちに砲兵陣地を選定して、砲撃を加ゆるやうに命令し、次に歩兵の方へは「後隊は村落の後に開進して居れ」と命じて、皆隠蔽して開進させ居ります。其中に師團長も後方まで進まれましたが、此の報告を聞きし、師團本隊は後方へ止めて置いて、參謀方を従へ前衛の所まで前進せよと見ます。今恰と砲兵大隊長が砲兵陣地を選定して居る最中でムいました。山口師團長は眞鍋少將に向つて「砲兵陣地は彼の丘陵が恰と好いではないか彼處が」眞鍋「爾です、多分彼處を選定するでありませんか」と話して居ります。すると、砲兵大隊長は果して此の丘陵を以て、砲兵陣地と定めましたので、直ちに陣地に進入して砲列を引寄せました。山口中將は「砲兵陣地に行つて見やう」と云はれまして、參謀方を従へて丘陵の上に登ります。と、眞鍋旅團長も師團長と共に此處へ参りましたが、丘陵と云ふた所が左程高くはなく併し砲兵陣地に選位ですゆゑ、廣い事は勿々に廣いのでムいます。山口中將も、隨分敵は居るのう、之は意外に居る」眞鍋「左様です、河西務では十分防禦するぢやらうと云ふ事でしたが未だ大方防禦の準備が充分に出来まいと思ふです」